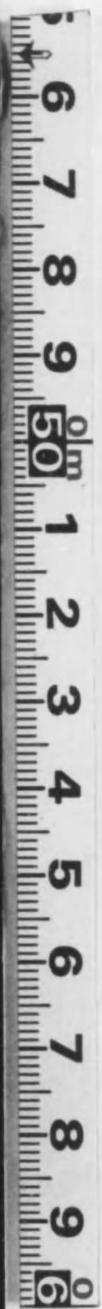


續國譯漢文大成

文學部 三十三

309
65

秩
入



始



續國譯漢文大成

吉田待郎氏 寄贈本

文學部第三十三册 (第九帙の二)
白樂天詩集一の一



309
65

白樂天詩集 第一卷 目次

例言.....一

總說.....一三

卷一

諷諭一

賀雨.....一

讀張籍古樂府.....六

哭孔戡.....九

凶宅.....二

夢仙.....二四

觀刈麥.....一八

題海圖屏風.....二〇

目次

羸駿.....二二

廢琴.....二四

李都尉古劍.....二五

雲居寺孤桐.....二六

京兆府新栽蓮.....二八

月夜登閣避暑.....二九

初授拾遺.....三一

蘇園雜著英文大類

白樂天詩集「卷一」

文學部圖書三十三種「蘇園雜著」

贈元稹	三三	贈內	六三
哭劉敦質	三四	寄唐生	六五
答友問	三六	傷唐衢二首	六九
雜興三首	三七	問友	七三
宿紫閣山北邨	四二	悲哉行	七五
讀漢書	四三	紫藤	七六
贈樊著作	四六	放鷹	七八
蜀路石婦	四八	慈烏夜啼	八〇
折劍頭	五〇	燕詩示劉叟	八二
登樂遊園望	五一	采地黃者	八四
酬元九對新栽竹有懷見寄	五三	初入太行路	八六
感鶴	五四	鄧魴張徹落第	八八
春雪	五五	送王處士	八九
高僕射	五六	村居苦寒	九〇
白牡丹	六〇	納粟	九〇

薛中丞	九二	寄隱者	一〇七
秋池二首	九四	放魚	一〇九
夏旱	九六	文柏林	一一一
論友	九七	潯陽三題并序	一一三
丘中有一士二首	九九	廬山桂	一一三
新製布裘	一〇二	湓浦竹	一一四
杏園中棗樹	一〇三	東林寺白蓮	一一六
蝦蟆	一〇五	大水	一二七

卷 一一			
諷諭 一一			
續古詩十首	一二九	傷宅	一三七
秦中吟十首并序	一三一	傷友	一三九
議婚	一三一	不致仕	一四一
重賦	一三四	立碑	一四四

輕肥……………一四六
 五絃……………一四八
 歌舞……………一四九
 買花……………一五一
 贈友五首并序……………一五三
 寓意詩五首……………一六二
 讀史五首……………一六九
 和答詩十首并序……………一七六
 和思歸樂……………一八〇
 和陽城驛……………一八四
 答桐花……………一八九
 和大鶯鳥……………一九三

卷 三

諷諭三

答四皓廟……………一九八
 和雉媒……………二〇四
 和松樹……………二〇六
 答箭鏃……………二〇八
 和古社……………二一〇
 和分水嶺……………二一三
 有木詩八首并序……………二一四
 歎魯二首……………二二五
 反鮑明遠白頭吟……………二二七
 青塚……………二二九
 雜感……………三三三

新樂府并序……………二三五
 七德舞……………二三六
 法曲……………二四〇
 二王後……………二四三
 海漫漫……………二四五
 立部伎……………二四七
 華原磬……………二五〇
 上陽人……………二五三
 胡旋女……………二五七
 折臂翁……………二六一
 太行路……………二六六

卷 四

諷諭四

驪宮高……………三〇七

司天臺……………二六九
 捕蝗……………二七一
 昆明春……………二七四
 城鹽州……………二七七
 道州民……………二八一
 馴犀……………二八四
 五絃彈……………二八八
 蠻子朝……………二九三
 驪國樂……………二九六
 縛戎人……………三〇〇
 百鍊鏡……………三一〇

青石……………三二二
 兩朱閣……………三一五
 西涼伎……………三一七
 八駿圖……………三三二
 澗底松……………三三五
 牡丹芳……………三三七
 紅線毯……………三三二
 杜陵叟……………三三五
 繚綾……………三三八
 賣炭翁……………三四一
 母別子……………三四三
 陰山道……………三四六
 時世粧……………三四九
 李夫人……………三五二

陵園妾……………三五五
 鹽商婦……………三五八
 杏爲梁……………三六二
 井底引銀瓶……………三六五
 官牛……………三六九
 紫毫筆……………三七〇
 隋堤柳……………三七三
 草茫茫……………三七七
 古塚狐……………三七九
 黑潭龍……………三八二
 天可度……………三八四
 秦吉了……………三八六
 鷄九劍……………三八九
 采詩官……………三九一

卷五

閒適一

常樂里閒居……………三九七
 答元八宗簡同遊曲江後明日見贈……………四〇〇
 感時……………四〇二
 首夏同諸校正遊開元觀因宿觀月……………四〇四
 永崇里觀居……………四〇六
 早送舉人入試……………四〇七
 招王質夫……………四〇九
 祇役駱口因與王質夫同遊秋山偶題三韻……………四一〇
 見蕭侍御憶舊山草堂詩因以繼和……………四一一
 病假中南亭閑望……………四一三
 仙遊寺獨宿……………四一四
 前庭涼夜……………四一五

目次

官舍小亭閑望……………四一五
 早秋獨夜……………四一七
 聽彈古淶水……………四一八
 松齋自題……………四一八
 冬夜與錢員外同直禁中……………四二〇
 和錢員外禁中夙興見示……………四二一
 夏日獨直寄蕭侍御……………四二二
 松聲……………四二四
 禁中……………四二五
 贈吳丹……………四二六
 初除戶曹喜而言志……………四二八
 秋居書懷……………四三一

禁中曉臥因懷王起居.....四三三
 養拙.....四三三
 寄李十一建.....四三四
 旅次華州贈袁右丞.....四三七
 酬楊九弘貞長安病中見寄.....四三八
 禁中寓直夢遊仙遊寺.....四四〇
 贈王山人.....四四一

秋山.....四四二
 贈能七倫.....四四四
 題楊穎士西亭.....四四五
 題贈鄭秘書徵君石溝溪隱居.....四四六
 及第後歸觀留別諸同年.....四四八
 清夜琴興.....四五〇
 效陶潛體詩十六首并序.....四五二

卷六

閒適二

自題寫真.....四七九
 遣懷.....四八〇
 渭上偶釣.....四八二
 隱几.....四八三
 春眠.....四八五

閑居.....四八六
 夏日.....四八八
 適意二首.....四八八
 首夏病閒.....四九一
 晚春沽酒.....四九三

關若寓居.....四九四
 趙生訪宿.....四九五
 聞庾七左降因詠所懷.....四九六
 答卜者.....四九八
 歸田三首.....四九九
 秋遊原上.....五〇四
 九日登西原宴望.....五〇五
 寄同病者.....五〇七
 遊藍田山下居.....五〇八
 村雪夜坐.....五〇九
 東園翫菊.....五一〇
 觀稼.....五一二
 聞哭者.....五一四
 新構亭臺示諸弟姪.....五一五
 自吟拙什因有所懷.....五一七

東坡秋意寄元八.....五一八
 閑居.....五二〇
 詠拙.....五二〇
 詠慵.....五二三
 冬夜.....五二四
 村中留李三固言宿.....五二五
 友人夜訪.....五二七
 遊悟真寺詩.....五二七
 酬張十八訪宿見贈.....五二七
 朝歸書寄元八.....五二九
 酬吳七見寄.....五三二
 昭國閑居.....五三四
 喜陳兄至.....五五六
 贈杓直.....五五七
 寄張十八.....五五九

題玉泉寺.....五六一

朝回遊城南.....五六二

卷七

閒適三

舟行江州路上作.....五六五

北亭獨宿.....五六三

湓浦早冬.....五六六

約心.....五六三

江州雪.....五六七

晚望.....五六四

題潯陽樓.....五六八

早春.....五六五

訪陶公舊宅并序.....五七〇

春寢.....五六六

北亭.....五七三

睡起晏坐.....五六七

泛湓水.....五七五

詠懷.....五六八

答故人.....五七七

春遊西林寺.....五六九

官舍內新鑿小池.....五七九

出山吟.....五九〇

宿簡寂觀.....五八〇

歲暮.....五九一

讀謝靈運詩.....五八一

聞早鶯.....五九二

栽杉.....五九三

弄龜羅.....六一八

過李生.....五九五

栽樹.....六一〇

詠意.....五九六

望江樓上作.....六一一

食笋.....五九八

題座隅.....六三二

避石門洞.....六〇〇

昔與微之同蓄休退之心追尋前約且結後期.....六三四

招東鄰.....六〇一

垂釣.....六二七

題元十八溪亭.....六〇二

晚燕.....六二七

香鑪峯下新置草堂即事詠懷題於石上.....六〇三

贖雞.....六二八

草堂前開一池養魚種荷日有幽趣.....六〇八

秋日懷杓直.....六三一

白雲期.....六〇九

食後.....六三二

登香爐峯頂.....六一〇

齊物二首.....六三三

答崔侍郎錢舍人書問因繼以詩.....六一二

山下宿.....六三五

烹葵.....六一四

題舊寫真圖.....六三五

小池二首.....六一六

閒居.....六三七

閒關.....六一七

對酒示行簡.....六三八

詠懷.....六三九

夜琴.....六四一

山中獨吟.....六四二

卷八

閒適四

自中書舍人出守杭州路次藍溪作.....六四九

初出城留別.....六五二

過路山人野居小池.....六五三

宿清源寺.....六五五

宿藍溪對月.....六五六

自望秦赴五松驛馬上偶睡睡覺成吟.....六五七

鄧州路中作.....六五八

朱藤杖紫驄馬吟.....六六〇

桐樹館重題.....六六〇

達理二首.....六四四

湖亭晚望殘水.....六四六

郭虛舟相訪.....六四八

過紫霞蘭若.....六六一

感舊紗帽.....六六二

思竹窓.....六六三

馬上作.....六六四

秋蝶.....六六七

登商山最高頂.....六六八

枯桑.....六六九

山路偶興.....六七〇

山雉.....六七一

初下漢江舟中作寄兩省給舍.....六七二

自蜀江至洞庭湖口有感而作.....六七四

初領郡政銜退登東樓作.....六七七

清調吟.....六七九

狂歌詞.....六八〇

卷九

感傷一

西明寺牡丹花時憶元九.....六八九

傷楊弘貞.....六九〇

權攝昭應早秋書事寄元拾遺兼呈李司錄.....六九一

新栽竹.....六九三

秋霖中過尹縱之仙遊山居.....六九四

寄江南兄弟.....六九五

曲江早秋.....六九六

郡亭.....六八一

詠懷.....六八三

立春後五日.....六八四

郡中卽事.....六八五

寄題盤屋廳前雙松.....六九八

翰林院中感秋懷王質夫.....六九九

禁中月.....七〇一

贈賣松者.....七〇一

初見白髮.....七〇二

別元九後詠所懷.....七〇三

禁中秋宿.....七〇四

早秋曲江感懷……………七〇五
 寄元九……………七〇六
 春暮寄元九……………七〇八
 早梳頭……………七〇九
 出關路……………七二〇
 別舍弟後月夜……………七二〇
 新豐路逢故人……………七二二
 金鑾子晬日……………七二二
 青龍寺早夏……………七二四
 秋題牡丹叢……………七二五
 勸酒寄元九……………七二六
 曲江感秋……………七二八
 酬張太祝晚秋臥病見寄……………七二九
 立秋日曲江憶元九……………七三一
 早朝賀雪寄陳山人……………七三二

初與元九別後悵然感懷因以此寄……………七三三
 和元九悼往……………七三八
 重到渭上舊居……………七三九
 白髮……………七三一
 秋日……………七三三
 將之饒州江浦夜泊……………七三四
 思歸……………七三五
 冀城北原作……………七三七
 客路感秋寄明準上人……………七三九
 游襄陽懷孟浩然……………七四〇
 秋暮西歸途中書情……………七四一
 秋懷……………七四二
 別楊穎士·盧克柔·殷堯藩……………七四三
 題贈定光上人……………七四五
 祇役駱口驛喜蕭侍御書至……………七四六

酬李少府曹長官舍見贈……………七四八
 留別……………七四九
 曉別……………七五一
 北園……………七五一
 惜柿李花……………七五二
 照鏡……………七五三

新秋……………七五四
 夜雨……………七五五
 秋江送客……………七五五
 感逝寄遠……………七五六
 秋月……………七五八

例言

- 一、本書は清の汪立名の編訂する所の白香山詩集を以て底本とせり。
- 一、本書詩篇の正文、稀に汪本と異なるものあるは、全唐詩・唐宋詩醇等を参照して予の改訂せるものなり。
- 一、二三の選本・詩話・隨筆に見ゆるものを除く外、白詩には古來註釋書なし。予の謬陋を以て敢て之を解釋す。佛頭糞を著くるの譏を免るを得ば幸なり。

昭和三年八月

著者識

例言

白樂天詩集總說

一、白樂天の詩

詩は唐代に於て全盛を極めたり。是を以て詩人輩出し殆ど屈指に違なきほどなり。試に一部の全唐詩を取りて之を檢せよ。作者二千二百餘人。その作る所の詩篇四萬八千九百餘首の多きに上るを見るべし。されど其類を出で其萃に抜くものを求むれば、盛唐に於ては李太白・杜少陵を推し、中唐に於ては韓退之・白樂天を推さざるべからず。李・杜・韓三家に就いては姑く措いて論せず。ここに白詩に就いて少しく考究する所あらんとす。

白詩の今に存する者三千八百餘首。其數に於ては唐賢中第一位に居る。然らば其價值は如何。清の趙翼の甌北詩話に云く、

中唐の詩、韓愈、字孟郊、字退之、孟郊、字東野、元稹、字微之、白居易、字居易、字樂天、を以て最となす。韓愈は奇警を尙び、務めて人の敢て言はざる所を言ふ。元稹・白居易は坦易を尙び、務めて人の共に言はんと欲する所を言ふ。試に平心に之を論ずるに、詩は性情に本づく。當に性情を以て主となすべし。奇警なるものは猶ほ第詞句の間に在りて難を争ひ險を闘はし、人をして心を蕩し目を駭かし敢て廻り視ざらしむ。而かも意

味或は少し。坦易なるものは多く景に觸れて情を生じ事に因つて意を起し、眼前の景、口頭の語、自ら能く人の心脾に沁し人の咀嚼に耐ふ。此れ元・白・韓・孟に勝れり。世徒輕俗を以て之を警るは、此れ詩を知らざる者なり。

と。これ眞に允當の見と謂ふべし。樂天は務めて人の共に言はんと欲する所を言ふ。眼前瑣屑の光景一一之を詩にしたり。彼の作る所の醉吟先生墓誌銘に云く、

凡そ平生慕ふ所、感ずる所、得る所、喪ふ所、經る所、遍る所、通ずる所、一事一物より已上、布いて文集の中に在り、卷を開けば盡く知るべきなり。

と。彼の詩材は眼前咫尺の間に在り。一事一物の微といへども詩に入らざるはなし。彼は此等の詩材を拉し來りて一一之を曲盡せんことを期したり。他人の言ひて七八分に至り、餘情を一二分の間に留むるもの、彼は必ず十二分に之を言ひ盡さんとせり。杜少陵の

訪舊半爲鬼。驚呼熱中腸。

といふもの、彼は

昨日聞三甲死。今日聞三乙死。知識三分中。二分化爲鬼。

逝者不復見。悲者長已矣。

といふ。これ動もすれば冗漫に流れて含蓄を缺く所以なり。されば唐の杜牧は白詩を讀りて、

蝶、莊人雅士の爲す所にあらずといひ、宋の蘇東坡は元輕白俗といひ、甚しきに至りては、宋の釋惠洪の冷齋夜話に見ゆる、

樂天詩を作る毎に一老嫗をして之を解せしめ、解すれば則ち之を録し、解せざれば則ち又之を易ふ。との附會説を生ずるに至れり。夫れ物に長短あり事に優劣あり。一長一短、一優一劣は數の免れざる所なり。白詩は和平なり坦易なり異率なり。是れ其長所なり優所なり。白詩に向つて杜少陵の老蒼沈鬱を求め、李太白の豪宕飄逸を求むるは求むる者の誤なり。金の王若虛の滄南詩話に、

樂天の詩、情致曲盡し、人の肝脾に入り、物に隨つて形を賦し、所在充滿し、殆ど元氣と相伴し。長韻大篇動もすれば數百千言、而して順適愜當句句一の如く、爭張牽強の態なし。此れ豈に吟詠を燃断し口吻を悲鳴する者の能く至る所ならんや。而るに世或は淺易を以て之を輕んず。蓋し與に言ふに足らざるなり。

といへるは、よく此間の消息に通せるの言なり。清の袁枚の隨園詩話に、周元公が白香山の詩平易に似たるも、間存する所の遺稿を觀るに塗改甚だ多く、竟に終篇一字を留めざるものあり。

といへるを引きて樂天の詩に、
舊句時時改。無妨悅性情。解詩

とあるを證せる一條あり。されば彼の和平淺率は唯漫然率然として成れるものにあらず、自ら求めて意識的に工夫せる結果なるを知るべし。かくの如く前人の窠臼を襲はず、別に一機軸を出して獨得の境地を開拓し、而かも十二分の成功を贏ち得たるを見れば、彼は決して尋常一様の凡手にあらず。則ち堂堂たる平民的詩人なり。大衆的詩人なり。

彼は大衆的詩人なり。平民的詩人なり。されば萬人共通の心理を抉剔し、平易簡明の語を假りて之を萬人の前に披瀝したり。是を以て彼の詩は歴なくして走り翼なくして飛び、忽ち一時に盛行するに至れり。元稹の白氏長慶集序に云く、

予始め樂天と校秘書の名を同うせしとき、多く詩章を以て相贈答す。會予罷せられて江陵に據たり。樂天猶は翰林に在りて予に百韻の律詩及び雜體を寄すること前後數十章。この後各江州の通名に佐たり。復た相酬寄す。巴蜀江楚の間泊び長安中の少年、遽に相倣效し競つて新詞を作る。自ら謂うて元和の詩となす。而して樂天が「秦中吟」「賀雨」「諷諭等」の篇は、時人能く知る者罕なり。然れども二十年の間に於て、禁省觀寺郵候、墻壁の上書せざるなく、王公妾婦、牛童馬走の口道はざるなし。繕寫模勒して市井に街賣するに至る。或は之を持して以て酒茗に交ふる者處處皆是れなり。其甚しき者は名聲を盜竊して、苟も自ら售らんことを求むるに至るあり。

と。樂天も與三元九一書に於て亦自ら其詩の一時に流行したることを述べて云く、

再び長安に來るに及び、又聞く、軍使高霞寓といふ者あり。倡妓を聘せんと欲す。妓大に誇りて曰く、我白學士が「長恨歌」を誦し得。豈に他の妓に同じからんやと。是に由りて價を増せりと。又昨に漢南を過ぎし日、適主人の衆を集めて他賓を樂娛せしむるに遇ふ。諸妓僕の來るを見、指して相顧みて曰く、此は是れ「秦中吟」「長恨歌」の主のみと。長安より江西に抵るまで三四千里。凡そ郷校佛寺逆旅行舟の中、往往僕の詩を題するものあり。士庶僧徒、孀婦處女の口、毎僕の詩を詠する者あり。

と。亦以て一世を風靡したるを見るべし。

然れども彼は徒に民衆の喝采を博するを以て念となし、俗衆の歡心を買はんことを務むる者にあらざるなり。彼は與三元九一書に於て詩に就いての持論を述べて曰く、

夫れ文は尙し。三才各文あり。天の文は三光日月之が首たり。地の文は五材金木土之が首たり。人の文は六經詩書易春秋禮樂之が首たり。六經に就いて言へば詩文之が主たり。何となれば聖人は人心を感せしめて天下和平なればなり。人心を感せしむるは情より先なるはなく、言より始なるはなく、聲より切なるはなく、義より深きはなし。詩は情を根にし言を苗にし聲を華にし義を實にす。上は賢聖より下は愚騷に至り、微は豚魚に及び、幽は鬼神に及ぶまで、羣は分るるも氣は同じく、形は異なるも情は一なり。未だ聲入りて應せず、情交りて感せざるものあらず。聖人は其の然るを知

り、其言に因つて之を經するに六義を以てし、其聲に緣つて之を緯するに五音を以てす。音に韻あり義に類あり。韻協へば則ち言順なり。言順なれば則ち聲入り易し。類舉れば則ち情見る。情見れば則ち感交り易し。是に於てか大を孕み深を含み微を貫き密を洞し、上下通じて一氣泰く、憂樂合して百志熙まる。略言ふ者罪なく、聞者戒と作す。言ふ者聞者兩ながら其心を盡さざるはなし。周衰へ泰興るに泊び探詩の官廢る。上は詩を以て時政を補察せず、下は歌を以て人情を洩導せず。乃ち詔成の風動いて救失の道缺くるに至る。時に六義始めて刊らる。略中陵夷して梁陳の間に至りては、率ね風雪を嘲り花草を弄ぶに過ぎざるのみ。唯風雪花草の物三百篇中豈に之を捨てんや。用ふる所何如を顧るのみ。設へば「北風其涼」の如きは風を假りて以て威虐を刺るなり。「雨雪霏霏」は雪に因つて以て征役を感むなり。「棠棣之華」は華に感じて以て兄弟を諷するなり。「采芣苢」は草を美して以て子あるを樂むなり。皆興は此より發して義は彼に歸す。是に反せば可ならんや。然らば則ち「餘霞散成綺。澄江淨如練。」「離花先委露。別葉乍辭風。」の什、麗は則ち麗なり。吾その諷する所を知らず。故に僕の所謂風雪を嘲り花草を弄ぶのみ。時に六義盡く去る。唐興りて二百年、其間詩人勝げて數ふべからず。舉ぐべき所の者は、陳子昂に感遇詩二十首あり。鮑勣に感興詩十五首あり。又詩の豪なる者なり。世に李杜を稱す。李の作は才已に奇なり。人逮ばず。其風雅比興を索むれば十に一なし。杜が詩最も多く、傳ふべきもの千餘篇。今古

を貫穿し格律を亂糺するに至りては、工を盡し善を盡すこと又李に過ぎたり。然れども亦三四十首に過ぎず。杜すら尙ほ此の如し。況んや杜に逮ばざる者をや。僕嘗て詩道の崩壊せるを痛み、忽忽として憤發し、或は食して哺を輟め夜寢を輟め、才力を量らずして之を扶け起さんと欲す。略拾遺より來、凡そ適する所、感ずる所、美刺興比に關するもの、又武德より元和に訖るまで事に因り題を立て、題して新樂府となすもの、共に一百五十首、之を諷諭詩と謂ふ。又或は公より退いて獨處し、或は病を移して閑居し、足を知り和を知りて情性を吟翫するもの、之を閑適詩と謂ふ。又事物外に牽いて情理内に動き、感遇に隨つて歎詠に形るもの、之を感傷詩と謂ふ。又五言七言長句絶句、一百韻より兩韻に至るもの四百餘首あり。之を雜律詩と謂ふ。略僕志兼濟に在り行、獨善に在り。奉じて之を始終すれば則ち道となり、言うて之を發明すれば則ち詩となる。之を諷諭詩と謂ふは兼濟の志なり。之を閑適詩と謂ふは獨善の義なり。故に僕の詩を覽ば僕の道を知らん。其餘の雜律詩は或は一時一物に誘かれ、一笑一吟に發し、率然として章を成す。平生尙ぶ所のものにあらず。但親朋合散の際、其の恨を釋き權を佐くるを取るを以て、今銓次の間未だ刪り去る能はず。他時我が爲に斯文を編集する者あらば、之を略して可なり。略今僕の詩、人の愛する所のもの、悉く雜律詩と長恨歌已下とに過ぎざるのみ。時の重んずる所は僕の輕んずる所なり。諷諭に至りては意激して言質なり。閑適は思澹にして詞迂なり。質を以て迂に合ふ。宜なり人の愛せ

ざるや。略下

と。されば風雪を嘲り花草を弄ぶは彼の志にあらず。彼は詩を以て道を託するの具となし、之を以て諷諭譏諷し、經國濟民の一助たらしむるに在りしなり。故に其の朝に在るや忠誠蹇諤抗論して回せず。傍ら「秦中吟」、「新樂府」を作りて憂憤を洩せり。唐宋詩醇に、

唐人の詩、篇什最も富むもの、白居易の詩に如くはなし。其源亦杜甫より出づ。中杜甫の雄渾蒼勁を變じて流麗安詳となす。其面貌を襲はずして其神味を得たるものなり。

といへるは、知言といふべし。

彼志業立たず、一たび江州に貶せらるるや、復た功名に意なく、絶えて諷諭詩を作らず、蕭散閒適、塵土を擺脫して萬化と冥合せんと志し、専ら陶家の藩籬を視ふに至れり。歐北詩話に云く、

香山の詩、恬淡閒適の趣、多く之を陶明韋物塵に得たり。其の「自吟三抽什」に云く、時時自吟咏。吟罷有所思。蘇州及彭澤。與我不同時。此外復誰愛。惟有三元微之。又「題三浮陽樓」に云く、常愛陶彭澤。文思何高玄。又怪章蘇州。詩情亦清閒。此れ以て其趨向の在る所を觀るべきなり。晩年自ら其適を適とし、但其意の言はんと欲する所を道ひ、一の雕飾なきは、實に力を二公に得たるのみ。

と。又與三元九一書にも、

章蘇州が歌行、清麗の外頗る興諷に近し。其五言の詩又高雅閒澹、自ら一家の體を成す。今の筆を乗る者誰か能く之に及ばん。

といひて歸向の意を漏らせり。

されば彼の諷諭詩は、杜少陵の衣鉢を傳へて和平坦易の一派を開き、閒適詩は陶・章の餘流を挹んで能く其源に逢ふものなり。特に長恨歌・琵琶行・遊・悟眞寺・詩の如きは古來稀に見る長篇にして、他人の追隨を許さざる所なり。樂天、李德裕と隙あり。德裕其詩を屏けて觀ず。劉禹錫以て言を爲す。德裕曰く、吾斯人に於て足れりとせざることを久し。之を覽ば恐らくは吾が心を回さんと。ああ彼の詩は怨家仇人と雖も、少しも毀りて之を掩蔽する能はざるなり。豈に偉ならずや。

彼の詩を論ずるに當り、併せ述べざるべからざるは、其の次韻と稱する一格を創めたることは是れなり。ここに歐北詩話の言を借りて予が説明に代へん。詩話に云く、

大凡才人名を好む、必ず前古未だ有らざる所を創めて後以て世に傳はるべし。古來ただ和詩ありて和韻なし。唐人には和韻ありて尙ほ次韻なし。次韻は實に元・白より始まる。次に依りて韻を押し、前後差はず。此れ古未だ有らざる所なり。而かも且つ長篇累幅、多きは百韻に至り、少きも亦數十韻。能を争ひ巧を鬪はし層出して窮まらず。此れ又古未だ有らざる所なり。他人の和韻は一二首に過ぎず。元・白は則ち多きこと十六卷、凡て一千餘篇に至る。此れ又古未だ有らざる所なり。



此を以て別に一格を成し一世を推倒せば、自ら傳はらざる能はず。蓋し元・白此一體歴代に無き所、此より奇を出すべきを覷ふ。自ら才力を量るに又之を爲すに餘あり。故に一往一來、彼此勝を角し、遂に之を以て場を擅にす。微之上令狐相公書に謂へらく、同門生白居易、文字を驅駕するを愛し聲韻を窮極す。或は千言或は五百言。小生自ら揣摩るに以て之に過ぐる能はず。往往戯れに舊韻を排し、別に新詞を創め、名づけて次韻となす、蓋し難を以て相挑まんを欲するのみと。白の與元書にも亦謂へらく、敵すれば則ち氣作り、急なれば則ち生を計る。以ふに足下の來章惟相困めんことを求む。故に老僕の報語覺えず太だ誇ると。此を觀ば以て二公才力の大を見るべし。今兩家次韻の詩、具に五言排律に在り。實に工力悉く敵し勝負を分たす。惟古詩往往、和、唱に及ばず。

と。元・白二公一たび此格を創めてより、後世の詩人皆その響に倣ひ、技を馳せ工を争ふに至れり。

一一、白樂天の詩友と詩集

白樂天の詩友として最も關係深き者二人あり。元稹及び劉禹錫是れなり。元稹、字は微之、河南河内の人なり。幼にして孤、母鄭氏賢にして文あり。親しく書傳を授く。明經・書判に擧げられて等に入り、校書郎に補せられ、元和の初、樂天と俱に制舉に應じて第一に及第し、左拾遺に除せらる。その

樂天と相知りしは當に此頃に在るべし。進んで監察御史となり、事に坐して江陵士曹參軍に貶せられ、居ること四年通州司馬に徙り、又四年にして虢州長史に移る。長慶の初、穆宗位を嗣ぐに及び、微されて膳部員外郎となり、祠部郎中・知制誥に轉じ、召されて翰林に入りて中書舍人・承旨學士となり、工部侍郎同平章事に進む。即ち宰相の任なり。居ること三月にして相を罷め、出されて同州刺史となり、二年にして越州に改められ、御史大夫・浙東觀察使を兼ね。越に在ること八年、太和の初、入りて尚書左丞・檢校戸部尚書となり、鄂州刺史・武昌軍節度使を兼ね、鄂に在ること三年。年五十三にして卒す。時に太和五年七月二十二日なり。尚書左僕射を贈らる。集あり元氏長慶集といふ。

稹少時より白樂天と唱和し、當時詩を言ふ者元・白と稱し、號して元和體といふ。然れども稹の性躁急にして顯榮を冀ひ、中ごろ廢斥せらるること十年、道を信すること堅からずして守る所を喪ひ、官貴に附きて宰相となるや、婁度と相軋り、讒を清議に貽すに至る。且つ局量狭小にして後進を侮蔑し、李賀・張祐の輩皆彼の爲に仕進を妨げられたりといふ。その人品固より取るに足らず。樂天の恬淡閑適と相似ざること遠し。其詩に至りては甌北詩話に、

元・白二人、才力本より相敵す。然れども香山洛に歸りてより以後、益老幹の枝なきを覺ゆ。心に稱ひて出で筆に隨ひて抒寫し、竝に工を求め好を見すの意なし。而も風趣横生、一噴一醒。少年の時微之と各才情工力を以て勝を競ひしものに視ぶれば、更に一籌を進む。故に白自ら大家と

成し、而して元稍次ぐ。

といふもの、誠に然り。

元稹の死は、樂天の死に先だつこと十有五年。元稹の一たび死するや樂天は劉禹錫と唱和し、劉・白の稱あり。禹錫、字は夢得、彭城の人。中山の人。貞元九年、進士の第に擢んでられ博學宏詞科に登り、淮西の幕府に従事たり。元和の初、入りて監察御史となる。時に王叔文事を用ふ。禁中に引き入れ之と圖議す。言従はざるはなし。屯田員外郎・判度支鹽鐵案に轉ず。叔文の失脚するや、坐して連州刺史に貶せられ、道に在りて朗州司馬に貶せらる。史に所謂八司馬の貶といふものは是れなり。遂に落魄して自ら聊んせず、吐詞多くは飄詭幽遠なり。蠻俗巫を好む。嘗て騷人の旨に依り其聲に倚りて竹枝詞十餘篇を作る。武陵黔洞の間、悉く之を歌ふ。居ること十年、召し還して將に之を郎署に置かんとす。自朗州至京戲贈諸君と題する、

紫陌紅塵拂面來。無人不道看花回。玄都觀裏桃千樹。盡是劉郎去後栽。

の詩を賦するや、執政以て讖忿に涉るとなし、又出して播州に刺たらしむ。裴度其母の老いたるを憐み、爲に哀を帝に乞ふ。乃ち連州に改めらる。後、夔和二州に徙り、徵されて主客郎中となる。また重游玄都觀と題する、

百畝筵中半是苔。桃花淨盡菜花開。種桃道士歸何處。前度劉郎今又來。

の詩を作りしを以て、又出されて東都に分司たり。度仍は薦めて禮部郎中・集賢直學士となす。度の罷むるや出されて蘇州に刺たり。汝・周二州に徙り、太子賓客・分司東都に遷る。禹錫素より詩を善くす、晩年尤も精。不幸にして坐廢し、合ふ所寡し。乃ち文章を以て自適し、樂天と酬復すること頗る多し。會昌三年、七十二を以て卒す。檢校禮部尙書を贈らる。樂天詩を作りて之を哭す。集あり劉賓客文集といふ。其詩は含蓄足らざれども精銳餘あり。氣骨亦元白の上在り。

白樂天の詩集はもと五本あり。最初に編纂せるものは白氏長慶集と題し、元稹の排纂に係る。稹、白氏長慶集序を作りて云く、

長慶四年、樂天杭州刺史より左庶子を以て詔還せらる。予時に會稽に刺たり。因つて盡く其文を徵するを得、手自ら排纂して五十卷と成す。凡て二千一百九十一首。前輩多く前集・中集を以て名となす。予以爲らく、陛下明年秋當に改元すべし。長慶是に訖ると。因つて號して白氏長慶集といふ。と。長慶集收むる所の詩文は長慶二年冬に訖る。事、樂天自ら作る所、會昌五年五月一日、樂天又白氏文集自記を作りて云く、

白氏前に長慶集五十卷を著す。元微之序を爲る。後集二十卷、自ら序を爲る。今又續後集五卷、自ら記を爲る。前後七十五卷、詩筆なり、大小凡て三千八百四十首。集五本あり。一本は廬山東林寺經藏院に在り。(太和九年、二千九百)一本は蘇州南禪寺經藏院に在り。(開成四年、三千四百八)一本は東都聖善

寺鉢塔院の律庫樓に在り。(開成元年。三千二百) 一本は姪龜郎に付し、一本は外孫談閣童に付し、各家に藏し後に傳へしむ。

と。而して樂天手定する所のものは皆題して白氏文集といふ。然れども古來七十五卷本をも長慶集と呼び慣せり。宋代既に三卷を亡す。今存するもの七十一卷。目錄を併せて七十二卷なり。本書據る所の清の汪立名の白香山詩集は文を除きて専ら詩を編集せるものにして、考證編排特に精密、最も善本となす。

三、白詩の流傳

白樂天の詩が廣く世人に傳誦せられしことは既に前に述べたり。而も獨り支那本土に止まらず、遠く海外に及びしことは、元稹の白氏長慶集序に、
雞林の賈人市に求むること頗る切なり。自ら云ふ、本國の宰相毎に百金を以て一篇に換ふ。其甚だ偽なるものは宰相輒ち能く之を辨別すと。篇章ありてより以來、未だ是の如く流傳の廣きものあらざるなり。

とあり、又樂天の白氏文集自記に、
日本・新羅諸國及び兩京の人家に傳寫する者は、此記に在らず。

とあるを以て明なり。白詩の一たび我邦に傳來するや文選と共に文人學士の必讀書となり、我が文壇に大影響を及ぼしたることは昔人の知る所なり。ここに少しく白詩に關する史實を擧げ以て其一斑を示さん。嵯峨帝嘗て河陽館に幸し、詩を賦して曰く、閉閣只聽朝暮鼓。上樓遙望往來船と。之を小野篁に示す、篁曰く、聖作玄淵、臣等の議すべきにあらず。然れども遙の字未だ妥ならざるに似たり。若し改めて空の字となさば奈何と。帝驚いて曰く、これ白氏の句なり。もと空に作る。卿の詩思既に樂天に同じきかと。この時白集一部ひとり御府に存せしのみといふ。嵯峨帝の御宇は唐の元和・長慶の交に當る。樂天尙ほ世に在り。その集早くも我邦に傳來せるを證すべし。菅原道真太宰府に在り不出門と題する詩を賦す。その都府樓樓看五色。觀音寺只聽鐘聲の一聯は、白詩の遺愛寺鐘歌枕聽。香鑪峰雪撥簾看に換せるものなるべく、清少納言が雪曉に簾を掲げて奇才を絶稱せられしも亦此句を諳記せるが爲なり。村上帝嘗て大江朝綱・菅原文時を二人をして、白集壓卷の詩一首を選び、各封を別にして上らしむ。帝親ら之を啓けば、同じく送蕭處士遊黔南の詩なり。因つて嘆じて曰く、卿等の鑒識何ぞ乃ち符合すると。又藤原公任の倭漢朗詠集を撰するや、白氏の詩句を引くこと一百三十八條の多きに及びぬ。又高倉天皇は樂天の林間煖酒燒紅葉石上題詩掃綠苔の二句に因つて仕丁の罪を問はざりきといふ。清少納言の枕草紙に「文は文集、白氏文集、文選、はかせの申文」といひ、兼好法師の徒然草に「文は文選のあはれるる卷卷、白氏文集云云」といへる、皆白詩の珍重せられし

を證するに足る。

四、白樂天の思想

七十五年の壽命を保ち、浮沈定なき生涯を送り、三千八百餘首の詩篇を留め、憂へず懼れず又感はず、儻然として此世を去りし樂天の思想人品は如何なりしか。彼自ら醉吟先生墓誌銘に記して曰く、外は儒行を以て其身を修め、中は釋教を以て其心を治め、旁ら山水風月歌詩琴酒を以て其志を樂ましむ。

と。夫れ儒學の極致は治國平天下に在り。彼初め憲宗の恩遇を蒙り諫職に在るや、兼濟の志方に壯にして、慨然として天下を以て自ら任じ、屢上疏して時事を論ず。然れども事志と違ひ江州に貶謫せらるるに及んでは、宦情衰落して復た當世に意なく、ただ祿仕に甘んじ、天を怨みず人を尤めず、權位利勢の外に超然たり。孟子の所謂窮しては則ち其身を善くし、達しては則ち兼ねて天下を善くするもの、吾樂天に於て之を見る。彼開成三年、六十七歳の時、陶淵明の五柳先生傳に倣ひ醉吟先生傳を作りて云く、

醉吟先生は其姓字郷里官爵を忘る。忽忽として吾が誰たるかを知らざるなり。宦遊三十載、將に老せんとして洛下に退居す。居る所に池あり五六畝、竹數千竿、喬木數十株、臺榭舟橋、體を具へて

微なり。先生焉に安んず。家貧なりと雖も寒餓に至らず、年老いたりと雖も未だ老に及ばず。性酒を嗜み琴に耽り詩に淫す。凡そ酒徒琴侶詩客多く之と遊ぶ。遊ぶの外、心を釋教に棲ましむ。小中大乗の法を通學す。嵩山の僧如滿とは空門の友たり。平泉の客韋楚とは山水の友たり。彭城の劉夢得とは詩友たり。安定の皇甫明之とは酒友たり。一たび相見る毎に欣然として歸るを忘る。中長吁太息して曰く、吾天地の間に生れ、才と行と古人に逮ばざること遠し。而るに黔婁よりも富み、瀕淵よりも壽に、伯夷よりも飽き、榮啓期よりも樂み、衛叔實よりも健なり。幸甚幸甚。餘は何をか求めんや。若し吾が好む所を捨つれば何を以てか老を送らんと。因つて自ら詠懐の詩を吟じて云く、抱琴榮啓樂。縦酒劉伶達。放眼看青山。任頭生白髮。不知天地内。更得幾年活。從此到終身。盡爲三閏日月。と。吟じ罷めて自ら晒ひ、妻を掲げ酷を撥して又數杯を引く。兀然として醉ふ。既にして醉復た醒め、醒めて復た吟じ、吟じて復た飲み、飲みて復た醉ひ、醉吟相仍り循環の若く然り。是に由りて以て身世を夢にし富貴を雲にし、天地に幕席し百年を瞬息するを得、陶陶然たり、昏昏然たり、老の將に至らんとするを知らず。古の所謂全きを酒に得る者なり。故に自ら號して醉吟先生と爲す。略下

と。以て優游自適の狀を察すべし。而して樂天が資りて以てこの知足安分、樂天委命の思想を養ひしものは佛敎なり、禪學なり。早梳頭に云く、

夜沐早梳頭。窗明秋鏡曉。颯然握中髮。一沐知一少。年事漸蹉跎。世緣方繳繞。不學空門法。老病何由了。未得無生心。白頭亦爲天。自覺に云く、

朝哭心所愛。暮哭心所親。親愛零落盡。安用身獨存。幾許平生觀。無限骨肉恩。結爲腸間痛。聚爲鼻頭辛。悲來四肢緩。泣盡雙眸昏。所以年四十。心如七十人。我聞浮圖教。中有解脫門。置心爲止水。視身如浮雲。斗撒垢穢衣。度脫生死輪。胡爲戀此苦。不若去猶逡巡。回念發弘願。願此見在身。但受過去報。不結將來因。誓以智慧水。永洗煩惱塵。不將恩愛子。更種悲憂根。

と。是等の詩を讀まば、樂天が佛道を修して心の和平を求めしことを知るに足らん。當時は道教思想大に流行し、仙藥を煉り不老長生を冀ふ者多かりしことは、醉吟先生傳・夢仙・海漫漫等に由りて明なるが、彼は常に此等の輩を冷笑せり。されば彼の思想は道教思想に本づくものなきにあらずと雖も、佛教に負ふ所極めて多しと謂はざるべからず。杜少陵を以て儒教的詩人、李太白を以て道教的詩人といふべくんば、彼は佛教的詩人といふべきなり。釋教を以て其心を治めたる樂天は、更に詩酒を以て消遣の具に供したり。酒を以て胸中の憂を銷するは支那詩人の常情なるを以て、繁を厭ひて復た之を詳述せず。

五、白氏世系表



六、白樂天年譜

日本年代	支那年代	年齢	紀	事
光仁天皇 寶龜三年壬子	唐代宗大曆七年	一歲	正月二十日、鄭州新鄭縣東郭ノ宅ニ生ル。時ニ父季庚四十四歲、母穎川ノ陳氏十八歲。	
寶龜七年丙辰	大曆十一年	五歲	詩ヲ作ルコトヲ學ブ。	

寶龜十年己未	大曆十四年	八歲	五月代宗崩シ德宗位ニ即ク。
寶龜十一年庚申	德宗建中元年	九歲	暗ニ聲韻ヲ識ル。
桓武天皇天應元年辛酉	建中二年	十歲	父季庚徐州彭城ノ令トナル。
桓武天皇延曆二年癸亥	建中四年	十二歲	父季庚徐州別駕ニ超拜ス。
延曆三年甲子	德宗興元元年	十三歲	十月涇原ノ兵亂ヲナス。朱泚反シテ長安ニ據ル。帝奉天ニ蒙塵ス。
延曆五年丙寅	德宗貞元二年	十五歲	正月、李希烈僭號ス。七月、車駕長安ニ還ル。
延曆六年丁卯	貞元三年	十六歲	四月、淮西ノ將陳仙奇、李希烈ヲ殺シテ降ル。以テ淮西節度使トナス。七月、吳少誠仙奇ヲ殺ス。少誠ヲ以テ留後トナス。吐蕃入寇ス。居易難ヲ避ケテ蘇杭ノ間ニ在リ。
延曆十三年甲戌	貞元十年	二十三歲	初メテ長安ニ至リ、文ヲ袖ニシテ願況ニ謁ス。父季庚襄陽ノ官舎ニ卒ス。(季庚ハ衢州ヨリ襄州ニ移ル。其年月考フベカラズ)年六十六。
延曆十七年戊寅	貞元十四年	二十七歲	九月、淮西ノ吳少誠反ス。陽城ヲ貶ス。
延曆十八年己卯	貞元十五年	二十八歲	兄幼文浮梁ノ主簿トナル。居易從ヒ行ク。
延曆十九年庚辰	貞元十六年	二十九歲	宣州ノ試ニ中ル。居易從ヒ行ク。
延曆二十一年壬午	貞元十八年	三十一歲	二月、中書舎人高郢ガ下ニテ及第ス。實ニ第四人ナリ。鄭珣選部ヲ領ス。居易試判拔萃科ニ及第シ、秘書省校書郎ヲ授ケラル。

延曆二十二年癸未	貞元十九年	三十二歲	始メテ長安ニ於テ假居ヲ求メ、常樂里ノ故ノ關相國ノ東亭ヲ得テ之ニ居ル。
延曆二十三年甲申	貞元二十年	三十三歲	渭上ニト居ス。
延曆二十四年乙酉	順宗永貞元年	三十四歲	正月、德宗崩ジ、順宗位ニ即ク。韋執誼・王任・王叔文等事ヲ用フ。八月、順宗位ヲ太子ニ傳ヘ、自ラ太上皇ト稱ス。憲宗位ニ即ク。
平城天皇大同元年丙戌	憲宗元和元年	三十五歲	正月、順宗崩ズ。四月、元稹ト制舉ニ應ジ、元稹ハ第三等、居易ハ第四等ニ入ル。元稹ハ拾遺トナリ、居易ハ監屋縣尉トナル。
大同二年丁亥	元和二年	三十六歲	集賢校理トナリ、十一月、翰林學士ヲ授ケラル。
大同三年戊子	元和三年	三十七歲	制策考官トナル。四月、左拾遺ヲ授ケラル。此年若クハ前年楊氏ヲ娶ル。楊穎士ノ從父妹ナリ。
大同四年己丑	元和四年	三十八歲	去年冬ヨリ久シク早ス。春ニ至リテ始メテ雨フル。賀雨ノ詩ヲ作ル。女金鑿生ル。
嵯峨天皇弘仁元年庚寅	元和五年	三十九歲	監察御史元稹、江陵士曹ニ貶セラル。居易上疏シテ元稹ヲ救ハントス。五月、京兆戶曹參軍ニ除セラル。女金鑿死ス。
弘仁二年辛卯	元和六年	四十歲	四月三日、母陳氏長安宣平里ノ第ニ卒ス。年五十七。居易母ノ喪ニ丁リ、渭上ニ退居ス。
弘仁五年甲午	元和九年	四十三歲	秋八月、悟真寺ニ遊ブ、詩アリ。冬入朝、太子左贊善大夫ニ拜セララル。
弘仁六年乙未	元和十年	四十四歲	正月、吳元濟反ス。三月、劉禹錫ヲ以テ朗州刺史トナス。五月、御史中丞裴度ヲ遣シ、淮西行營ヲ宣慰セシム。六月、賊アリ宰相武元衡ヲ殺ス。裴度ヲ相トス。居易上疏シテ武元衡ヲ刺セル賊

弘仁八年丁酉	元和十二年	四十六歲	九月、崔羣同平章事タリ。居易江州ニ在リ。廬山ノ香鑪峯下ニ草堂ヲ築ク。十月、李愬夜蔡州ヲ襲ヒ吳元濟ヲ擒ニス。
弘仁九年戊戌	元和十三年	四十七歲	十二月、忠州刺史ニ除セラル。
弘仁十年己亥	元和十四年	四十八歲	正月、佛骨ヲ迎フ。韓愈之ヲ論ジテ潮州ニ貶セラル。三月二十八日、忠州ニ到ル。十月、崔羣罷メテ湖南觀察使トナル。
弘仁十一年庚子	元和十五年	四十九歲	正月、憲宗暴ニ中和殿ニ崩ズ。閏月、穆宗位ニ即ク。五月、元稹ヲ以テ祠部郎中、知制誥トナス。冬、居易忠州ヨリ召シ還サレ、尙書司門員外郎ニ拜セラレ、主客郎中、知制誥ニ轉ズ。
弘仁十二年辛丑	穆宗長慶元年	五十歲	朝散大夫ヲ加ヘラレ、始メテ緋ヲ著ル。上柱國ニ轉ジ、中書舍人、知制誥ニ除セラル。弟行簡拾遺ヲ授ケラル。從弟敏中及第ス。李宗閔ヲ貶ス。
弘仁十三年壬寅	長慶二年	五十一歲	二月、元稹同平章事トナル。六月、元稹罷メテ同州刺史トナル。居易外任ヲ求メ、七月、杭州刺史ニ除セラル。十月、杭州ニ到ル。冬、元稹浙東觀察、越州刺史ニ移ル。
弘仁十四年癸卯	長慶三年	五十二歲	正月、牛僧孺罷メテ武昌節度使トナル。三月、蘇州刺史ニ除セラル。五月任ニ到ル。三月、居易病ヲ以テ官ヲ免ズ。冬、弟行簡死ス。十二月、宦官劉克明帝ヲ弑ス。
淳和天長元年甲辰	長慶四年	五十三歲	三月、徵サレテ秘書監ニ拜セラル、金紫ヲ賜フ。正月、刑部侍郎ニ除セラル。

天長二年乙巳	敬宗寶曆元年	五十四歲	正月、牛僧孺罷メテ武昌節度使トナル。三月、蘇州刺史ニ除セラル。五月任ニ到ル。三月、居易病ヲ以テ官ヲ免ズ。冬、弟行簡死ス。十二月、宦官劉克明帝ヲ弑ス。
天長三年丙午	寶曆二年	五十五歲	三月、徵サレテ秘書監ニ拜セラル、金紫ヲ賜フ。正月、刑部侍郎ニ除セラル。
天長四年丁未	文宗太和元年	五十六歲	七月、李宗閔同平章事トナル。當時二李ノ黨爭起ル。居易病ト稱シテ東ニ歸ル。太子賓客ヲ以テ東都ニ分司ス。此ヨリ復タ出デズ。是冬阿崔生ル。
天長五年戊申	太和二年	五十七歲	河南尹ニ除セラル。阿崔死ス。七月、元稹武昌ニ薨ズ。
天長六年己酉	太和三年	五十八歲	二月、李德裕同平章事トナル。四月、病ヲ以テ河南尹ヲ免セラレ、再ヒ賓客ヲ授ケラレ分司ス。
天長八年辛亥	太和五年	六十歲	太子少傅、分司トナリ、馮翊縣侯ニ進封セラル。三月、晉公裴度薨ズ。十月、居易風痺ノ疾ヲ得テ諸妓女ヲ放ツ。
天長十年癸丑	太和七年	六十二歲	正月、改元。
仁明天皇承和三年丙辰	文宗開成元年	六十五歲	太子少傅ヲ罷メ、刑部尙書ヲ以テ致仕ス。秋、劉禹錫卒ス。
承和六年己未	開成四年	六十八歲	三月、洛中ニ於テ七老會ヲナシ、夏、九老圖ヲ作ル。白氏文集成ル。
承和八年辛酉	武宗會昌元年	七十歲	三月、帝崩ジ宣宗位ニ即ク。八月、居易卒ス。尙書右僕射ヲ贈ラル。十一月、龍門ニ葬ル。
承和九年壬戌	會昌二年	七十一歲	
承和十二年乙丑	會昌五年	七十四歲	
承和十三年丙寅	會昌六年	七十五歲	

七、白樂天の傳記

白樂天、名は居易、晩に香山居士・また醉吟先生と稱す。樂天は其字なり。唐の代宗の大曆七年壬子正月二十日、河南の鄭州新鄭縣東郭の宅に生る。家もと楚の公族白公勝より出づ。傳へて白起に至り、秦の將となり攻城野戰の功あり。事を以て死を賜ふ。起の子を仲といふ。始皇の時、父の功を以て太原山西省太原府に封せらる。樂天自ら稱して「太原の白居易」といふは之に由るなり。これより二十六年を歴て建に至る。北齊に仕へて五兵尙書となり司空を贈られ、韓城陝西省同州府韓城縣に居る。その曾孫溫に至り、唐に仕へて檢校都官郎中となり、下邳陝西省西安府渭南縣の東北に徙る。溫の第六子を鏐といふ。鞏縣の令となる。鏐は幼より學を好み文を善くし、殊に五言詩に工にして集十卷ありきといふ。鏐五子あり、長を季庚といふ。天寶の末、明經の科目より出身し、檢校大理少卿兼襄州別駕に終る。季庚四子あり、長を幼文といひ、饒州浮梁縣江西省饒州府浮梁縣主簿たり。次は則ち樂天。次は行簡。季は金剛奴といひ、九歳にして夭す。

樂天生れて六七月の時、乳母抱いて書屏の下に弄ぶ。之無の二字を指して示す者あり。當時口未だ言ふ能はずと雖も、心已に默識す。後此二字を問ふ者あれば必ず之を指して差はず。五六歳に及んで詩を作ることを學び、九歳にして聲韻を諳識せりといふ。事與三九一、その幼にして聰慧人に絶したるを

見るに足る。十五六歳の時、詩を袖にして著作郎顧況に謁す。顧況は才を待みて容易に人に許可せず。其卷上に白居易と署したるを見て識して曰く、長安は物貴し。居大に易からずと。その野火燒不盡、春風吹又生。の二句を讀むに及び、爽然として自失して曰く、句あり此の如し。居亦何ぞ難からんと。嘆賞すること之を久うせりといふ。この二句、賦得古原草一送別と題する詩中に在り。今その全詩を擧ぐれば左の如し。

離離原上草。一歲一枯榮。野火燒不盡。春風吹又生。遠芳侵古道。晴翠接荒城。又送王孫去。

萋萋滿別情。

また年十七の時、王昭君を詠する二絶句を作る。其二に云く、

漢使却廻憑寄語。黃金何日贖娥眉。君王若問妾顏色。莫道不如宮裏時。

と。措詞優婉にして迫切の態なし。樂天已に此詩才を有し、之に加ふるに苦學勉勵を以てす。嘗て與元九書に於て其狀を述べて云く、

二十より已來、晝は賦を課し、夜は書を課し、間また詩を課し、寢息に遑あらず、以て口舌瘡を成し、手肘胼を成すに至る。既に壯にして膚革豐盈ならず。未だ老いずして齒髮早く衰白し、警警然として飛蠅垂珠の眸子中に在るが如く、動もすれば萬を以て數ふ。蓋し以ふに苦學力文の致す所なり。

と。その苦學察するに餘あり。且つ家貧にして多故。衣食に奔走したることは、秋暮西歸途中書レ情と題する詩に、

耿耿旅燈下。愁多常少眠。思郷貴早發。發在雞鳴前。九月草木落。平蕪連遠山。秋陰和曙色。萬木蒼蒼然。去秋偶東游。今秋始西旋。馬瘦衣裳破。別家來二年。憶歸復愁歸。歸無一囊錢。心雖非蘭膏。安得不自然。

といへるを見て知るべし。されど樂天は志氣少しも撓まず。かくて貞元十六年、進士の試験に及第し、十八年、試判拔奉に及第し、秘書省校書郎を授けられ、家を擧げて長安に移り、常樂里に假寓し、やがて涇村に卜居す。元和元年、制舉に應じて策、策四等に入り、監厩縣尉に補せられ、翌年集賢校理を歴て翰林學士に任せられ、三年左拾遺を授けらる。樂天は少年の時より天下を匡濟するの志あり。幸にして憲宗に用ひられ諫官となるを得たれば、素志を達するの機到れりとなし、苟も國政を裨補すべきあれば、知りて言はざるはなし。憲宗も亦銳意治を圖り務めて言路を開かんと欲せしかば、樂天の言多くは聽用せらる。樂天また詩を作りて時政を諷刺し、以て明主の一顧を冀へり。與三元九書に當時の事情を述べて云く、

朝に登りてより來、年齒漸く長じ、事を閱すること漸く多し。人と言ふ毎に多く時務を詢ふ。書史を讀む毎に多く治道を求む。始めて知る文章は合に時の爲に著すべく、歌詩は合に事の爲に作るべ

きを。是時皇帝初めて位に即き、宰府に正人あり、屢聖書を降して人の急病を訪ふ。僕此日に當り擢んでられて翰林に在り、身は是れ諫官なり。手に諫紙を請うて啓奏するの外、以て人の病を救濟し時の闕を裨補すべくして、而も指言するを難る者あれば、輒ち之を詠歌し、稍稍遞進して上に聞し、上は以て宸臆を廣め憂勤に副ひ、次は以て恩獎に酬い言責を塞ぎ、下は以て吾が平生の志を履まんと欲す。豈に圖らんや志未だ就らずして悔已に生じ、言未だ聞せずして謗已に成らんとは。又請ふ左右の爲に終に之を言はん。凡そ僕が賀雨詩を聞いては、衆口籍籍として已に宜しきにあらずと謂ふ。僕が哭三孔戡詩を聞いては衆面脈脈として盡く悦ばず。秦中吟を聞いては則ち權豪貴近の者相目て色を變ず。樂遊園寄三足下詩を聞いては則ち政柄を執る者腕を扼す。宿紫閣村詩を聞いては則ち軍要を握る者切齒す。大率此の如し。徧く擧ぐべからず。

と。されば事、志と違ひ、是等の詩は却つて樂天に禍するの因となれるなり。元和五年、任滿ちて當に官を改むべし。憲宗詔して樂天をして自ら擇ばしむ。樂天乃ち姜公輔唐の日に親を養はんが爲に京兆府の判司たらんことを求めし例の如くせんことを乞ふ。帝因つて京兆戸曹參軍に除す。翌年母陳氏を喪ひ、官を罷めて涇村に退居す。喪に居ること三年、太子左贊善大夫を授けらる。翌年六月賊あり宰相武元衡を通衢の中に殺し、朝野震駭す。樂天首として上疏し、速に賊を捕へ以て朝廷の恥を雪がんことを乞ふ。樂天は當時諫官に在らず。されど一片憂國の念自ら禁する能はざりしなり。與

楊虞卿書に云く、

僕以爲へらく、書籍より以來未だ此事あらず。國辱めらるれば臣死すとは、此れ其時なるかと。苟も見る所あれば吠歎阜隸の臣と雖も、當に黙黙たるべからず。況んや班列に在りて能く其痛憤に勝へんや。故に武相の氣平明に絶え、僕の書奏日午に入る。

と。此言以て彼が憂憤の情を見るべし。然るに宰相・諫官皆その出位の言たるを惡む。會素より樂天に快からざる者あり、又誣告して曰く、居易の母花を看るに因り井に墮ちて死す。而るに居易は「賞花」及び「新井」の詩を作る。甚だ名教を傷ると。かくて樂天は江州司馬に貶せらる、江州は江西省九江府にして南に匡廬の山あり、北に潯陽の江あり。地瘠瘠少く、溢魚頗る肥ゆ。常に其間に優游自適し、選讀を以て意に介せず。與之書に云く、

僕去年秋、始めて廬山に遊び、東西二林寺の間、香鑪峯下に到り、雲木泉石、勝絶第一なるを見、愛して捨つる能はず。因つて草堂を置く。前に喬松十數株、修竹千餘竿あり。青蘿を墻垣となし、白石を橋道となす。流水舍下を周り、飛泉簷間に落ち、紅榴白蓮池砌に羅生す。毎に一たび獨り往き、動もすれば旬日に彌る。平生好む所の者、盡く其中に在り。唯歸るを忘るるのみならず、以て終老すべし。

と。十三年冬、忠州刺史に徙る。十五年正月、憲宗暴に崩じ、穆宗位に即く。冬召されて京師に還

り尚書司門員外郎に拜せられ、主客郎中、知制誥となり、翌長慶元年、中書舍人李宗閔といふ者、禮部侍郎錢徽に託して己の親戚某を及第せしむ。李德裕は宗閔が嘗て其父吉甫を彈劾せしことを怨む。時に李德裕・元稹・李紳並に帝に寵あり。之を帝に訴ふ。帝乃ち樂天に詔して中書舍人王起と再試験を行はしむ。是れ所謂「二李の争」李宗閔と李德裕の始なり。これより牛僧孺は李宗閔と結託して德裕と争ひ、二李の争は施いて牛李の争となり、朝臣各一方に結びて朋黨の争を續くること四十餘年なり。かくて樂天は中書舍人に除せられ、穆宗の人を制擧するや居易毎に考策官たり。然れども穆宗荒縱、宰相其人に非ず。河朔復た亂る。樂天屢上疏して其事を論せしも終に用ひられず。因つて外任を乞ひ、二年七月杭州刺史となる。樂天の杭州に在るや始めて堤を築いて錢塘湖を捍ぎ、其水を鍾洩して漑漑に便にし、復た嘗て李泌の開鑿せし六井を浚ひ、民皆其汲に頼る。四年穆宗崩じ敬宗立つ。樂天任滿ちて太子左庶子に拜せられ東都關洛に分司す。洛陽の履道里の故の散騎常侍楊馮の宅を買ひて之に居る。當時園池水石の間に、詩酒の樂をなししことは其池上篇序に詳なり。その翌年また蘇州刺史に轉じ、居ること一年、病を以て免せらる。文宗の太和元年召されて秘書監となり、尋いで刑部侍郎に遷る。樂天の妻の從父兄に楊虞卿といふ者あり李宗閔と善し。樂天黨争の渦中に入ること屑しとせず、三年病と稱して洛陽に至り、太子賓客を以て東都に分司たり。五年河南尹に除せられ、七年病を以て河南尹を免せられ、再び賓客分司を授けらる。開成元年、同州刺史に除せられし

も辭して就かず。尋いで太子少傅を授けられ馮翊縣開國侯に進封せらる。四年冬病に罹り枕に伏すること累月。乃ち家に蓄へし所の諸妓女を放ち、自ら醉吟先生墓誌銘を作る。誌中に會昌六年月日を以て終る。春秋七十有五などあるは後人の補填なり。病中と雖も吟詠して輟めず。武宗の會昌二年、太子少傅を罷め、刑部尚書を以て致仕し、香山の僧如滿と香火の社を結び、白衣をまとひ鳩杖を曳き肩輿に乗りて往來し、自ら香山居士と稱す。五年三月二十四日、履道坊の宅に於て七老會をなす。時に樂天年七十四にして胡杲(八十九)、吉皎(八十八)劉真(八十七)鄭據(八十五)盧貞(八十三)張渾(七十七)の諸老會に與る。同年五月、更に李元爽(百三十六)如滿(九十五)を加へ、前の七老と共に其形貌を寫して九老圖を作る。翌會昌六年八月、病んで卒す。年七十五。尙書右僕射を贈る。十一月龍門に葬る。李商隱の白公墓碑銘序に據る。宣宗詩を以て之を弔して曰く、

繼玉聯珠六十年。誰教冥路作詩仙。浮雲不繫名居易。造化無爲字樂天。童子解吟長恨曲。胡兒能唱琵琶篇。文章已滿行人耳。一度思卿一惘然。

樂天の妻楊氏は楊穎士の従父妹なり。其死は樂天の後に在り。樂天が楊氏を娶りしは何年なるか明ならざれども、蓋し元和の初なるべし。四年一女子を挙げ、金鑾と名づけたり。三歳にして夭す。太和三年、樂天年五十八の時、始めて男子を生み崔兒と名づけしが、是れ亦三歳にして死す。ただ一女

子あり、監察御史談弘譽醉吟先生墓誌銘に見ゆに嫁せり。姪孫阿新を養つて嗣となす。李商隱の白公墓碑銘に子景受とあるは阿新なりや否や。是れ亦審ならず。醉吟先生墓誌銘に味道・景回・晦之の三姪あることを記せるも、何人の子なるかを明記せず。

弟行簡、字は知退、貞元の末の進士にして秘書省校書郎を授けられ、元和四年、盧坦が劍南東川の府に辟さる。罷めて潯陽に歸り、樂天に従ふ。樂天朝に入りて尙書郎となるや、行簡も亦左拾遺を授けられ、司門員外郎より主客郎中に累遷す。寶曆二年冬病んで卒す。その詞藻兒の風あり。樂天友愛人に過ぐ。兄弟相待つこと賓客の如し。行簡子あり龜兒といふ。樂天自ら教養して名を成さしむ。阿新それ或は龜兒の子か。

從弟白敏中あり。字は用晦、長慶の初進士に及第し、會昌の初殿中侍御史となり、翰林學士・中書舍人に遷り、咸通中、司徒・門下平章事に累拜し、中書令を加へらる。太子大師を以て致仕す。

昭和三年八月

佐久節識

白樂天詩集 卷一

唐白居易著
清汪立名編訂
日本佐久節譯解

諷諭一

古調詩五言
凡六十四首

賀雨

雨を賀す

皇帝嗣寶曆元和三年冬。

皇帝寶曆を嗣ぐ、元和三年冬。

自冬及春暮。不雨旱燥燼。

冬より春暮に及ぶまで、雨ふらずして旱燥燼たり。

上心念下民。懼歲成災凶。

上心に下民を念ひ、歳の災凶を成さんことを懼れ、

遂下罪己詔。殷勤告萬邦。

遂に己を罪するの詔を下し、殷勤に萬邦に告ぐ。

帝曰予一人。繼天承祖宗。

帝曰予一人、天に繼ぎ祖宗に承け。

憂勤不遑寧。夙夜心忡忡。
 元年誅劉闢。一舉靖巴邛。
 二年戮李錡。不戰安江東。
 顧惟眇眇德。遽有巍巍功。
 或者天降沴。無乃儆予躬。
 上思答天戒。下思致時邕。
 莫如率其身。慈和與儉恭。
 乃命罷進獻。乃命賑飢窮。
 宥死降五刑。已責寬三農。
 宮女出宣徽。廐馬減飛龍。
 庶政靡不舉。皆出自宸衷。
 奔騰道路人。僂僂田野翁。
 歡呼相告報。感泣涕沾胷。

憂勤して遑寧せず、夙夜心忡忡たり。
 元年劉闢を誅し、一舉して巴邛を靖んす。
 二年李錡を戮し、戦はずして江東を安んず。
 顧みて惟ふ眇眇の徳、遽に巍巍の功有り。
 或者天沴を降し、乃ち予が躬を儆むる無からんかと。
 上は天戒に答へんことを思ひ、下は時邕を致さんこと
 其身を率ゐるに如くは莫し、慈和と儉恭と。「を思ふ。
 乃ち命じて進獻を罷め、乃ち命じて飢窮を賑ひ、
 死を宥して五刑を降し、責を已めて三農を寛うす。
 宮女は宣徽より出し、廐馬は飛龍を減す。
 庶政舉らざる靡し、皆宸衷より出づ。
 奔騰する道路の人、僂僂する田野翁。
 歡呼して相告報し、感泣して涕胷を沾す。

順人人心悅。先天天意從。
 詔下纔七日。和氣生沖融。
 凝爲油油雲。散作習習風。
 晝夜三日雨。淒淒復濛濛。
 萬心春熙熙。百穀青芄芃。
 人變愁爲喜。歲易儉爲豐。
 乃知王者心。憂樂與衆同。
 皇天與后土。所感無不通。
 冠珮何鏘鏘。將相及王公。
 蹈舞呼萬歲。列賀明庭中。
 小臣誠愚陋。職忝金鑾宮。
 稽首再三拜。一言獻天聰。
 君以明爲聖。臣以直爲忠。

人に順つて人心悦び、天に先つて天意從ふ。
 詔下りて纔に七日、和氣沖融を生じ、
 凝つて油油たる雲と爲り、散じて習習たる風と作る。
 晝夜三日の雨、淒淒また濛濛。
 萬心春にして熙熙たり、百穀青くして芃芃たり。
 人は愁を變じて喜と爲し、歳は儉を易へて豊と爲る。
 乃ち知る王者の心、憂樂衆と同じきことを。
 皇天と后土と、感ずる所通せざるは無し。
 冠珮何ぞ鏘鏘たる、將相及び王公。
 蹈舞して萬歳を呼び、列して明庭の中に賀す。
 小臣誠に愚陋、職金鑾の宮を忝うす。
 稽首して再三拜し、一言天聰に獻す。
 君は明を以て聖と爲し、臣は直を以て忠と爲す。

敢賀有_レ其始。亦願有_レ其終。敢_レて其始あるを賀し、亦其終あらんことを願ふ。

【字解】【一】皇帝。唐の憲宗。元和は其年號。【二】寶曆。皇位をいふ。【三】早熾燭。早熾で雨のふらぬこと。【四】殷勤。親切丁寧。【五】予一人。天子自ら謂ふ。【六】遼寧。安邊なり。【七】仲仲。憂ふる貌。【八】劉開。劍南西川節度使たり。桀驁にして詔命に従はず。【九】李錡。浙西鹽鐵轉運使・鎮海節度使となり、恩を恃んで驕横なり。【一〇】眇眇。微小の貌。【一一】高大の貌。【一二】時態。邑は雍に同じ、やはらく意。【一三】五刑。隋以後は、笞・杖・徒・流・死をいふ。【一四】已實。實は償に通ず、夫役を免除したこと。三農は周禮註に、平地農・山農・澤農。【一五】宣徽。官署の名、内侍の事を掌る。【一六】飛龍。良馬の名。李白の詩に、勅賜飛龍內殿馬。【一七】宸衷。天子の御心。【一八】傾儀。せむし。一に恭敬の貌。【一九】先天。易經に、「天に先だちて天運はず、天に後れて天時を奉ず。』【二〇】沖融。沖は虚なり和なり。【二一】習習。風の吹くさま。【二二】照照。のびのびすること。【二三】芄芄。茂る貌。【二四】皇天。天なり。后土は地なり。【二五】冠環。環は佩に同じ、將相の腰に佩ぶ玉。節婦は玉の聲。【二六】小臣。白樂天自ら謂ふ。【二七】金鑾。梁の時、思政殿を改めて金鑾殿となし、大學士一員を置いたので、後翰林院の稱となる。白樂天は元和二年に翰林學士を授けられた。【二八】稽首。稽は「とどむ」と訓ず、首地に至りて稽留するなり、最も重き禮。【二九】天聰。天聰といふが如し。

【題義】唐の憲宗の元和四年閏三月、久旱の後、一雨三日、民皆喜色あり。公因つて此詩を作る。

【詩意】元和三年冬から翌年の春の末まで旱が續いて、トント雨が降らなかつたので、陛下は饑饉にでもなりはせぬかと御心を痛め給ひ、遂に己を罪するの詔を下して、天下に布告せられた。朕帝位を繼ぎてより以來、夙夜憂勤して寸時も安逸を事とせず。元年には劉闢を誅し、一舉して巴邛の地方を安んじ、二年には李錡を誅し、兵を用ひずして江東の地方を平げぬ。顧みて自ら惟ふ、不徳の身を

以て、この大功を立つ。天それ或は災を降して朕が躬を戒むるにはあらずやと。上は天の戒に答へんことを思ひ、下は時和を致さんことを思ふ。如かず慈和と恭儉とを以て、自ら身を率ゐんにはしと。乃ち一切の進獻を禁じ窮乏を賑ひ、刑罰を省き夫役を免じ、宮女を放ち廐馬を減じなどせられたので、治績が大に擧つた。これ皆陛下の御心から出たのであつた。臣下の進言に本づいたのではない。是に於てか、田夫野人に至るまで奔走恭敬し、歡呼拊舞して天恩に答へ、感泣して胸を沾した。すべて民意に順應すれば民悦び、天時に先だつても天意必ず己に従ふものである。さればにや、詔の下つた七日目に、和氣天地に滿ち、油然として雲を起し習習たる風を生じ、晝夜ぶつとほしに三日の間大雨が降り續き、萬物熙熙として春色を呈し、禾穀青青として繁茂し、霽の愁は變じて喜となり、饑饉は易つて豊年となつた。此を観るにつけても、王者民と憂樂を同うすれば、天地も爲に感通することがわかる。因つて王公將相相率ゐて庭中に立ち列び、歡呼拊舞して萬歳を唱へた。愚昧なる我が身も、翰林學士の榮職を辱うする所から、陛下に稽首再拜して一言を天聰に達した。すべて君は聰明を以て聖となし、臣は直言を以て忠となすのである。今陛下は始あるを賀するに因り、願はくは終まで之を全うし給はんことを祈る次第である。

【餘論】起首から皆出自宸衷一までを第一解とし、憲宗が災に遇うて修省した事實を歴敘した。奔騰道路人から歲易儉爲豊までを第二解とし、雨を喜ぶ情を曲盡してゐる。以下を第三解とし、本題に

入り雨を賀する意を述べ、規戒の詞を以て結んだ。情辭剴切、忠愛の情が溢れてゐる。

讀張籍古樂府

張籍が古樂府を讀む

張君何爲者。業文三十春。

張君は何爲る者ぞ、文を業とすること三十春。

尤工樂府詩。舉代少其倫。

尤も樂府の詩に工なり、代を舉げて其倫少し。

爲詩意如何。六義互鋪陳。

詩を爲る意如何、六義互に鋪陳す。

風雅比興外。未嘗著空文。

風雅比興の外、未だ嘗て空文を著さず。

讀君學仙詩。可諷放佚君。

君が學仙の詩を讀めば、放佚の君を諷す可し。

讀君董公詩。可誨貪暴臣。

君が董公の詩を讀めば、貪暴の臣を誨ふ可し。

讀君商女詩。可感悍婦仁。

君が商女の詩を讀めば、悍婦の仁なるを感ず可し。

讀君勤齊詩。可勸薄夫敦。

君が勤齊の詩を讀めば、薄夫に敦を勸む可し。

上可裨教化。舒之濟萬民。

上は教化を裨ふ可し、之を舒ぶれば萬民を濟ふ。

下可理情性。卷之善一身。

下は情性を理む可し、之を卷けば一身を善くす。

始從青衿歲。迨此白髮新。

青衿の歲より始め、此白髮の新なるに迨ぶまで、

日夜秉筆吟。心苦力亦勤。

日夜筆を秉りて吟じ、心苦み力も亦勤む。

時無采詩官。委棄如泥塵。

時に采詩の官無ければ、委棄せられて泥塵の如し。

恐君百歲後。滅没人不聞。

恐らくは君が百歳の後、滅没して人聞かざらんことを。

願藏中祕書。百代不湮淪。

願はくは藏中の祕書、百代湮淪せざらんことを。

願播內樂府。時得聞至尊。

願はくは樂府に播き内れ、時に至尊に聞するを得んことを。

言者志之苗。行者文之根。

言は志の苗なり、行は文の根なり。

所以讀君詩。亦知君爲人。

君が詩を讀めば、亦君の人と爲りを知る所以なり。

如何欲五十。官小身賤貧。

如何ぞ五十ならんと欲するまで、官小にして身賤貧なる。

病眼街西住。無人行到門。

眼を病んで街西に住すれども、人の行いて門に到る無し。

【字解】【一】張籍 字は文昌、韓愈に従つて學ぶ。尤も樂府體の詩に長ず。仕へて國子司業に至る。古樂府は新樂府に對して古體を用ひて作るのをいふ。【二】三十春 三十年。【三】六義 詩經の風雅頌比賦興をいふ。毛詩の序に「風は諷なり教なり。諷以て之を勸かし、教以て之を化す。」雅は正なり、王政の由りて興廢する所を言ふなり。頌は盛禮の形容を美し、其成功を以て神明に告ぐるものなり」とあり。比は比喻體の詩。賦は事を直敘した詩。興は彼によりて此を引き起す體の詩。【四】學仙 張籍の作つた詩の

【一】董公詩 詩の題なり。董公の功を賛した詩である。【二】商女 妓女なり。杜牧の詩に商女不知亡國恨。【三】悍婦 心根あしき女。【四】薄夫 薄情な男。敦は和厚なり。孟子に「鄙夫も寛に薄夫も敦し」とあり。【五】青幹 學生。青色の襟の衣服を着るよりいふ。【六】采詩官 周の時采詩の官あり。天下を巡行して各國の詩を探り、以て風俗を察し、政を施すの用となす。【七】百歲後 人の一生を百歲といふ。死後のこと。【八】樂府 宮中の音樂を掌る官署。

【題義】張籍の作つた古樂府を讀んで其妙を贊歎し、其の老いて下僚に沈淪するを憐んだのである。【詩意】張君は如何なる人ぞといふに、三十年來詩を業とし、尤も樂府體の詩に巧である。當代恐らく比肩する者はなからう。其詩たるや悉く詩經の六義に則り、敢て無用の空文を弄するやうなことはない。されば君が學仙と題する詩を讀めば放縱の君を諷すべく、董公の詩を讀めば貪暴の臣を誨ふべく、妓女の詩を讀めば悍婦も尙ほ仁なるを知るべく、勳齊の詩を讀めば薄夫をして敦厚ならしむるに足る。上にしては教化に裨あり、之を舒ぶれば萬民を濟ふことを得、下にしては性情を理め、之を卷けば一身を善くするを得る。皆世教に益ある詩である。君は青年時代から白髮の老境に入るまで、日夜苦吟して少しも怠らない。然し今の世には采詩の官がないから、折角苦心して作つた詩も塵埃のやうに棄てられ、恐らく君の死後には散佚して聞く人もなくなるであらう。願はくは秘藏の詩稿をば永く此世に留め、樂府の樂章に加へて至尊の御耳にも入れたいものぢや。言は志の苗であり、行は言の根であるから、君の詩を讀めば君の人格がよくわかる。かかる立派な人格を持ちながら、五十

歳に垂んとするまで微賤に居り、眼疾を患へて帝都の西に住するも、行いて訪ふ人もないとは、誠に氣の毒に堪へない。

哭孔戡

孔戡を哭す

洛陽誰不死。戡死聞長安。
 我是知戡者。聞之涕泫然。
 戡佐山東軍。非義不可干。
 拂衣向西來。其道直如絃。
 從事得如此。人人以爲難。
 人言明明代。合置在朝端。
 或望居諫司。有事戡必言。
 或望居憲府。有邪戡必彈。
 惜哉兩不諧。沒齒爲間官。

洛陽誰か死せざらん。戡が死長安に聞ゆ。
 私は是れ戡を知る者なり。之を聞いて涕泫然たり。
 戡山東の軍に佐たり、義に非ずんば干む可からず。
 衣を拂ひ西に向つて來る、其道直きこと絃の如し。
 事に従ひ此の如きを得るは、人人以て難しと爲す。
 人は言ふ明明の代、合に置いて朝端に在らしむべしと。
 或は諫司に居かんことを望む。事有らば戡必ず言はんと。
 或は憲府に居かんことを望む。邪有らば戡必ず彈さんと。
 惜しい哉兩つながら諧はず、齒を没るまで間官たり。

竟不得一日、嘗嘗立君前。

竟に一日も、嘗嘗として君前に立つを得ず。

形骸隨衆人、斂葬北邙山。

形骸衆人に隨ひ、北邙山に斂葬す。

平生剛腸内、直氣歸其間。

平生剛腸の内、直氣其間に歸す。

賢者爲生民、生死懸在天。

賢者の生民を爲むる、生死懸つて天に在り。

謂天不愛人、胡爲生其賢。

天人を愛せずと謂はば、胡爲れぞ其賢を生ずる。

謂天果愛民、胡爲奪其年。

天果して民を愛すと謂はば、胡爲れぞ其年を奪ふ。

茫茫元化中、誰執如此權。

茫茫たる元化の中、誰か此の如き權を執る。

【字解】【一】孔戡、昭義節度使盧從史の掌書記たり。從史の王承宗・田緒と陰に相結ぶや、戡は争つて從はず、言を肆にして之を折

き、遂に疾と稱して洛陽に歸る。李吉甫揚州を鎮するるとき表して幕府に置く。從史即ち諷ふるに事を以てす。諷して藩尉丞を以て東

都に分司せしむ。未だ幾ならずして卒す。【二】洛陽、唐の東都。【三】長安、唐の西都。【四】山東軍、昭義軍節度使の掌書記た

りしこと。佐は補佐の職。【五】朝端、朝職なり、文選の齊故安陸昭王碑文に「允副朝端、兼掌屯衛」とある。【六】諫司、諫諍

の職司。【七】憲府、御史臺なり。罪狀を糾彈する事を掌る。【八】問官、問敷な官職。【九】嘗嘗、直言する貌。【一〇】北邙山、

洛陽の北に在る山、墳墓多し。【一一】元化、天道の運化をいふ。

【題義】孔戡が有爲の才を抱いて空しく死んだことを痛んだ作である。

【詩意】洛陽にゐて死ぬ人は數多あるが、死して長安まで噂の傳はる人はあまり多くはない。所が孔

戡が死ぬと忽ち其噂が長安まで傳はつた。以て尋常一様の凡骨でないことがわからう。我は特に彼の爲人を認めてゐた者であるから、計報を聞いて坐に涙を流した。彼は嘗て山東の節度府に掌書記たりし時、不義を屑しとせず、官職を擲つて洛陽に歸つて來た。其道の直きことは弓弦のやうで、少しも曲つた事をしない。これ實に常人の難しとする所である。かかる人物であるから、其の一たび洛陽に歸り來るや、人皆「宜しく朝職に列すべし」とて、或は「諫司に置かん、事あらば彼必ず天子を諫むるであらう」といふ者もあり、或は「御史臺に置かん、邪あらば彼必ず其非を彈すであらう」といふ者もあつた。惜しいかな二つとも諸はないで閑職にゐて一生を終り、一日も天子の陛下に立つて侃諤の辯を振ふことが出來ないでしまつた。然も世の凡俗と同じく死亡し、北邙山上に埋葬せられ、平生の剛氣も空しく地に歸してしまつた。ああ賢者の世を治むるは、其生死皆天に關係を持つてゐる。若し天は萬民を愛せぬものだとするならば、何故に孔戡の如き賢者を生んだのであらうか。若し又天は萬民を愛するものだとするならば、何故に孔戡の壽命を奪つたのであらう。天道の運化は茫茫として信を措き難いが、一體誰が運命の鍵を握つてゐるのであらう。

凶宅

凶宅

長安多大宅、列在街西東。長安に大宅多し。列つて街の西東に在り。

往往朱門內。房廊相對空。
 梟鳴松桂枝。狐藏蘭菊叢。
 蒼苔黃葉地。日暮多旋風。
 前主爲將相。得罪竄巴庸。
 後主爲公卿。寢疾歿其中。
 連延四五主。殃禍繼相鍾。
 自從十年來。不利主人翁。
 風雨壞簷隙。蛇鼠穿牆墻。
 人疑不敢買。日毀土木功。
 嗟嗟俗人心。甚矣其愚蒙。
 但恐災將至。不思禍所從。
 我今題此詩。欲悟迷者覺。
 凡爲大官人。年祿多高崇。

往往朱門の中、房廊相對して空し。
 梟は松桂の枝に鳴き、狐は蘭菊の叢に藏る。
 蒼苔黄葉の地、日暮れて旋風多し。
 前主は將相たれども、罪を得て巴庸に竄たる。
 後主は公卿たれども、疾に寝ねて其中に歿れぬ。
 連延として四五の主、殃禍繼いで相鍾る。
 十年より來、主人翁に利あらず。
 風雨簷隙を壞り、蛇鼠牆隙を穿つ。
 人疑つて敢て買はず、日に土木の功を毀る。
 嗟嗟俗人の心、甚しいかな其愚蒙なる。
 但災の將に至らんとするを恐れて、禍の從る所を思はず。
 我今此詩を題して、迷者の覺を悟らしめんと欲す。
 凡そ大官と爲る人、年祿多くは高く崇し。

權重持難久。位高勢易窮。
 驕者物之盈。老者數之終。
 四者如寇盜。日夜來相攻。
 假使居吉土。孰能保其躬。
 因小以明大。借家可諭邦。
 周秦宅函。其宅非不同。
 一興八百年。一死望夷宮。
 寄語家與國。人凶非宅凶。

權重うして持つこと久しうし難し。位高くして勢窮し。
 驕る者は物の盈なり。老は數の終なり。
 四者寇盜の如く、日夜來りて相攻む。
 假使吉土に居るとも、孰か能く其躬を保たん。
 小に因つて以て大を明かにし、家を借りて邦に諭ふ可し。
 周秦函に宅り、其宅同じからざるに非ず。
 一は興りて八百年、一は望夷宮に死す。
 語を寄す家と國と、人凶にして宅凶なるに非ず。

【字解】【一】凶宅。不吉な家。【二】長安。唐の都。【三】朱門。朱塗の門。地位高き人の家。【四】巴庸。竝に地名。巴は今の四川省の地。庸は湖北省の地。【五】年祿。年齢と俸祿。【六】四者。年・祿・權・位。【七】吉土。めでたき土地。【八】暗函。暗關と函谷關。【九】其宅。國を建てた土地。【一〇】望夷宮。秦の宮の名。趙高の二世皇帝を弑した處。

【題義】權勢利祿に驕る者は禍必ず其身に及ぶことを敍す。

【詩意】長安の都には大邸宅が多くあつて市街の東西に列つてゐる。其中には朱塗の門の内の部屋も長廊も、皆からあきで、梟は庭樹の枝に鳴き狐は蘭菊の叢に隠れ、苔蒸し葉落ちて夕暮に旋風の吹き

荒ぶに任せてある主なき家もあちこちにある。譯を尋ねて見ると、前の主人は將相たる身であつたが罪を得て巴庸に流され、その次の主人は公卿であつたが病氣に罹つて此家で斃れ、續いて四五人主人が代つたが、いづれも災禍續きで、十年以來吉事は一つもない。されば今では住む人もなく、風雨蛇鼠の壞るに任せてあるが、縁起をかついて買ふ者もないから、日に日に簷や柱が傾くばかりであるとの事である。ああ世間の人はなせかくも愚なのであらう。ただ災の來ることはかり恐れて、禍の由つて來る原因を考へない。余は今此詩を書いて世人の迷を覺ましてやらう。凡て高官に居る人は、年齢も高く俸祿も多い。重權は永く持ち續け難く。高位は失ひ易いものである。驕者は物の満盈であり、老大は數の終局である。満つれば闕け老ゆれば死するは世の習であつて、年・祿・權・位四者の來りて我を攻むること寇盜の如くである。たとひ吉祥の地に居るとも其禍を免れることは不可能である。一事が萬事、小事が大事だ。個人の家でも國家でも物の道理に二つはない。周も秦も同じく峭函の地に國を建て、周は八百年の歲月を保ち、秦は僅に三代で滅びた。皆この道理に由るのである。くれぐれも言つておくが、人事が凶なので邸宅が凶なのではない。

夢仙

仙を夢みる

人有夢仙者。夢身升上清。

人仙を夢みる者有り。夢に身上清に升る。

坐乘一白鶴。前引雙紅旌。
 羽衣忽飄飄。玉鸞俄銜銜。
 半空直下視。人世塵冥冥。
 漸失鄉國處。纔分山水形。
 東海一片白。列岳五點青。
 須臾羣仙來。相引朝玉京。
 安期羨門輩。列侍如公卿。
 仰謁玉皇帝。稽首前致誠。
 帝言汝仙才。努力勿自輕。
 却後十五年。期汝不死庭。
 再拜受斯言。既寤喜且驚。
 祕之不敢泄。誓志居巖扃。
 恩愛捨骨肉。飲食斷羶腥。

一白鶴に坐乗し、前に雙紅の旌を引く。
 羽衣忽ち飄飄たり。玉鸞俄に銜銜たり。
 半空直下に視れば、人世塵冥冥たり。
 漸く郷國の處を失ひ、纔に山水の形を分つ。
 東海一片白く、列岳五點青し。
 須臾にして羣仙來り、相引いて玉京に朝す。
 安期羨門の輩、列侍して公卿の如し。
 仰いで玉皇帝に謁し、稽首して前んで誠を致す。
 帝言はく汝仙才あり。努力して自ら輕んずる勿れ。
 却後十五年、汝を不死の庭に期せんと。
 再拜して斯言を受く。既に寤めて喜び且つ驚く。
 之を祕して敢て泄さず、誓志巖扃に居り、
 恩愛骨肉を捨て、飲食羶腥を斷つ。

朝殮雲母散。夜吸沆瀣精。
 空山三十載。日望輜輶迎。
 前期過已久。鸞鶴無來聲。
 齒髮日衰白。耳目減聰明。
 一朝同物化。身與糞壤并。
 神仙信有之。俗力非可營。
 苟無金骨相。不列丹臺名。
 徒傳辟穀法。虛受燒丹經。
 只自取勤苦。百年終不成。
 悲哉夢仙人。一夢誤一生。

【字解】【一】上清。道家三清之一。靈笈七籤に「上清之天、在絶頂之外、有三八皇老君、運九天之仙、而處上清之宮也」とある。
 【二】玉鸞。鈴なり。鍾鐸は鈴の音。
 【三】列岳。嵩山・泰山・華山・衡山・恆山を五岳といふ。
 【四】玉京。天帝の都。
 【五】安期。仙人の名。秦の邯鄲の人。抱朴子と號す。漢書に「始皇東遊海上、求仙人安期之屬」とある。
 【六】玉皇帝。天帝なり。玉皇とも玉帝ともいふ。
 【七】稽首。賀雨の二八を見よ。
 【八】却後。今より後。
 【九】巖窟。巖窟なり。
 【一〇】雲母。散。仙藥の名。
 【一一】沆瀣。露氣なり、仙人の餐する所のもの。
 【一二】輜輶。四面に屏蔽ある車。
 【一三】前期。約束の期限。
 【一四】鸞鶴。仙人の乗る鳥。
 【一五】糞壤。穢土といふが如し。
 【一六】丹臺。神仙の居る處。
 【一七】辟穀。穀食を辟除して仙人になること。
 【一八】燒丹經。仙藥の製法を説く書。
 【一九】百年。一生涯。

【題義】世の不老長生を希ひ仙道を修め徒に勤苦して寸效なき者を嘲笑した作である。
 【詩意】仙人とならうと望む者があつて、或る日天上に升る夢を見た。身は一匹の白鶴に降り紅旌を建てた二人の前驅に導かれ、羽衣は飄飄として風に翻り、玉鸞は錚錚として空に響き、實にすがすがしさの限りであつた。半空から下界を瞰下せば下界は塵霧が濛濛として暗く、いつしか郷里も見えわかず、只纔に山や川の形を認め、東海一片の白色を湛へ五岳の點點として青色を凝らしてゐるのを見るばかりであつた。やがて數多の仙人が来て、天帝の都に案内してくれた。安期生だの羨門だのといふ仙人が左右に列侍してゐる所で天帝に拜謁し、恭しく頭を垂れて誠意を表した。時に天帝の仰せらるるには、その方は仙人たる天分を持つてゐるから、自ら輕んぜずに修業を勵むがよい。今から十五年の後には、不死の境地に入るやうにしてやらう」との事であつた。再拜して斯言を受けた所で、俄に夢が覺めた。覺めての後も喜び且つ驚き、深く心に秘して人には泄さず、俗界を離れて巖窟に居り骨肉の恩愛を断ち肉食を廢し、ただ専ら仙藥と露氣とを吸うて修業を勵んだ。かくて三十年の歲月を積み、今日か明日かと迎への車を待つてゐた。約束の十五年は既に過ぎたが、鸞鶴は一向に來さう

もない。その中に齒は墮ち髪は白く耳や目も衰へて来て、程なく身死して穢土に歸してしまつた。あ
お神仙といふ者にはあるにはあるであらう。が、決して俗人の希ふべき所ではない。仙人の相を先天的
に授かつてゐる者でなければ、到底仙臺に名を列ねることは出来ないものである。ただ辟穀の法だの燒
丹經だのを傳受した所が何にならう。ただ徒に身を苦めるだけで、一生その效を見ることは出来な
いのだ。

觀刈麥時爲整屋縣尉

麥を刈るを觀る時に整屋縣尉たり

田家少閑月。五月人倍忙。

田家閑月少。五月人倍忙。

夜來南風起。小麥覆隴黃。

夜來南風起。小麥隴覆黃。

婦姑荷簞食。童稚攜壺漿。

婦姑は簞食を荷ひ、童稚は壺漿を攜ふ。

相隨餉田去。丁壯在南岡。

相隨つて田に餉して去り、丁壯は南岡に在り。

足蒸暑土氣。背灼炎天光。

足は暑土の氣に蒸され、背は炎天の光に灼かる。

力盡不知熱。但惜夏日長。

力盡きて熱きを知らず、但夏日の長きを惜む。

復有貧婦人。抱子在其傍。

復貧婦人有り、子を抱き其傍に在り。

右手秉遺穗。左臂懸弊筐。

右手に遺穗を秉ひ、左臂に弊筐を懸く。

聽其相顧言。聞者爲悲傷。

其の相顧みて言ふを聽き、聞く者悲傷を爲す。

家田輸稅盡。拾此充飢腸。

家田は稅を輸すに盡きたれば、此を拾うて飢腸に充つと。

今我何功德。曾不事農桑。

今我何の功德ありて、曾て農桑を事とせず、

吏祿三百石。歲晏有餘糧。

吏祿三百石、歲晏れて餘糧有る。

念此私自媿。盡日不能忘。

此を念うて私に自ら媿ち、盡日忘るる能はず。

【字解】(一) 整屋 縣の名。陝西省西安府に屬す。尉は官名。(二) 田家 農家。閑月は、ひまな時。(三) 婦姑 よめもしう
とも。簞食は籠に入れた飯。(四) 餉田 田畑に辨當をはこぶ。(五) 輸稅 稅を納める。(六) 三百石 石は斛目の名。我邦で
は斛に代用し、十斗の稱とす。(七) 盡日 終日なり。

【題義】 農民の苦勞を寫し、併せて己の耕さずして食ふを媿ちた作である。

【詩意】 農家には一年中ひまな時としては少しもないが、五月になると特に忙しくなる。宵から南風が
吹くと、もう小麥が黄色に實つて畝を覆ふやうになる。婦姑は簞食を荷ひ、子供等は壺漿を攜へ、打連
れて辨當を運び、丁壯は南の岡で働く。足は暑氣に蒸され背は炎天に焼かれるが、心を打込んで熱

いのも忘れて、長き日足を惜んで働いてゐる。傍を見たと貧に窶れた女が子を抱いて立つてゐる。右の手には遺穂を持ち左の臂には弊筐を懸けてゐる。家も田地も納税の爲に形なしになつたから、遺穂を拾つて飢を凌ぐのだ」との事だ。此言を聞いては誰でも涙を流さぬ者はない。翻つて自ら念ふに、余は何の功德があつて耕作もせず食つてゐるのであらう。三百石の俸祿を貰つて、年年いづらかの餘裕がある。此を念うて自ら媿ぢ、終日忘れられない。

題海圖屏風 元和己丑年作

海圖の屏風に題す 元和己丑の年作

海水無風時。波濤安悠悠。
 鱗介無小大。遂性各沈浮。
 突兀海底鼈。首冠三神丘。
 鈞網不能制。其來非一秋。
 或者不量力。謂茲鼈可求。
 鼈風牽不動。綸絕沈其鈞。
 一鼈既頓頷。諸鼈齊掉頭。

海水無風無時、波濤安ぞ悠悠たる。
 鱗介小大と無く、性を遂げて各沈浮す。
 突兀たり海底の鼈、首に三神丘を冠し、
 鈞網も制する能はず、其來ること一秋に非ず。
 或者力を量らずして、茲鼈求む可しと謂ひ、
 鼈風牽けども動かさず、綸絶えて其鈞を沈む。
 一鼈既に頷を頓れば、諸鼈齊しく頭を掉ぶ。

白濤與黑浪。呼吸繞咽喉。
 噴風激飛廉。鼓波怒陽侯。
 鯨鯢得其便。張口欲吞舟。
 萬里無活鱗。百川多倒流。
 遂使江漢水。朝宗意亦休。
 蒼然屏風上。此畫良有由。

白濤と黑浪と、呼吸して咽喉を繞る。
 風を噴きて飛廉を激し、波を鼓して陽侯を怒らしむ。
 鯨鯢其便を得、口を張つて舟を呑まんと欲す。
 萬里活鱗無く、百川倒流多し。
 遂に江漢の水をして、朝宗意亦休せしむ。
 蒼然たり屏風の上、此畫良に由有り。

【字解】(一)鱗介 魚貝なり。(二)突兀 高く聳ゆる貌。鼈は大龜。(三)三神丘 蓬萊・方丈・瀛洲、渤海の中に在り。(四)一秋 一年といふが如し。(五)鼈風 盛に力を用ふる貌。(六)綸 網の綱。向は鈞針。(七)飛廉 風の神。(八)陽侯 水神の名。淮南子註に「陽侯陵陽國侯也。死於水、其神能爲大波」とある。(九)江漢 並に川の名、長江と漢水。(一〇)朝宗 百川の海に注ぐこと。

【題義】海に風のない時は波が穏で大魚も小魚も各其性を全うして浮沈してゐる。折しも海底の大龜が蓬萊山を頭に戴き突兀として現れて來た。この大龜は鈞針でも網でも捉へられないやつで、然も其の來るのが一回ではない。所が己の力を知らぬ者があつて、この大龜を捉へるのは、いと易いことだと謂つて、力を用ひてやつて見たが動かばこそ。遂に綸は切れ鈞は沈んでしまつた。一匹の大龜が頓

を擧げると、他の大龜が皆勢を得て之に倣ひ、風を起し波を湧かし大混亂を來した。すると鯨鯢が得たり賢しと其機に乗じて荒れ狂ひ、萬里に亙つて活きた魚はなく、百川悉く逆流することになつた。それが爲に江漢の水まで海に朝宗せぬやうになつてしまつた。蒼然たる此屏風の畫こそ誠に意味深い畫である。

【餘論】この詩の題の下に元和己丑の年作ると自註がある所を見れば、必ず何か理由があるに相違ない。己丑は元和四年である。その四月に憲宗皇帝は恆冀深趙節度使王士真が死んだので、此機會に河北諸鎮の世襲の弊を革めようとしたが、裴垍だの李絳だのといふ當局大臣は、俄に變革を行へば必ず諸鎮が黨援して叛抗するであらうとの意見で躊躇した。時に中尉吐突承璀といふ者が裴垍の權を奪はんと野心を抱き、自ら請ひ兵に將として之を討つた。此より以來禍亂相續いて已まなかつた。此詩は此事を諷したのであらう。

羸駿

羸駿

驛驢失其主。羸餓無人牧。

驛驢其主を失ひ、羸餓して人の牧ふ無し。

向風嘶一聲。莽蒼黃河曲。

風に向つて嘶くこと一聲、莽蒼たり黃河の曲。

蹋冰水畔立。臥雪冢間宿。

氷を踏んで水畔に立ち、雪に臥して冢間に宿す。

歲暮田野空。寒草不滿腹。

歲暮れて田野空しく、寒草腹に満たす。

豈無市駿者。盡是凡人目。

豈駿を市ふ者無からんや。盡く是れ凡人の目。

相馬失於瘦。遂遺千里足。

馬を相すること瘦に失し、遂に千里の足を遺す。

村中何擾擾。有吏徵芻粟。

村中何を擾擾たる、吏の芻粟を徵する有り。

淪彼軍廩中。化作驚駘肉。

彼を軍廩の中に淪め、化して驚駘の肉と作す。

【字解】【一】羸。瘦せ衰へた駿馬。【二】驛驢。駿馬の名。【三】莽蒼。草の茂る色。【四】冢間。冢の間。【五】失於瘦。馬の衰き所は骨に在りて肉に在らず。即ち瘦せてゐる所に價値があるのである。然るに其價値のある所を見失ふこと。【六】千里足。一日千里を走る駿足。【七】擾擾。騒がしいこと。【八】芻粟。草や穀物。【九】驚駘。驚馬。

【題義】羸駿を借りて俊傑の用ひられないで沈淪してゐるのに喩へたのである。

【詩意】駿馬が主人を失つて餓ゑ瘦せてゐる。莽蒼たる黃河の邊で風に向つて嘶き、或は氷を蹋んで水畔に立ち、或は塚の間の雪中に臥しなどしてゐる。歲の暮で草も枯れて食ふ物もなく、非常な苦境に陥つてゐる。世に駿馬を買はうといふ者が無いわけではないが、皆駿馬を知る眼識のない人ばかりで、瘦せた所に著眼しないで折角の駿馬を失つてしまふ。適村中が騒がしくなつたと思つたら、それは役人が芻粟や軍馬を徵發する爲に來たのであつた。遂に彼の羸駿も軍馬に取られ、可惜驚馬と伍す

廢琴

廢琴

絲桐合爲琴。中有太古聲。

絲桐合せて琴と爲す。中に太古の聲有り。

古聲淡無味。不稱今日情。

古聲淡くして味無し。今日の情に稱はず。

玉徽光彩滅。朱絃塵土生。

玉徽光彩滅し、朱絃塵土生ず。

廢棄來已久。遺音尙泠泠。

廢棄せられて來已に久し。遺音尙ほ泠泠たり。

不辭爲君彈。縱彈人不聽。

君が爲に彈するを辭せず。縱ひ彈するも人聽かず。

何物使之然。羌笛與秦箏。

何物か之をして然らしめたる、羌笛と秦箏と。

【字解】(一) 廢琴 棄てられた琴。(二) 玉徽 徽とは琴の推押する處を表識するシルシ。晉康の琴賦に「徽以三鐘山之玉」とある。(三) 朱絃 陸機の文賦に「同三朱絃之流祀」とあり。禮記に「清廟之瑟、朱絃而疏越、一唱而三歎、有三遺音者矣。」鄭玄註に「朱絃練朱絃也、練則聲濁云云」とある。(四) 泠泠 水の流るる聲。(五) 羌笛 羌は西戎の名。エビスの笛。(六) 秦箏 箏は秦の蒙恬の作る所なりといふ。因つて秦箏と稱す。

【題義】この詩も琴を借りて俗論の用ひられて君子の言の世に容れられないことを悲んだのである。

【詩意】絲と桐とを合せて琴を作る。琴には太古の聲がある。併し古聲は淡泊であるから、今日の俗人の氣には入らない。故に玉徽は光を失ひ、朱絃は塵に汚れ、久しく棄てられてゐるが、なほ遺音が泠泠として残つてゐる。敢て君の爲に彈することを辭せないが、恐らく君は聽くことを好まぬであらう。何物がこんな状態にならしめたかといふに、羌笛や秦箏が珍重されるやうになつた結果である。

李都尉古劍

李都尉の古劍

古劍寒黯黯。鑄來幾千秋。

古劍寒うして黯黯たり。鑄來りて幾千秋。

白光納日月。紫氣排斗牛。

白光日月を納れ、紫氣斗牛を排す。

有客借一觀。愛之不_レ敢求。

客あり借りて一たび觀、之を愛すれども敢て求めず。

湛然玉匣中。秋水澄不流。

湛然たり玉匣の中、秋水澄みて流れず。

至寶有本性。精剛無與儔。

至寶にして本性有り、精剛にして與に儔する無し。

可使寸寸折。不能繞指柔。

寸寸に折れしむ可きも、指を繞つて柔なる能はず。

願快直士心。將斷佞臣頭。

願くは直士の心を快くし、將て佞臣の頭を斷たんと。

不願報小怨。夜半刺私讐。

願はず小怨に報いて、夜半に私讐を刺すを。

勸君慎所用。無作神兵羞。

君に勸む用ふる所を慎み、神兵の羞を作す無かれ。

【字解】(一) 勸。心腹を察からしめる貌。(二) 斗牛。星の名。南斗星と牽牛星。(三) 浩然。水のたたへること。玉匣は玉の箱。(四) 神兵。兵は劍なり。覆劍といふが如し。

【題義】これも古劍を借りて李都尉その人の有爲の材を抱いてゐることを賛歎し、慎んで輕用せぬやうに戒めたのである。

【詩意】この古劍は何處となく見る人の膽を寒からしめる。鑄來つて既に幾千年を経た名劍であるから其れも其筈である。白い光は日月を欺き、紫の氣は星をも凌ぐばかりだ。人(白樂天自ら謂ふ)あり借りて一たび之を觀、非常に氣に入つたが敢て吾が物にしよとはしない。玉の箱の中に藏めて置くと、恰も秋水が澄み湛へて、流れぬやうである。その精剛なる本性は世に並ぶものがない。寸寸に折れることはあるとも指を繞つて巻きつくやうな柔態はない。願はくは直士の用に供して佞臣の頭を断ちたいものちや。小怨を報い夜陰に私讐を刺す用に供したくはない。君(李都尉を指す)に勸めるが輕輕しく用ひて靈劍を汚すことは決してせぬがよい。

雲居寺孤桐

雲居寺の孤桐

一株青玉立。千葉綠雲委。

一株青玉立ち、千葉綠雲委す。

亭亭五丈餘。高意猶未已。

亭亭たり五丈餘、高意猶ほ未だ已まず。

山僧年九十。清淨老不死。

山僧年九十、清淨老いて死せず。

自云手種時。一顆青桐子。

自ら云ふ手づから種うる時、一顆の青桐子と。

直從萌芽拔。高自毫末始。

直は萌芽より抜き、高は毫末より始まる。

四面無附枝。中心有通理。

四面附枝無く、中心通理有り。

寄言立身者。孤直當如此。

言を寄す身を立つる者、孤直當に此の如くなるべし。

【字解】(一) 青玉。桐の樹をいふ。(二) 亭亭。高く立つ貌。(三) 一顆。一個。青桐子は桐の實。(四) 附枝。横に出た枝。慈心に驅られて色色な事に手を出すに喩ふ。(五) 通理。モクメの通つてゐること。物の道理に通じてゐるのに喩ふ。

【題義】雲居寺の庭に桐の樹の亭亭と聳えてゐるのを見て、人の身を立てるのも此の如くありたいものだとの意を述べた。

【詩意】一本の桐が玉の如く立つてゐる。葉は綠の雲のやうに茂つてゐる。五丈餘の高さがあるが、それでも猶ほ伸びようといふ心を失はない。この寺の僧は九十歳になるが、六根清淨の身であるから年はとつても容易に死なない。老僧は、自分が蒔いた時は一個の青い實であつたが、今ではこんなに高くなつたと言つてゐる。新芽の時から眞直に伸び、毫末の微から今日の高さに進んだ。皆絶え

ざる努力の結果である。しかも妄に枝をささず木理がよく通つてゐる。人の身を立てるのも此の桐のやうに孤直でありたいものだ。

【餘論】唐宋詩醇に「香山集中古體多くは鋪敘暢達を以て長を見る。短篇間含蓄蘊藉を以て姿を生ず。此首は短峭中殊に遠勢あり。高意猶未己の五字尤も妙なり」と評してゐる。四面以下二句は周茂叔の愛蓮説の本づく所。

京兆府新栽蓮時爲監屋縣尉趨府作 京兆府に新に蓮を栽う時に監屋縣尉たり、府に趨きて作る

汚溝貯濁水。水上葉田田。汚溝濁水を貯ふ。水上葉田田たり。

我來一長歎。知是東溪蓮。我來つて一たび長歎す。知る是れ東溪の蓮。

下有清泥汚。馨香無復全。下に清泥の汚るる有り。馨香復全き無し。

上有紅塵撲。顔色不得鮮。上に紅塵の撲つ有り。顔色鮮なるを得ず。

物性猶如此。人事亦宜然。物性猶此の如し。人事亦宜しく然るべし。

託根非其所。不如遭棄捐。根を託する其所に非ざるは、棄捐せらるるに如かず。

昔在溪中日。花葉媚清漣。昔溪中に在りし日、花葉清漣に媚ぶ。

今來不得地。願領府門前。今來れば地を得ずして、府門の前に願領たり。

【字解】(一)京兆府 京師を管理する役所。(二)監屋 京兆府の管下の縣名。尉は官名。府は京兆府を指す。(三)田田 蓮の葉の水に浮ぶ貌。(四)願領 やせ負へること。

【題義】京兆府の門前の汚溝の中に咲く蓮花を見て、己の不遇を歎じたのである。

【詩意】きたない溝の中に濁水がたまり、其上に蓮の葉が浮んでゐる。自分は之を一見して坐に歎聲をもらした。この蓮はもと東溪にあつた蓮である。所が今新にここに栽ゑられて、下には汚れた泥があり、上には塵の散るあり、それが爲に十分の色香を保つことも出来ずにゐる。心なき草木すらかくの如くである。人事も亦此と同じである。満足な地位を得られないくらゐなら、いつそ棄てられた方がましである。この蓮も東溪にあつた頃は花も葉も清漣に洗はれ、時めいてゐたのが、今はこんな心にもない所に栽ゑられて、府門の前にしをたれてゐる。氣の毒なことだ。

月夜登閣避暑 月夜閣に登り暑を避く

早久炎氣甚。中人若燔燒。早久しうして炎氣甚し。人に中りて燔燒するが若し。

清風隱何處。草樹不動搖。清風何處にか隠る。草樹動搖せず。

何以避暑氣。無如出塵囂。何を以てか暑氣を避けん。塵囂を出づるに如くは無し。

行行都門外。佛閣正岩崑。行ゆき行ゆく都門の外、佛閣正に岩崑。
 清涼近高生。煩熱委靜銷。清涼高きに近づいて生じ、煩熱靜に委して銷す。
 開襟當軒坐。神泰意飄飄。襟を開き軒に當つて坐すれば、神泰にして意飄飄たり。
 廻看歸路傍。禾黍盡枯焦。歸路の傍を廻看すれば、禾黍盡く枯焦す。
 獨善誠有計。將何救旱苗。獨善誠に計有り。何を將てか旱苗を救はん。

【字解】【一】 燔燒 燒くこと。【二】 岩崑 高く聳ゆる貌。【三】 獨善 ただ我が一身だけを善くすること。
 【題義】 佛閣に登つて炎暑を避け、人は暑を避ける道があるが、草木の枯焦を救ふ道のないことを歎じた。

【詩意】 早天が續いて燒くやうに熱い。清風は何處に隠れたか、草木は微動だにしない。暑を避けるには世塵を離れるがよいと考へて、都門を出て、佛寺の高閣に登つた。段段登るに隨つて涼味も生じ静寂も加はる。襟を開いて欄干に憑れば神氣の頓に爽なるを感ずる。さて歸路に傍の禾黍を顧視すると、盡く枯れ焦げてゐる。ああ我が身は涼を納れる事も出来るが、此の枯れた禾黍を救ふ方法はないものであらうか。

初授拾遺

初めて拾遺を授けらる

奉詔登左掖。東帶參朝議。詔を奉じて左掖に登り、東帶して朝議に參す。
 何言初命卑。且脫風塵吏。何ぞ言はん初命の卑きを。且風塵を脱するの吏。
 杜甫陳子昂。才名括天地。杜甫陳子昂、才名天地を括ぬ。
 當時非不遇。尙無過斯位。當時遇はざるに非ず。尙斯の位に過ぐる無し。
 況予蹇薄者。寵至不自意。況んや予の蹇薄なる者、寵至つて自ら意はず。
 驚近白日光。慙非青雲器。白日の光に近きを驚き、青雲の器に非ざるを慙づ。
 天子方從諫。朝廷無忌諱。天子方に諫に従ふ。朝廷忌諱無し。
 豈不思匪躬。適遇時無事。豈匪躬を思はざらんや。適時の事無きに遇へり。
 受命已旬月。飽食隨班次。命を受けて已に旬月、飽食班次に隨ふ。
 諫紙忽盈箱。對之終自媿。諫紙忽ち箱に盈つ。之に對して終に自ら媿づ。

【字解】【一】 拾遺 官名。供奉諷諫を掌り、以て君主の言行の過失を救ふ。【二】 左掖 左拾遺の役所。【三】 初命 初任といふが如し。【四】 風塵 世路の苦辛。【五】 蹇薄 蹇は跛なり。蹇鈍といふが如し。【六】 青雲器 榮達すべき器量。【七】 匪躬 諷諫

一身の利害を顧みず君の爲に盡すこと。【六】班・班は位なり、等位なり。【七】諫紙・君を諫むる上奏文。

【題義】初めて左拾遺に任せられた時の感想を述べたのである。

【詩意】詔を奉けて左拾遺となり衣冠を整へて朝議に參與することになった。官位の卑いことに就て決して不平は申さぬ。世路の苦辛を脱るるを得ただけでも結構なことだ。杜甫や陳子昂は才名天地を兼ねる程であり、且つ名君に遇合せぬのではなかつたが、それでさへ僅に拾遺の官にありついたら過ぎなかつた。況んや子の如き驚鈍の身で此寵命を拜しようなどとは思ひもかけぬことであつた。されば天日に近づき陛下に咫尺するを驚き、顯榮の地位に陞るべき器でないことを慙づる。天子は諫に従ひ、朝廷には何等忌憚すべきこともない。忠諫を盡さうと思はぬではないが、今は天下無事で、諫むべき問題もない。故に命を拜してから早くも一ヶ月ばかりになるが、ただ俸祿を頂戴して員に備はり、諫書の箱に盈つるを見て獨り自ち媿づるのみだ。

贈元稹

元稹に贈る

自我從宦遊。七年在長安。

我宦遊に従つてより、七年長安に在り。

所得惟元君。乃知定交難。

得る所惟だ元君のみ。乃ち知る交を定むるの難きを。

豈無山上苗。徑寸無歲寒。

豈山上の苗無からんや。徑寸歲寒無し。

豈無要津水。咫尺有波瀾。

豈要津の水無からんや、咫尺波瀾有り。

之子異於是。久要誓不諼。

之子是に異り、久要誓つて諼れず。

無波古井水。有節秋竹竿。

波無し古井の水、節有り秋竹の竿。

一爲同心友。三及芳歲蘭。

一たび同心の友と爲り、三たび芳歲の蘭に及ぶ。

花下鞍馬遊。雪中杯酒歡。

花下鞍馬の遊、雪中杯酒の歡。

衡門相逢迎。不具帶與冠。

衡門に相逢迎し、帶と冠とを具せず。

春風日高睡。秋月夜深看。

春風に日高けて睡り、秋月夜深けて看る。

不爲同登科。不爲同署官。

登科を同じうするを爲さず、署官を同じうするを爲さず。

所合在方寸。心源無異端。

合ふ所は方寸に在り、心源異端無し。

【字解】(一) 宦遊 仕官して他郷に遊ぶこと。(二) 長安 唐の都。(三) 元君 元稹をいふ。(四) 歲寒 論語に「歲寒然後知松栢之後凋」とあり、節操の高いこと。(五) 久要 久しき約束。論語に「久要不忘平生之言」とある。(六) 同心 易經繫辭上傳に「二人同心、其利斷金、同心之言、其臭如蘭」とある。(七) 衡門 舊は横なり。木を横へて門となす、兩居の意。(八) 登科 官吏登庸試験に及第すること。(九) 方寸 心をいふ。

【題義】元稹に贈り投合の厚きを述べ。

【詩意】我は官途に就いて長安に在ること既に七年になるが、其間に得た所の友は惟だ元君一人である。以て交情を訂するの難いことがわかる。山上に草木の苗がないのではないが、それが歳寒の節を保つのは稀だ。又要津の水がないのではないが、忽ち波瀾を生じて物別れになつてしまふ。ただ元君だけは此と其撰を異にし、久約を守つていつまでも忘れない。之を譬へて見れば古井の水の波なきが如く、秋竹の節あるが如くである。我は元君と同心の友となつてから既に三年になる。其間鞍馬に跨つて花下に遊び、杯酒を俱にして雪景を賞し、陋屋に相迎へては衣冠の窮屈なるを脱ぎ、春は日の高くのぼるまで睡り、秋は夜の深けるまで月を眺めなどして交つてゐる。同年の及第者だといふのでもなければ、又同僚の官吏だといふのでもない。ただ氣心がよく合つて異見がないからだ。

哭劉敦質

劉敦質を哭す

小樹兩株柏新土三尺墳

小樹兩株の柏、新土三尺の墳。

蒼蒼白露草此地哭劉君

蒼蒼たり白露の草、此地に劉君を哭す。

哭君豈無辭辭云君子人

君を哭するに豈辭無からんや。辭に云ふ君子の人。

如何天不弔窮悴至終身

如何ぞ天弔まず、窮悴して身を終るに至る。

愚者多貴壽賢者獨賤速

愚者多くは貴壽、賢者は獨り賤速。

龍亢彼無悔螻屈此不伸

龍亢彼悔ゆる無く、螻屈此伸びず。

哭罷持此辭吾將詰義文

哭し罷めて此辭を持ち、吾將に義文を詰らんとす。

【字解】(一) 蒼蒼 草の色。白露は秋に降る露。(二) 速 沈滞して進まざること。(三) 龍亢 龍ののぼりつめること。易經に「亢龍有悔」とある。(四) 螻屈 尺蠖(しやくとりむし)が屈して伸びないこと。易經に、「尺蠖之屈、以求伸也」とある。(五) 義文 伏義及び文王、並に易を作つた人。

【題義】劉敦質の榮達の期を待たずに死んだことを悲んだのである。

【詩意】二本の小さい柏が三尺の新しい塚の上に植ゑられ、草の上には白露がシットリとおりてゐる。余は今この劉君の墓前に立つて君の死を哭する。我は何の辭を以て君を哭するか。君は實に君子人であつた。如何して天は君を憐愍せずして君をして窮迫の間に死なせたのであるか。愚者は多くは貴き位に在りて長生きし、賢者は微賤にして榮達することが出来ない。愚者は龍の如くのぼりつめるとも決して悔ゆることなく、賢者は螻のやうに屈したが、終に伸びないでしまつた。易には「亢龍悔あり」だの「尺蠖の屈するは以て伸びんことを求むるなり」だのとあるが、どうも合點が行かない。余は君を哭し終つたら伏義や文王に詰問しようと思つてゐる。

答友問

友の問に答ふ

大圭廉不割。利劍用不缺。
 當其斬馬時。良玉不如鐵。
 置鐵在洪爐。鐵消易如雪。
 良玉同其中。三日燒不熱。
 君疑才與德。詠此知優劣。

大圭は廉なれども割かず、利劍は用ふれども缺けず。
 其の馬を斬るの時に當つてや、良玉も鐵に如かず。
 鐵を置いて洪爐に在れば、鐵消すること易うして雪の如し。
 良玉其中に同じうすれば、三日燒けども熱せず。
 君才と德とを疑ふ。此を詠めば優劣を知らん。

【字解】 一 大圭 良玉なり。廉は銳角あること。 二 洪爐 金を熔かす大爐。

【題義】 利劍を以て才に比し、良玉を以て德に比し、德の才に優ることを説いたのである。

【詩意】 良玉は廉稜あれども物を割裂することなく、利劍は之を用ふれども缺折することはない。馬を斬る時には良王は利劍にはかなはないが、若し大爐の中に投すれば利劍は雪のやうに忽ち熔けてしまふが、良玉は同じく火中に投するも三日たつても熔けはしない。君は才と德との優劣を疑ふが、之を見れば德の才に優ることがわからう。

雜興三首

雜興三首

楚王多内寵。傾國選嬪妃。
 又愛從禽樂。馳騁每相隨。
 錦鞬臂花隼。羅袂控金羈。
 遂習宮中女。皆如馬上兒。
 色禽合爲荒。刑政兩已衰。
 雲夢春仍獵。章華夜不歸。
 東風二月天。春雁正離離。
 美人挾銀鑊。一發疊雙飛。
 飛鴻驚斷行。斂翅避蛾眉。
 君王顧之笑。弓箭生光輝。
 迴眸語君曰。昔聞莊王時。
 有一愚夫人。其名曰樊姬。

楚王内寵多し。傾國嬪妃を選ぶ。
 又禽に從ふ樂を愛し、馳騁毎に相隨ふ。
 錦鞬花隼を臂にし、羅袂金羈を控く。
 遂に宮中の女に習はすこと、皆馬上の兒の如し。
 色と禽と合せて荒みを爲し、刑政兩ながら已に衰ふ。
 雲夢春仍に獵し、章華夜歸らず。
 東風二月の天、春雁正に離離たり。
 美人銀鑊を挾んで、一發雙飛を疊む。
 飛鴻驚いて行を斷ち、翅を斂めて蛾眉を避く。
 君王之を顧みて笑ふ。弓箭光輝を生ず。
 眸を廻らして君に語りて曰く、昔聞く莊王の時、
 一愚夫人有り、其名を樊姬と曰ふ。

不有此遊樂。三載斷鮮肥。此遊樂有らず、三載鮮肥を斷つ。

【字解】【一】内寵 寵愛する所の婦人。【二】傾國 美人をいふ。【三】從禽 狩獵。【四】錦繡 錦はユガケとて射の胸巻なり。花車は鷹なり。【五】命駕 馬の手綱。【六】雲夢 大澤の名。狩獵地なり。【七】章華 楚王の臺の名。左傳に、「楚子成三章華之臺、願與三諸侯落之」とある。【八】離離 列り飛ぶ貌。【九】蛾眉 美人をいふ。【一〇】莊王 楚王の名。【一一】樊姬 莊王の夫人。莊王が狩獵を好んだので、姬は之を諫めたが聽かなかつた。因つて禽獸の肉を食はなかつたので、莊王も遂に過を改め政事に勤めるやうになつた。【一二】三載 三年。鮮肥は禽獸の肉。

【題義】昔の王者の奢侈遊樂に耽つた事を詠じて暗に時君を諷した作である。

【詩意】楚王は多くの美人を選んで妃となし、又狩を好み錦の鞵をして鷹を臂に載せ、羅の著物を著て馬を驅り、此等の妃を随へて狩に出かけた。遂に宮女たちが男子と同じく武藝を習ふやうになつた。かくて女色と狩獵とに現をぬかしてゐた爲に政刑が忽ち弛んでしまひ、晝は雲夢の澤に狩し夜は章華の臺に宴し、飽く所を知らぬ有様であつた。東風が吹いて春雁の飛ぶ季節になれば、美人たちが弓箭を挾んで御伴を致し、一發して雙飛の雁を射止めるやうな妙伎を演ずるので、流石の雁も驚いて飛ばず、翅を斂めて美人に警戒するやうになつた。楚王は之を顧みて満面に得意の笑を湛へ、美人は大に面目を施し、媚を含んで楚王を見て、承れば昔莊王の御時に、樊姬とやら申す愚な夫人が御坐つて、この遊樂を好まず、三年も禽獸の肉をたべられなかつたとの御話で御坐いますが、さても愚な事で御

坐りますしなどと謂つてゐる。

【一】

越國政初荒。越天旱不已。

風日燥水田。水涸塵飛起。

國中新下令。官渠禁流水。

流水不入田。壅入王宮裏。

餘波養魚鳥。倒影浮樓雉。

澹灩九折池。縈廻十餘里。

四月菱荷發。越王日遊嬉。

左右好風來。香動芙蓉蕊。

但愛芙蓉香。又種芙蓉子。

不念閭門外。千里稻苗死。

【二】

越國政初めて荒み、越天旱して已まず。

風日水田を燥かし、水涸れて塵飛び起る。

國中新に令を下し、官渠に流水を禁す。

流水田に入らず、壅がりて王宮の裏に入る。

餘波魚鳥を養ひ、倒影樓雉を浮ぶ。

澹灩たる九折の池、縈廻すること十餘里。

四月菱荷發き、越王日に遊嬉す。

左右より好風來り、香芙蓉の蕊を動かす。

但芙蓉の香を愛し、又芙蓉の子を種う。

念はず閭門の外、千里稻苗の死るるを。

【字解】【一】官渠 官で開鑿した溝。【二】樓雉 雉は垣なり。【三】澹灩 水の濤く貌。九折池は唐書安樂公主傳に「嘗請三瓦明池爲私沼、帝曰、先帝未有以與、人者、主不悅、自鑿三定昆池、延袤數里、司農卿趙履温爲繕治、累石背三華山、回澗九折、以

石瀆水とある。【四】菱莉 菱と蓮。【五】芙蓉 蓮花の異名。【六】閨門 天に昇る門。因つて王城の門をいふ。

【詩意】越國の政令が荒廢するや早魃が打續いて起り、田の水が涸れて埃が立つやうになつた。すると國中にお布令を出して官渠の水を流すことを禁じ、之を田に入れないで王宮の池に入れた。王宮の池は延袤十餘里に亘り、中には魚鳥が悠悠と泳ぎまはり、城閣の影が倒にうつつてゐる。四月になつて菱や蓮の花の開く頃になると、越王は之を賞玩することを日課とし、蓮花の香氣を好んで益々蓮花を種を足しなどして樂み、足一たび城門を出ると千里に亘つて稻が枯死するのも顧みない。

〔三〕

〔三〕

吳王心日侈。服玩盡奇瓌。

吳王心日に侈り、服玩奇瓌を盡す。

身臥翠羽帳。手持紅玉杯。

身は翠羽の帳に臥し、手は紅玉の杯を持つ。

冠垂明月珠。帶束通天犀。

冠は明月の珠を垂れ、帶は通天の犀を束ぬ。

行動自矜顧。數歩一徘徊。

行動自ら矜り顧み、數歩に一たび徘徊す。

小人知所好。懷寶四方來。

小人好む所を知り、寶を懷いて四方より來る。

奸邪得藉手。從此倖門開。

奸邪手を藉るを得、此より倖門開く。

古稱國之寶。穀米與賢才。

古に稱す國の寶は、穀米と賢才となりと。

今看君王眼。視之如塵灰。

今看る君王の眼、之を視ること塵灰の如し。

伍員諫已死。浮屍去不廻。

伍員諫めて已に死し、浮屍去つて廻らず。

姑蘇臺下草。麋鹿暗生甍。

姑蘇臺下の草、麋鹿暗に甍を生ぜり。

【字解】一 翠羽帳 翡翠の羽のトバリ。二 通天犀 抱朴子に「通天犀、得三其角一尺以上、刺爲魚而銜以入水、水常爲開」とある。三 倖門開 君に諷つて寵を得んと希ふ者が多くなつたこと。四 伍員 吳王夫差の越を敗るや越王勾踐和を請ふ。夫差之を許す。伍員諫むれども聽かず。太宰嚭の讒を信じて伍員に死を賜ふ。伍員死する時家人に告げて曰く、吾が眼を抉りて東門に懸げよ、以て越寇の吳を滅すを觀んと。夫差之を聞いて大に怒り、伍員の屍を取り、之を馬車裏に盛り之を江に投ず。後九年越吳を滅せり。五 姑蘇臺 吳王の都城。六 麋 鹿の子。

【詩意】吳王の越を敗るや心日に侈り、服玩すべて綺麗を盡し、身は翠羽の帳中に臥し、手には紅玉の杯を持ち、冠には明月の珠を垂れ、帶には通天犀を束ね、舉動も亦隨つて矜誇になり、徘徊睥睨四邊を壓するばかりであつた。すると世の小人どもが君の好につけ込み、四方から珍奇な寶を持込むやうになり、奸邪の臣は奇貨置くべしとなして、珍玩を進めて君に取り入ることを務めた。昔は穀米と賢才とは國の寶だと言つたが、吳王の目には塵埃ぐらゐにしか見えない。伍員（字は子胥）は諫めて死し、江上に投棄てられた。其屍も已に流れ去つて返らず。やがて國礎が覆つて麋鹿の棲所と化してしまつた。

宿紫閣山北邨

紫閣山北の邨に宿す

晨遊紫閣峰。暮宿山下邨。

晨には紫閣の峰に遊び、暮には山下の邨に宿す。

邨老見予喜。爲予開一尊。

邨老子を見て喜び、予が爲に一尊を開く。

舉杯未及飲。暴卒來入門。

杯を舉げて未だ飲むに及ばざるに、暴卒來つて門に入る。

紫衣挾刀斧。草草十餘人。

紫衣刀斧を挟み、草草たり十餘人。

奪我席上酒。掣我盤中殮。

我が席上の酒を奪ひ、我が盤中の殮を掣す。

主人退後立。斂手反如賓。

主人退きて後に立ち、手を斂めて反つて賓の如し。

中庭有奇樹。種來三十春。

中庭に奇樹有り、種來三十春。

主人惜不得。持斧斷其根。

主人惜しめども得ず、斧を持ちて其根を斷つ。

口稱采造家。身屬神策軍。

口に稱し采られて家に造る。身は神策の軍に屬す。

主人慎勿語。中尉正承恩。

主人慎んで語ること勿れ。中尉正に恩を承く。

【字解】【一】紫閣山 陝西省郿縣の東南に在る。杜甫の詩に「紫閣峯陰入三澗」云とある。

【二】一尊 尊は樽に同じ、酒樽。

【三】紫衣 神策軍に屬する兵士の服。唐の李庚の西都賦に「親兵百萬、制以神策、紫身的首云云」とある。

【四】草草 無作法な貌。

【五】種來 植みて以來。三十春は三十年。【六】神策軍 唐の禁軍の稱。【七】中尉 唐の中葉以後神策軍を置き、宦官を以て將軍中尉となし之を統領せしめた。

【題義】紫閣山北の村に宿して、禁衛軍の暴行に遇つた有様を敘したのである。

【詩意】朝に紫閣峰に遊び夜山下の村に宿つた。村の老人は余の來たのを喜んで酒の用意をして款待してくれた。いざ飲まうといふ時に紫の軍服をまとひ手に手に刀や斧を持つた十餘人の暴卒が藪から棒に飛び込んで來て、席上の酒を奪つて飲み、盤上の肴を引つ張り寄せて食ひちらした。主人は驚き怖れて引き退り却つて客人でもあるかのやうに慎んでゐた。庭に珍らしい樹があつて植ゑてから三十年にもなる。主人は伐られるのを惜んだが兵卒は容赦もなく伐り棄ててしまつた。歸り際に、吾吾は採用されて兵士となり、神策軍に屬する者であるが、主將の命令で御前の家に來たのである。主將は軍中尉殿は君恩を受けて時めいてゐる御方だから、表沙汰にすると却つて御前の爲にならないから、此事は泣寝入にするがよいぞ」と言つて引き揚げて行つた。

讀漢書

漢書を讀む

禾黍與稂莠。雨來同日滋。

禾黍と稂莠と、雨來れば同日に滋り、

桃李與荆棘。霜降同夜萎。

桃李と荆棘と、霜降れば同夜に萎む。

讀論 宿紫閣山北邨 讀漢書

草木既區別。榮枯那等夷。
 茫茫天地意。無乃太無私。
 小人與君子。用置各有宜。
 奈何西漢末。忠邪竝信之。
 不然盡信忠。早絕邪臣窺。
 不然盡信邪。早使忠臣知。
 優游兩不斷。盛業日已衰。
 痛矣蕭京輩。終令陷禍機。
 每讀元成紀。憤憤令人悲。
 寄言爲國者。不得學天時。
 寄言爲臣者。可以鑒於斯。

草木既に區別す。榮枯那ぞ等夷する。
 茫茫たる天地の意、乃ち太だ私無き無からんや。
 小人と君子と、用置各宜しき有り。
 奈何ぞ西漢の末、忠邪竝に之を信する。
 然らずして盡く忠を信せば、早く邪臣の窺を絶たん。
 然らずして盡く邪を信せば、早く忠臣をして知らしめん。
 優游として兩ながら斷せず、盛業日に已に衰ふ。
 痛しいかな蕭京が輩、終に禍機に陥れられしむ。
 元成の紀を讀む毎に、憤憤として人をして悲しましむ。
 言を寄す國を爲むる者、天の時を學ぶを得ず。
 言を寄す臣たる者、以て斯に鑒みる可し。

【字解】【一】漢書 前漢時代の事を記述した史書。後漢の班固の撰。【二】禾黍 稻やキビ。食料になる穀類。稂莠は苗を害するハゲサ。【三】荆棘 いばら。醜木なり。【四】區別 差別のあること。【五】等夷 なかま。同等なこと。史記に「諸將皆陛下故

等夷」とある。【六】用置 用ふると用ひざると。【七】西漢 前漢をいふ。【八】優游 優柔不斷。【九】蕭京 蕭望之と京房。蕭望之は宣帝の時太子太傅となり遺詔を受けて政を輔く。元帝位に即くに及び、匡正する所多し。後弘恭・石顯の陷るる所となり、婦を飲んで自殺す。京房は孝廉を以て郎となり、元帝の時歷上疏し言ふ所皆中る。石顯等之を疾み、出して魏の太守となす。後獄に下されて死す。【一〇】元成 漢の元帝・成帝。

【題義】漢書を讀み所感を述べたのである。

【詩意】美穀でも醜草でも雨の潤を得れば同じく茂り、桃李でも荆棘でも霜が降れば同じく萎む。草木には美醜の區別があるのに、なぜ榮枯を同じうするのであらうか。天地の心は茫茫として知り難いが、至公無私だからではあるまいか。さて小人と君子とは本来用捨を異にすべきものである。かの前漢の末には、なぜ忠臣も邪臣も併せ用ひたのであらう。若し盡く忠臣を信用したならば早く邪臣の窺を絶つことが出来たであらう。若し又盡く邪臣を信用したならば、早く忠臣をして之を知つて奮起せしめたであらう。然るに優柔不斷であつたから、盛業日に衰へ、蕭望之・京房などの忠臣も禍に陥ることになつて國家を恢復することは出来なかつた。故に漢書の元帝紀や成帝紀を讀めば人をして悲憤に堪へざらしめる。國を治める者は天を學んで至公無私を金科玉條と心得てはいけぬ。又臣たる者は此を鑒みて忠正を心懸くべきである。

贈樊著作

陽城爲諫議。以正事其君。
 其手如屈軼。舉必指佞臣。
 卒使不仁者。不得秉國鈞。
 元稹爲御史。以直立其身。
 其心如肺石。動必達窮民。
 東川八十家。冤憤一言伸。
 劉闢肆亂心。殺人正紛紛。
 其嫂曰庾氏。棄絕不爲親。
 從史萌逆節。隱心潛負恩。
 其佐曰孔戡。捨去不爲賓。
 凡此士與女。其道天下聞。
 常恐國史上。但記鳳與麟。

樊著作に贈る

陽城諫議と爲り、正を以て其君に事ふ。
 其手は屈軼の如く、擧ぐれば必ず佞臣を指す。
 卒に不仁者をして、國鈞を乗るを得ざらしむ。
 元稹御史と爲り、直を以て其身を立つ。
 其心肺石の如く、動けば必ず窮民を達す。
 東川八十家、冤憤一言に伸ぶ。
 劉闢亂心を肆にし、人を殺して正に紛紛たり。
 其嫂を庾氏と曰ふ。棄絶して親と爲さず。
 從史逆節を萌す。隱心潛に恩に負く。
 其佐を孔戡と曰ふ。捨て去つて賓と爲さず。
 凡そ此士と女と、其道天下に聞ゆ。
 常に恐る國史の上、但鳳と麟とを記せんことを。

賢者不爲名。名彰教乃敦。
 每惜若人輩。身死名亦淪。
 君爲著作郎。職廢志空存。
 雖有良史才。直筆無所申。
 何不著書。實錄彼善人。
 編爲一家言。以備史闕文。

賢者は名の爲にせざれども、名彰れて教乃ち敦し。
 毎に惜むかくのごとき人の輩、身死して名亦淪むを。
 君著作郎と爲り、職廢れて志空しく存す。
 良史の才有りと雖も、直筆申ぶる所無し。
 何ぞ自ら書を著し、彼の善人を實録し、
 編みて一家言と爲し、以て史の闕文に備へざる。

【字解】【一】樊著作 樊宗師、字は紹述、元和中著作佐郎を授けられ、綿綿二州の刺史となり、治績あり、諫議大夫に進む、著作郎は國史を掌る官。【二】諫議 官名、諫議大夫。【三】屈軼 また指佞草と名づく。帝王世紀に「黃帝時有草生於庭。佞人入指之。名曰屈軼」とある。【四】國鈞 國家の政權。【五】御史 官名、監察御史。【六】肺石 周禮に「以肺石達窮民」と注に「赤石也。古設於外朝。爲聽訟之處」とある。【七】劉闢 初め韋皋の府に佐たり。卓卒す。闢後務を主る。憲宗給事中を以て之を召す。詔を奉ぜず。即ち劍南西川節度使に拜す。闢益驍蹇にして三川を統べんことを求む。杜黃裳高崇文等を薦め神策行營の兵に將として西討せしむ。詔して自ら新にせんことを許す。闢聽かず。崇文東川を取る。帝乃ち詔を下して其官を奪ひ、京師に擄送して之を斬る。【八】紛紛 多き貌。【九】從史 盧從史なり。澤潞節度使李長榮署して督將となす。長榮卒す。昭義節度副大使に拜せらる。漸く驕恣なり。憲宗兵を領して賊を討たしむ。從史陰に王承宗と通じ兵を勸して逗留し、上書して宰相を兼ねんことを求む。吐突承璀密旨を受け間に乘じ之を縛して以て獻す。死を賜ふ。【一〇】孔戡 吳三孔戡の（一）を見よ。【一一】鳳與麟 國家の祥瑞をいふ。【一二】史闕文 史上の缺失。論語に「吾猶及三史之闕文也」とある。

【題義】著作佐郎樊宗師に贈り直筆を奮つて善人を彰すべきことを勸めたのである。

【詩意】陽城は諫議大夫となり正論を唱へて君に事へた。手は屈軼の如く必ず佞人を指摘した。卒に不仁者(裴延齡)の宰相となることを拒んだ。元稹は監察御史となり直を以て其身を立て、心は肺石の如く必ず窮民に及んだ。故に東川八十家の冤憤が其一言で霽らされた。劍南西川節度使劉闢は亂心を肆にし、妄に人を殺し其嫂庾氏を棄てて顧みず。昭義節度使盧從史は君恩に負いて叛逆を謀り、其佐孔戡を捨てて賓僚とせず。此等の士女は其善惡皆天下に聞えてゐる。國史には麟鳳嘉瑞をのみ記述して賢者の名を彰することを閉却する嫌がある。賢者は名の爲に事を爲すものではないが、賢者の名を彰せばこそ教化も敦くなるのである。此等の善人の名が淪没することは惜むべきことである。君は著作郎となつてゐるが、思ふ様に職責を果すことの出来ぬはめに陥つてゐて、良史の才を持ちながら、直筆を奮ふことが出来ない。已むなくば自ら一書を著して彼の善人を實録し、正史の闕を補つてはどうだ。

蜀路石婦

蜀路の石婦

道傍一石婦、無記復無銘。

道傍の一石婦、記も無く復銘も無し。

傳是此鄉女、爲婦孝且貞。

傳ふ是れ此郷の女と、婦と爲りて孝且つ貞。

十五嫁邑人、十六夫征行。

十五邑人に嫁し、十六夫征行す。

夫行二十載、婦獨守孤帑。

夫行いて二十載、婦獨り孤帑を守る。

其夫有父母、老病不安寧。

其夫父母有り、老病して安寧ならず。

其婦執婦道、一如禮經。

其婦婦道を執ること、一一禮經の如し。

晨昏問起居、恭順發心誠。

晨昏に起居を問ひ、恭順心の誠に發す。

藥餌自調節、膳羞必甘馨。

藥餌自ら調節し、膳羞必ず甘馨なり。

夫行竟不歸、婦德轉光明。

夫行きて竟に歸らず、婦德轉光明なり。

後人高其節、刻石像婦形。

後人其節を高しとし、石に刻して婦の形に像る。

儼然整衣巾、若立在閨庭。

儼然として衣巾を整へ、立ちて閨庭に在るが若し。

似見舅姑禮、如聞環珮聲。

舅姑の禮を見るに似たり、環珮の聲を聞くが如し。

至今爲婦者、見此孝心生。

今に至るまで婦たる者、此を見て孝心生す。

不比山頭石、空有望夫名。

山頭の石の、空しく望夫の名有るに比せず。

【字解】(一)二十載、二十年。(二)孤帑、孤獨なり。(三)膳羞、産は食物の滋味あるもの。(四)環珮、腰に佩ぶる玉。破記に「行歩則有環珮之聲、升車則有鸞和之音」とある。(五)望夫、武昌の北山に石あり、狀人の立つが如し。相傳ふ昔貞婦あり。其夫役に從ひ遠く國難に赴く。婦子を携へ此山に餓死して夫を望み、化して石となると。事神異經に見ゆ。

【題義】蜀路に婦人の石像を見て其孝貞を述べたのである。

【詩意】路傍に婦人の石像が立つてゐる。記も銘も刻してない。聞けば此村の女で孝貞の譽の高い女なさうだ。十五の時村の男に嫁し、十六の時夫は從軍し、それ以來二十年の間といふものは獨り空闕を守つた。夫に兩親があつて年老い病みほうけてゐるが、此婦は正しく婦道を守つて禮經の通りにし、朝晩は必ず舅姑の御機嫌を伺ひ、誠意を以て恭順を行ひ、藥餌や食事も人手を借らずに自ら整へた。後の人が其貞節をほめて此像を立てたとの事である。見れば儼然と衣巾を整へて立ち、舅姑に事ふる禮を見るが如く、環珮の音を聞くやうに感せられる。今日まで此石を見て孝心を起したものが少くないであらう。かの夫の後を慕つて石に化したといふ望夫石とは同日の論ではない。

折劍頭

折劍頭

拾得折劍頭。不知折之由。

折劍の頭を拾得す。之を折りし由を知らず。

一握青蛇尾。數寸碧峯頭。

一握青蛇の尾、數寸碧峯の頭。

疑是斬鯨鯢。不然刺蛟虬。

疑ふらくは是れ鯨鯢を斬るか、然すんば蛟虬を刺すかと。

缺落泥土中。委棄無人收。

缺けて泥土の中に落ち、委棄せられて人の收むる無し。

我有鄙介性。好剛不好柔。
勿輕直折劍。猶勝曲全鉤。

我鄙介の性有り、剛を好んで柔を好まず。
輕んすること勿れ直折の劍、猶曲全の鉤に勝れり。

【字解】(一) 折劍頭 折れた劍の頭。(二) 蛟虬 龍なり。(三) 鄙介性 狷介な性質。一國者。(四) 曲全鉤 曲つて折れず
にひるカギ。鉤は釣針の如きもの。

【題義】折劍の端を拾ひ、所感を述べた。

【詩意】折れた劍の頭を拾ひ得た。なぜ折れたのか其由はわからない。其形は青蛇の尾の如く、又碧峰の頂のやうだ。恐らく鯨鯢を斬つたか蛟龍を刺した爲に折れたのであらう。一旦折れて泥土の中に落ちると、全く棄てられて拾ひ取る人もない。ただ余は狷介な氣質で剛を好んで柔を惡む。世人に直にして折れる劍を輕んじてはいけない。曲つて全き鉤よりは遙に優つてゐるではないか。

登樂遊園望

樂遊園に登りて望む

獨上樂遊園。四望天日曛。

獨り樂遊園に上る。四望天日曛る。

東北何靄靄。宮闕入煙雲。

東北何ぞ靄靄たる、宮闕煙雲に入る。

愛此高處立。忽如遺垢氣。

此を愛して高處に立てば、忽ち垢氣を遺るるが如し。

憐君別我後。見竹長相憶。
 常欲在眼前。故栽庭戶側。
 分首今何處。君南我在北。
 吟我贈君詩。對之心惻惻。

【字解】 分首 遠く別れること。 惻惻 痛み悲む貌。

【題義】 元稹江陵に貶せられ、新に竹を庭前に栽ゑ、之に對して懷あり、詩を作つて樂天に寄せた。樂天因つて此詩を作つて元稹に酬いたのである。

【詩意】 今から十年前に君と僕とは相識の間柄になつた。僕は君の心の孤直なることを秋竹に比して賛歎し、世事紛紛として極りなきも、君と僕とは中心相合うて違ふことなく、共に秋竹の操を保ち、風霜も侵すことは出来なかつた。因つて梧葉の秋至れば忽ち落ち、楊柳の春色に媚びて柔枝を垂るを嫌つた。君は僕に別れて後、竹を見て遙に僕を思ひ、故に窓前に栽ゑて、僕を慰ぶ料となし、僕が君に贈つた詩を吟じ、其竹に對して獨り心を痛ましめてゐる。誠に氣の毒に堪へない。

感鶴

鶴に感ず。

鶴有不羣者。飛飛在野田。
 飢不啄腐鼠。渴不飲盜泉。
 貞姿自耿介。雜鳥何翩翩。
 同遊不同志。如此十餘年。
 一興嗜慾念。遂爲贈繳牽。
 委質小池內。爭食羣雞前。
 不惟懷稻粱。兼亦競腥羶。
 不惟戀主人。兼亦狎烏鳶。
 物心不可知。天性有時遷。
 一飽尚如此。況乘大夫軒。

【字解】 耿介 節操を守ること。 翩翩 軽く飛ぶ貌。 贈繳 いくるみの矢。 質を委す 身を置くこと。 腥羶 肉なり。 烏鳶 凡俗の徒に比す。 物心 人心なり。 大夫軒 左傳に、「衛の懿公鶴を好み、鶴軒に乗る者あり。」註に軒は大夫の車とあり。

【題義】 鶴の凡鳥と異つて操守の高いことを詠じ、俗人の名利に奔走することを刺つたのである。

【詩意】鶴は凡鳥と羣せざる操守があつて野田の間に飛んでゐる。飢ゑても腐鼠を食はず、渴しても盜泉の水は飲まない。世の凡鳥の翩翩として軽く飛ぶのとはまるで違つて、氣位の高いものであつた。此の如きこと十年の長い間であつた。然るに一朝、慾念に驅られて、遂にいぐるみの禍に遭ふに至つた。身を小池の内に置き、羣雞と伍して食を争ひ、ただ米粟を争ふのみならずして鮮肉をも争ひ、ただ主人を慕ふのみならずして凡俗の輩をも慕ふ。人心は豫期すべからず、天性も時としては變るものである。利益ですら此の如く争ふのであるから、官位などを争ふのは謂ふまでもない。

春雪

春雪

元和歲在卯。六年春二月。

元和歲卯に在り、六年春二月。

月晦寒食天。天陰夜飛雪。

月晦寒食の天、天陰つて夜雪を飛ばす。

連宵復竟日。浩浩殊未歇。

連宵復竟日、浩浩として殊に未だ歇まず。

大似落鵝毛。密如飄玉屑。

大は鵝毛を落すに似たり、密は玉屑を飄すが如し。

寒銷春茫蒼。氣變風凜冽。

寒銷えて春茫蒼、氣變じて風凜冽。

上林草盡沒。曲江水復結。

上林草盡く沒し、曲江水復結ぶ。

紅乾杏花死。綠凍楊枝折。

紅乾いて杏花死れ、綠凍りて楊枝折る。

所憐物性傷。非惜年芳絕。

憐む所物性の傷くを、年芳の絶ゆるを惜むに非ず。

上天有時令。四序平分別。

上天時令有り、四序平に分別す。

寒煖苟反常。物性皆天闕。

寒煖苟も常に反すれば、物性皆天闕す。

我觀聖人意。魯史有其說。

我聖人の意を観るに、魯史其說有り。

或記水不冰。或書霜不殺。

或は水の氷らざるを記し、或は霜の殺さざるを書す。

上將儆政教。下以防災孽。

上は將て政教を儆め、下は以て災孽を防ぐ。

茲雪今如何。信美非時節。

茲雪今如何、信に美なれども時節に非ず。

【字解】【一】元和 憲宗の年號。歲は歲星として星の名。その星が卯をさすこと、元和六年辛卯をいふ。【二】月晦 みそか。寒食は氣節の名、冬至から一百五日目。【三】竟日 終日に同じ。【四】浩浩 盛にふる貌。【五】茫蒼 春のぼんやりした貌。

【六】上林 天子の御苑。【七】曲江 長安に在る池の名。都人遊賞の地。【八】年芳 春の花。【九】時令 もとは時節に布く政令の意であるが、後世では單に時節の意となる。【一〇】四序 四季、春夏秋冬。【一一】寒煖 寒暖。【一二】天闕 おさへふさがれる。【一三】魯史 孔子の著した春秋を指す。【一四】災孽 わざはひ。

【題義】春になつて大雪が降つたことを賦して、時節の順調でないことを悲んだのである。

【詩意】元和六年春二月末の寒食の頃に、大雪が連日連夜ふりつづいて尙ほ歇まない。その大きさは鶯鳥の羽の如く、その密なることは玉屑を飄すやうである。一時寒氣もゆるみ大分春景色になつて來たのが、忽ち一變して寒風膚を劈き、御苑の草も盡く埋まり、曲江には復び氷がはりつめ、紅の杏の花も色褪せ、緑の楊の枝も折れた。春花の絶えたのは敢て惜みはしないが、萬物が其性を損傷せらるるのは同情に堪へない。天には一定の時節があつて、四季に平分せられてゐるのであるから、寒暖其常を失へば、萬物は皆其性を害される。聖人孔子も此に感ずる所があつて、春秋に氷のはらなかつた事や霜が草木を枯らさなかつた事を記し、上は政教の宜しきを失つてゐることを警め、下は災殃を防ぐ料とした。さて今年の雪は如何といふに、信に景色は美しくなつたが、時節には相應しない。これといふも政教が宜しきを失つてゐるからであらう。

高僕射

高僕射

富貴人所愛。聖人去其泰。
 所以致仕年。著在禮經內。
 玄元亦有訓。知止則不殆。

富貴は人の愛する所、聖人は其泰を去る。
 所以に仕を致すの年、著して禮經の内に在り。
 玄元亦訓有り、止るを知らば則ち殆からずと。

二疏獨能行。遺跡東門外。

二疏獨り能く行ひ、跡を東門の外に遺す。

清風久銷歇。追此向千載。

清風久しく銷歇し、此に追ふまで千載に向とす。

斯人古亦稀。何況今之代。

斯のごとき人古亦稀なり。何ぞ況んや今の代をや。

遑遑名利客。白首千百輩。

遑遑たり名利の客、白首千百輩。

唯有高僕射。七十懸車蓋。

唯高僕射のみ有り、七十にして車蓋を懸く。

我年雖未老。歲月亦云邁。

我年未だ老いずと雖も、歲月亦云に邁きぬ。

預恐毫及時。貪榮不能退。

預め恐る毫の及ぶ時、榮を貪つて退く能はざるを。

中心私自傲。何以爲我戒。

中心私に自ら傲む、何を以てか我戒と爲さん。

故作僕射詩。書之於大帶。

故に僕射の詩を作り、之を大帶に書す。

【字解】【一】高僕射 僕射は官名。高は姓。【二】泰 驕泰なり。老子第二十九章に「聖人は甚を去り奢を去り泰を去る」とあり。【三】致仕 官を辭して隱退すること。【四】玄元 老子をいふ。【五】二疏 漢の疏廣は宣帝の太傅となり、兄の子受は少傅となる。位に在ること五歳、俱に病と稱し官を辭して郷に歸る。【六】東門 疏廣、疏受の官を辭して歸郷する時、洛陽の東門外に送る者車數百乗あつたといふ。【七】千載 千年なり。【八】遑遑 汲汲といふが如し。【九】懸車蓋 懸車に同じ、車を懸けて再び出でざるを示す意で、詩賦すること。【一〇】大帶 紳なり。禮服の上にしめる帯。論語に「子張これを紳に書す」とあり。

【題義】高僕射の七十になつて高踏勇退したことをほめた詩である。

【詩意】富貴は皆人の好む所で、ともすれば溺れ易いから、聖人は驕泰を去つて貪らず。又禮記の中には、「大夫七十にして事を致す」と明記してある。老子も亦「止まるを知らば殆からず」と教訓を垂れてゐる。漢の疏廣、疏受の二人は能く此訓を守り東門の外に偉跡を留めてゐる。かかる清廉の風は久しく絶えて今や將に千年ならんとするが、古人にも稀なのだから現代には尙更少いわいで、今日の人は皆名利の奴となつて白髪を戴いて奔走する者が幾千百人あるかわからない。獨り高僕射は禮記の明文通り七十になつた所が、深く官を辭した。余はまだ老年といふ程ではないが、年月の立つのは早いものだから、おつつけ老年になるのであるが、どうか老いばれないうちに早く足を洗ひたいものだ。中心私に此を以て戒となし、高僕射の詩を作つて之を紳に書し、忘れないやうにする次第である。

白牡丹 和錢學士作

白牡丹 錢學士に和する作

城中看花客、旦暮走營營。
素華人不顧、亦占牡丹名。
開在深寺中、車馬無來聲。

城中花を看る客、旦暮走つて營營たり。
素華は人顧みざれども、亦牡丹の名を占む。
開いて深寺の中に在り、車馬來る聲無し。

唯有錢學士、盡日遠叢行。
憐此皓然質、無人自芳馨。
衆嫌我獨賞、移植在中庭。
留景夜不暝、迎光曙先明。
對之心亦靜、虛白相向生。
唐昌玉蘂花、攀翫衆所爭。
折來比顏色、一種如瑤瓊。
彼因稀見貴、此以多爲輕。
始知無正色、愛惡隨人情。
豈惟花獨爾、理與人事并。
君看入眼者、紫艷與紅英。

唯錢學士のみ有り、盡日叢を遠つて行く。
憐む此皓然の質、人無くして自ら芳馨。
衆は嫌へども我獨り賞し、移し植えて中庭に在く。
景を留めて夜暝からず、光を迎へて曙先明なり。
之に對すれば心も亦靜に、虛白相向つて生ず。
唐昌の玉蘂花、攀翫して衆の争ふ所なり。
折り來つて顏色を比すれば、一種瑤瓊の如し。
彼は稀なるに因つて貴ばれ、此は多きを以て輕せらる。
始めて知る正色無く、愛惡は人情に隨ふことを。
豈惟花のみ獨爾らんや、理は人事と并ぶ。
君看よ眼に入る者、紫艷と紅英と。

【字解】【一】城中、長安の都の中。【二】營營、忙しく奔走する貌。【三】素華、白い花。白牡丹。【四】皓然質、白い姿。
【五】虛白云云、莊子人間世篇に「虛室生白」とあり。【六】唐昌、劇談錄に「長安の安樂坊の唐昌觀にもと玉蘂花あり云云」とあり。

り。玉蕊は花の名。色白し。唐人は甚だ此花を重んじた。【七】正色 定色といふが如し。美醜の評價の一定して動かない色。莊子齊物論に「毛嫱麗姬は人の美とする所なり。魚之を見れば深く入り、鳥之を見れば高く飛び、麋鹿之を見れば決驟す。四者孰か天下の正色なるを知らんや」とあり。【八】愛慕 愛憎、好悪なり。

【題義】白牡丹を借りて、世人は紅紫を愛して素白を嫌ふが、美醜は本來物に在るのではなくて我が心に在るのであるといふことを敍した。

【詩意】長安城中の人人は、朝から晩まで花を観る爲に奔走してゐる。併し白い花は見ればえがしなもので誰も顧る者もなく、此花はただ牡丹といふ名ばかりで、日蔭者のやうに山寺の中に在るから、トント觀に来る人もない。ただ錢學士のみは此花を好んで、終日叢を遶つて賞玩した。余も此花の潔白な姿を持ち、賞玩する人がなくても不平がましい色もせず、獨り自ら操守を守つてゐるのを愛する。因つて中庭に移し植ゑた。夜になつて花の色で明るさを感じ、夜の明けぬに早くも旭の光を見ることが出来る。此花に對すれば、吾が心も自然と虚靜になる。唐昌觀の玉蕊花は世人の争つて賞玩する所のものであるが、折り來つて此花と色香を比べると、玉のやうな美しさを持つてゐることは、孰れも同じであるが、ただ彼は類が稀なので貴ばれ、此は類が多いので珍重されない。此に因つても世に正色といふものはない。美醜は人情に由つて決するものだといふことがわかる。ただ獨り花ばかりでない。人事も此と同理である。眼に入る者は紫艷と紅英とであることを見て考へて見給へ。

贈内

内に贈る

生爲同室親。死爲同穴塵。
他人尙相勉。而況我與君。
黔婁固窮士。妻賢忘其貧。
冀缺一農夫。妻敬儼如賓。
陶潛不營生。翟氏自爨薪。
梁鴻不肯仕。孟光甘布裙。
君雖不讀書。此事耳亦聞。
至此千載後。傳是何如人。
人生未死間。不能忘其身。
所須者衣食。不過飽與溫。
蔬食足充飢。何必膏粱珍。
繪絮足禦寒。何必錦繡文。

生きては同室の親みを爲し、死しては同穴の塵と爲る。
他人すら尙相勉む、而るを況んや我と君とをや。
黔婁は固より窮士なるも、妻賢にして其貧を忘る。
冀缺は一農夫なるも、妻敬して儼として賓の如し。
陶潛は生を營まず、翟氏自ら爨薪す。
梁鴻は肯て仕へず、孟光布裙に甘んず。
君書を讀まずと雖も、此事耳に亦聞かん。
此千載の後に至り、傳ふ是れ何如なる人ぞ。
人生れて未だ死せざる間、其身を忘るる能はず。
須ふる所の者は衣食、飽と温とに過ぎず。
蔬食も飢を充すに足る、何ぞ必しも膏粱の珍のみならん。
繪絮も寒を禦ぐに足る、何ぞ必しも錦繡の文のみならん。

君家有貽訓。清白遺子孫。

君が家に貽訓有り、清白子孫に遺す。

我亦貞苦士。與君新結婚。

我も亦貞苦の士、君と新に婚を結ぶ。

庶保貧與素。偕老同欣欣。

庶くは貧と素とを保ち、偕に老いて同じく欣欣たらん。

【字解】(一)内 妻をいふ。(二)黔婁 古代の齊の隱士、貧甚だし。(三)冀缺 左傳に「白季使して冀を過ぐ。冀缺の耕鋤し其妻之に歸するを見るに、相敬すること賓の如し」とあり。(四)陶潛 陶淵明。(五)翟氏 陶淵明の妻。翟氏は炊事を躬らすること。(六)梁鴻 後漢の人、字は伯鸞、家貧にして氣節を尚ぶ。孟光を娶る。椎髻布衣自ら操作し、食を進むるに案を舉ぐることに肩に齊うす。(七)千載 千年なり。(八)貽訓 遺訓に同じ。(九)清白 清廉潔白。

【題義】妻に贈つて質素を守るべきことを諭した詩である。

【詩意】生きては俱に室を同うし、死しては墓穴を俱にするは夫婦の道であるから、余の感ずる所を御身に勸勉するが、昔黔婁は窮士であつたが、妻が賢婦であつて少しも其貧を苦にしなかつた。冀缺は一の農夫であつたが、其妻は夫を敬すること賓客の如くであつた。陶淵明は生計を營まなかつたが、其妻翟氏は躬ら炊事までして善く夫に事へた。梁鴻も仕官を快しとせず、其妻孟光は粗服をまといつて満足してゐた。御身は書物で讀んだことはあるまいが、耳には聞いたこともあるであらう。以上の婦人たちが千年を経た今日何如なる人と傳へられてゐるか、皆賢婦貞女として稱賛されてゐるではないか。人が生きてゐる間は衣食は必要缺くべからざるものであるが、要は腹を満たし寒を防ぐに足れば

よいのである。粗食でも腹は満たせる。何も膏粱の珍味でなければならぬわけではない。粗服でも寒は防げる。錦繡の文飾は無用の沙汰ぢや。御身の家には祖先の遺訓があつて子孫に清廉潔白の行を守らせてゐる。我も固より貞苦の人である。今御身と夫婦の縁を結んだからは、どこまでも貧素を守り、愉快に一生を終らうではないか。

寄唐生

唐生に寄す

賈誼哭時事。阮籍哭路岐。

賈誼は時事を哭し、阮籍は路岐を哭す。

唐生今亦哭。異代同其悲。

唐生今亦哭し、代を異にして其悲を同うす。

唐生者何人。五十寒且飢。

唐生なる者は何人ぞ。五十にして寒且飢う。

不悲口無食。不悲身無衣。

口に食無きを悲まず、身に衣無きを悲まず。

所悲忠與義。悲甚則哭之。

悲む所は忠と義と、悲甚だしければ則ち之を哭す。

太尉擊賊日。尙書叱盜時。

太尉賊を撃つの日、尙書盜を叱するの時。

大夫死兇寇。諫議謫蠻夷。

大夫兇寇に死し、諫議蠻夷に謫せらる。

每見如此事。聲發涕輒隨。
 往往聞其風。俗士猶或非。
 憐君頭半白。其志竟不衰。
 我亦君之徒。鬱鬱何所爲。
 不能發聲哭。轉作樂府詩。
 篇篇無空文。句句必盡規。
 功高虞人箴。痛甚騷人辭。
 非求宮律高。不務文字奇。
 惟歌生民病。願得天子知。
 未得天子知。甘受時人嗤。
 藥良氣味苦。琴淡音聲稀。
 不懼權豪怒。亦任親朋譏。
 人竟無奈何。呼作狂男兒。

此の如き事を見る毎に、聲發して涕輒ち隨ふ。
 往往其風を聞きて、俗士猶或非。
 憐む君頭半白、其志竟に衰へず。
 我亦君が徒なり、鬱鬱として何の爲す所ぞ。
 聲を發して哭する能はず、轉た樂府の詩を作る。
 篇篇空文無く、句句必ず規を盡す。
 功は虞人の箴よりも高く、痛みは騷人の辭よりも甚だし。
 宮律の高きを求むるに非ず、文字の奇なるを務とせず。
 惟生民の病を歌ひて、天子の知を得んことを願ふ。
 未だ天子の知を得ず、甘んじて時人の嗤を受く。
 藥良ければ氣味苦く、琴淡ければ音聲稀なり。
 權豪の怒を懼れず、亦親朋の譏に任す。
 人竟に奈何ともする無く、呼んで狂男兒と作す。

每逢羣盜息。或遇雲霧披。
 但自高聲歌。庶幾天聽卑。
 歌哭雖異名。所感則同歸。
 寄君三十章。與君爲哭詞。

羣盜の息むに逢ふ毎に、或は雲霧の披くに遇ふがごとく、
 但自ら高聲に歌ふ。庶幾くは天の卑きに聽かんことを。
 歌哭名を異にすと雖も、感ずる所は則ち歸を同じうす。
 君に寄す三十章、君が與に哭詞を爲る。

【字解】(一) 唐生 名は喬。舊唐書本傳に「進士の試に歴じ久しく第せず、能く歌詩を爲る、意感發多し。人の文章を見、傷歎する所の者あれば、讀み訖つて必ず哭し、涕泗已む能はず。故に世に唐喬善く哭すと稱す云云」とあり。(二) 賈誼 前漢の人、文帝召して博士となす。超遷して太中大夫に至る。(三) 阮籍 三國魏の詩人。山に登り水を遊び竟日歸るを忘れ、途窮るに至る毎に輒ち痛哭して歸る。路岐は路の分るること。(四) 太尉 段太尉の笏を以て朱泚を撃つたこと。(五) 尚書 顯慶代宗の時尙書右丞となる。李希烈の叛するや往きて順逆を論し、遂に其の殺す所となる。(六) 大夫 自註に「陸大夫亂兵の爲に害せらる」とあり。(七) 諫議 諫議大夫陽城、裴延齡の相となるを拒んで極諫し、白麻を取つて之を裂く。乃ち道州刺史に貶せらる。(八) 規 成なり。(九) 虞人箴 虞人は獵を掌る官。箴は訓戒の辭なり。左傳襄公四年に「昔周の辛甲の大史たるや、百官に命じて官もて玉の闕を箴せしむ。虞人の箴に於て曰く、甚ぞたる禹跡、盡して九州となす。九道を経啓し、民に農圃あり、獸に茂草あり。各處る故あり、雖もつて擾れず云云」とあり。(一〇) 騷人 騷は憂なり。楚の屈原憂愁思して離騷を作る。(一一) 宮律 宮は音律の名。音律といふが如し。

【題義】唐喬に寄せて、喬の世事を哭するは樂天の世事を歌ふと其投を一にすることを述べたのである。

【詩意】昔買誼は時事を哭し阮籍は岐路を哭したといふが、今唐生は世を異にして彼等と其悲哭を同うしてゐる。さて唐生は如何なる人ぞといふに、五十になつても尙ほ飢寒に苦んでゐるが、衣食の乏しいことなどは悲まないで不忠不義を悲み、悲むの結果は常に哭する。段太尉の賊を撃つた時、顔真卿の盜を叱した時、陸大夫の寇兵に斃れた時、陽城の蠻夷に貶せられた時、皆之を哭して聲淚相俱に下つた。世の俗士は之を聞いて非笑するが、余は君が半白の老人になるまで、少しも其志の衰へないのを愛する者である。實は余も亦君の仲間で、常に鬱鬱として世事を憂へ、聲を發して哭しはしたが、樂府の詩を作つて慨を寄せてゐる。故に余が詩は一篇として空文はなく、必ず規戒の意を寓してゐるので、功は虞人の箴よりも高く、悲は騷人の辭にもまさつてゐる。音律の高いことや文字の奇は求めない。唯人民の痛苦を歌つて之を天聽に達すればよいのだ。所が未だ天聽に達しないうちに、世人の嘲笑を買つてしまふ。良藥は口に苦く稀聲は聴く者が少いならひで、余の詩も世人には受けがわるいが、怒らば怒れ諷らば諷れといふ態度でゐるので、世人も余を如何ともする能はず、狂男兒と呼んで取り合はない。羣盜の鎮まるに逢へば雲霧の散じたやうに氣がはればれとして、高聲に歌つて天子の聽かんことを庶幾つてゐる。歌ふと哭するとは事はちがふが、感慨は同じだ。因つて君に三十章の歌を寄せ、君が爲に哭詞を作つた。

傷唐衢二首

唐衢を傷む二首

自我心存道、外物少能逼。
常排傷心事、不爲長歎息。
忽聞唐衢死、不覺動顏色。
悲端從東來、觸我心惻惻。
伊昔未相知、偶遊滑臺側。
同宿李翱家、一言如舊識。
酒酣出送我、風雪黃河北。
日西竝馬頭、語別至昏黑。
君歸向東鄭、我來遊上國。
交心不交面、從此重相憶。
憐君儒家子、不得詩書力。
五十著青衫、試官無祿食。

我心に道を存してより、外物能く逼ること少し。
常に傷心の事を排し、長歎息を爲さず。
忽ち唐衢が死を聞き、覺えず顔色を動かす。
悲端東より來り、我に觸れて心惻惻たり。
伊昔未だ相知らざりしとき、偶滑臺の側に遊び、
同じく李翱が家に宿し、一言にして舊識の如し。
酒酣にして出でて我を送る、風雪黃河の北。
日西にして馬頭を竝べ、別を語つて昏黑に至る。
君は歸つて東鄭に向ひ、我は來つて上國に遊ぶ。
心を交へて面を交へず。此より重ねて相憶ふ。
憐む君が儒家の子にして、詩書の力を得ざることを。
五十にして青衫を著、官に試みられて祿食無し。

遺文僅千首。六義無差忒。
散在京洛間。何人爲收拾。

遺文千首に僅く、六義差忒無きも、
散じて京洛の間に在り。何人か爲に收拾せん。

【字解】【一】滑臺 地名、白馬城ともいふ。今の河南省滑縣。【二】昏黑 夕暮。【三】上國 帝都に近い地方。【四】青衫 身分の低い者の著る服。【五】六義 詩に六義あり。風雅頌比賦興是れなり。差忒は違ふこと。

【題義】唐衢の死を悲んだ詩である。

【詩意】われ道術を體得してより、外物の爲に心を傷ましむることもなく、長歎太息することもない。ふと唐衢の死んだことを聞いて、覺えず顔色を變へて驚歎した。悲報は東方から傳はり來つて、わが心緒を亂したのである。想へば昔滑臺に遊んだ時、君と同じく李翱の家に宿り、一見舊知の如く親しくなつたのが、抑の知り始めてあつた。あの時共に酒杯を舉げ、君は余を送つて風雨の中を黄河の北まで來て、馬を並べて離別の悲を語つて日没に至つた。それから君は東鄭に向ひ我は京に向つて、爾來心の交だけで相見ることとはなく、常に遙に相憶ふのみであつた。氣の毒なことに、君は儒者の家に生れながら詩書の力を得ず、文官試験を受けても及第も出來ず、五十になつても青衫を著、官に就いても俸祿も薄かつた。遺文は千首に近いほどあつて、六義に叶つた立派な作であるが、京洛の間に散佚し、誰あつて収録する者もない。

【餘論】青衫は微賤の人の服である。甌北詩話に、香山の詩惟に俸を記するのみならず、兼ねて品服を記す。初め校書郎となりてより江州司馬に至るまで、皆青衫を衣る。春去の詩あり、云く、青衫不改去年身と。寄微之に云く、折腰俱老綠衫中と。及び琵琶行に云く、江州司馬青衫濕と。是れなり云云とある。

〔一〕

憶昨元和初。忝備諫官位。
是時兵革後。生民正憔悴。
但傷民病痛。不識時忌諱。
遂作秦中吟。一吟悲一事。
貴人皆怪怒。間人亦非訾。
天高未及聞。荆棘生滿地。
惟有唐衢見。知我平生志。
一讀興歎嗟。再吟垂涕泗。

〔二〕

憶ふ昨元和の初、忝く諫官の位に備はる。
是時兵革の後、生民正に憔悴す。
但民の病痛を傷んで、時の忌諱を識らず。
遂に秦中吟を作り、一吟一事を悲しむ。
貴人皆怪しみ怒り、間人も亦非訾す。
天高うして未だ聞ゆるに及ばず、荆棘滿地に生ず。
惟唐衢のみ見る有り、我が平生の志を知る。
一讀して歎嗟を興し、再吟して涕泗を垂る。

因和三十韻。手題遠緘寄。因つて和す三十韻、手づから題して遠く緘寄す。
 致我陳杜間。賞愛非常意。我を陳杜の間に致し、賞愛すること常の意に非ず。
 此人無復見。此詩猶可貴。此人復び見る無し、此詩猶貴ぶ可し。
 今日開篋看。蠹魚損文字。今日篋を開いて看れば、蠹魚文字を損す。
 不知何處葬。欲問先歎歎。知らず何の處にか葬る。問はんと欲して先づ歎歎す。
 終去哭墳前。還君一掬淚。終に去つて墳前に哭し、君に一掬の涙を還さん。

【字解】(一)元和 憲宗の年號。(二)兵革 戰亂なり。(三)憔悴 疲弊すること。(四)非管 所しる。(五)緘寄 緘は封なり、封筒に入れて郵寄すること。(六)陳杜 陳子昂、杜甫。並に盛唐の大詩人。(七)此詩 唐喬の作つた詩。(八)蠹魚 蠹はしみ。紙を食ふ蟲。(九)歎歎 すすり泣く。

【詩意】憶へば元和の初に余は諫官に任せられた。時恰も戰亂の後であつたので人民は皆疲弊してゐた。余は民の疲弊を悲むの餘り、時人の嫌疑を顧みず、秦中吟十首を作つて十弊を悲んだ。之を讀んで貴人は怪み怒り賤人も亦誹謗した。余が此詩を作つた本意は弊事を天聽に達するに在つたのだが、未だ天聽に達せぬうちに疲弊その極に達して到る處土地が荒廢してしまつた。余はつくづく天下に知己なきの感を深うした。ただ唐喬のみは吾が平生の志を理解し、一讀して歎嗟を發し、再吟して涕

を流し、因つて和詩三十韻を作り手書して之を郵寄し、余を陳杜の列に推稱し、一方ならず賞揚した。ああ吾が知己なる唐喬は復た見ることは出来ないが、其詩は尙ほ珍重することが出来る。今日日本箱を開いて見た所が、大分蠹魚に食はれてゐた。何處に葬つたかを問ふより前に先づ涙が出る。いつかは一度墳墓に哭し君に一掬の涙を手向けよう。

問友

友に問ふ

種蘭不種艾。蘭生艾亦生。蘭を種ゑて艾を種ゑず、蘭生じて艾も亦生ず。
 根菱相交長。莖葉相附榮。根菱相交つて長じ、莖葉相附いて榮ゆ。
 香莖與臭葉。日夜俱長大。香莖と臭葉と、日夜俱に長大。
 鋤艾恐傷蘭。漑蘭恐滋艾。艾を鋤けば蘭を傷んことを恐れ、蘭に漑げば艾を滋ら
 蘭亦未能漑。艾亦未能除。蘭も亦未だ漑ぐ能はず、艾も亦未だ除く能はず。
 沈吟意不決。問君合何如。沈吟意決せず、君に問ふ合に何如すべき。

【字解】(一)蘭 香草の名。艾は臭草の名。(二)根菱 菱は草の根。(三)沈吟 思索すること。

【題義】一利一害は數の免れざる所で、利を求めれば害之に伴ひ、害を除かんとすれば利をも失ふこととなる、困つたものだといふ意。

【詩意】蘭は植ゑたが艾は植ゑなかつた。然るに蘭が生えたと艾も俱に生える。蘭と艾と兩兩相竝んで生長する。さて艾を除き去らうとすると蘭を傷ける恐があり、蘭に水をかけようとするに艾をも養ふことになる。結局どちらも除くことも養ふことも出来ないことになる。一體どうしたらよいのぢや。君の智慧を借りたものだ。

悲哉行

悲哉行

悲哉爲儒者。力學不知疲。
讀書眼欲暗。秉筆手生胝。
十上方一第。成名常苦遲。
縱有宦達者。兩鬢已成絲。
可憐少壯日。適在窮賤時。
丈夫老且病。焉用富貴爲。

悲しいかな儒者と爲つて、力め學んで疲るるを知らず。
書を読み眼暗からんと欲し、筆を乗りて手に胝を生ず。
十たび上つりて方に一第、名を成すこと常に遲きに苦む。
縱ひ宦達の有りととも、兩鬢已に絲と成る。
憐む可し少壯の日は、適に窮賤の時に在り。
丈夫老いて且つ病む。焉んぞ富貴を用ふるを爲さん。

沈沈朱門宅。中有乳臭兒。
狀貌如婦人。光明膏粱肌。
手不把書卷。身不撰戎衣。
二十襲封爵。門承勳戚資。
春來日日出。服御何輕肥。
朝從博徒飲。暮有娼樓期。
平封還酒債。堆金選蛾眉。
聲色狗馬外。其餘一無知。
山苗與澗松。地勢隨高卑。
古來無奈何。非獨君傷悲。

沈沈たる朱門の宅、中に乳臭の兒有り。
狀貌婦人の如く、光明膏粱の肌あり。
手に書卷を把らず、身に戎衣を撰せず。
二十にして封爵を襲ぎ、門勳戚の資を承く。
春來つては日日出づ、服御何ぞ輕肥なる。
朝には博徒の飲に従ひ、暮には娼樓の期有り。
平封酒債を還し、堆金蛾眉を選ぶ。
聲色狗馬の外、其餘は一も知る無し。
山苗と澗松と、地勢高卑に隨ふ。
古來奈何ともする無し、獨り君の傷悲するのみに非ず。

【字解】【一】悲哉行 樂府題の名。【二】絲 白髮をいふ。【三】丈夫 男子をいふ。【四】沈沈 宮室深遠の貌。朱門は朱塗の門、豪家のこと。【五】乳臭兒 年少無知の人。【六】膏粱 美食なり。【七】戎衣 軍服、甲冑なり。【八】蛾眉 輕姿麗馬。【九】期 約束なり。【一〇】蛾眉 美人。

【題義】 儒生は苦學力行して常に貧窮を免れず。貴族の子弟は遊惰無知にして豪奢を極めてゐる。これが古來の沿襲で如何ともしかたがないことを述べた。

【詩意】 悲しいかな儒者となれば、書を讀んで眼は爲に暗くなり、筆を秉つて手には胝が出る。十たびも試験に應じてやつとこさで及第し、名を成すことは容易でない。幸に榮達する者があつても、其頃には兩鬢に白毛が生える。少壯の時には貧賤であつて、老病の年に及んで富貴になつた處が何の役にも立たぬではないか。此とちがつて貴族の子弟は奥深い邸宅の中に住み、華奢な風姿をして、膏ぎつた肌を持ち、書物も讀まず甲冑も纏はず、二十になれば父祖の爵位を襲ぎ、勳閥の資に由り、春が來れば肥馬に乗り輕裘を着て毎日のやうに遊びあるき、朝には博徒に伍して飲み、晩には娼婦の膝を枕に眠り、金を封じて酒債を償ひ、金を積んで美人を買ふなど聲色狗馬の樂に耽るより外には何の考もない。ああ山苗は短いけれども山に在るから高い、澗間の松は長いけれども澗底に在るから低い。高きも低きも其地位に由るので本來の資質に由るのではない。生れがわるければ賢きも浮ばれず、根が愚でも生れがよければ榮耀榮華が出来る。これが昔からの世の習ちや。人皆傷悲せざるはな

紫藤

紫藤

藤花紫蒙茸。藤葉青扶疎。

藤花は紫にして蒙茸、藤葉は青くして扶疎たり。

誰謂好顏色。而爲害有餘。

誰か謂ふ好顏色と、而も害を爲すこと餘有り。〔が如し。〕

下如蛇屈盤。上若繩縈紆。

下つては蛇の屈盤するが如く、上つては繩の縈紆する。〔

可憐中間樹。束縛成枯株。

可憐む可し中間の樹、束縛せられて枯株と成る。

柔蔓不自勝。嫋嫋挂空虛。

柔蔓自ら勝へず、嫋嫋として空虛に挂る。

豈知纏樹木。千夫力不如。

豈知らんや樹木を纏うて、千夫の力も如かざるを。

先柔後爲害。有似諛佞徒。

先には柔にして後には害を爲すこと、諛佞の徒に似た。〔

附著君權勢。君迷不肯誅。

君の權勢に附著するも、君迷うて肯て誅せず。〔る有り。〕

又如妖婦人。綢繆盡其夫。

又如妖婦人の如く、綢繆して其夫を盡し、

奇邪壞人室。夫惑不能除。

奇邪人の室を壞る、夫惑うて除く能はず。

寄言邦與家。所慎在其初。

言を寄す邦と家と、慎む所は其初に在り。

毫末不早辨。滋蔓信難圖。

毫末も早く辨せずんば、滋蔓信に圖り難し。

願以藤爲戒。銘之於座隅。

願はくは藤を以て戒と爲し、之を座隅に銘せんことを。

【字解】(一) 蒙茸 亂れ茂る貌。(二) 扶疎 枝葉の盛なる貌。(三) 風盤 わだかまる。(四) 縹緲 柔弱の貌。(五) 縹緲 縹緲なり。縹は惑はすこと。(六) 滋蔓 はびこること。左傳隱公元年に「滋蔓すれば國り難し」とあり。

【題義】 藤を借りて佞臣妖婦の害を述べたのである。

【詩意】 藤の花が紫の房を垂れ緑の葉が茂つてゐる。人はよい色香だと謂ふが、その餘毒は實に恐るべきものがある。蔓の這ひまはること蛇の盤るが如く繩の纏ふが如く、中間の樹は蔓にからみつかれて皆枯れてしまふ。蔓は柔かたで獨立が出来ないので、他物にたよつて高く掛つてゐる。然も樹木にからみついたが最後、千人力でも離すことは出来ない。其初めは柔かたで後には害をなすことは、彼の佞臣が君の權勢に阿附し、君も迷つて誅戮を加へず、又妖婦が纏綿して其夫を惑はし、夫も惑つて斥けることが出来ないのに似てゐる。國家に取つては佞臣、一家に取つては妖婦。これほど大害をなすものはない。宜しく其初を慎んで微細な時に交除するがよい。はびこつて來てはもう手がつけれない。因つて藤を借りて戒となし、座右の銘とすることを願ふ。

放鷹

鷹を放つ

十月鷹出籠。草枯雉兔肥。

十月に鷹籠を出づ。草枯れて雉兔肥えたり。

下鞬隨指顧。百擲無一遺。

鞬を下りて指顧に隨ひ、百たび擲ちて一も遺す無し。

鷹翅疾如風。鷹爪利如錐。

鷹翅疾きこと風の如く、鷹爪利きこと錐の如し。

本爲鳥所設。今爲人所資。

本鳥の爲に設けられ、今人の爲に資らる。

孰能使之然。有術甚易知。

孰か能く之をして然らしむる。術有り甚だ知り易し。

取其向背性。制在飢飽時。

其の向背の性を取り、制すること飢飽の時に在り。

不可使長飽。不可使長飢。

長く飽かしむ可からず、長く飢えしむ可からず。

飢則力不足。飽則背人飛。

飢うれば則ち力足らず、飽けば則ち人に背いて飛ぶ。

乘飢縱搏擊。未飽須繫維。

飢に乗じて縱搏擊するも、未だ飽かざるに須く繫維すべし。

所以爪翅功。而人坐收之。

所以に爪翅の功、而も人坐ながら之を收む。

聖明馭英雄。其術亦如斯。

聖明英雄を馭するも、其術亦斯の如し。

鄙語不可棄。吾聞諸獵師。

鄙語も棄つ可からず。吾諸を獵師に聞けり。

【字解】(一) 鞬 革で作り腕を巻くもの。鞬で巻いた腕の上に鷹を置く。指顧は指圖すること。(二) 繫維 縛つておくこと。(三) 聖明 明君なり。

【題義】明君の英雄を使ふのは鷹を使つて鳥を捕へるのと同じだといふことを述べた。

【詩意】十月になると狩の氣節で鷹は籠から出され、野邊の草も枯れて雉や兔が肥える。鷹匠が指圖をすれば鷹は韜を下つて獲物を目がけて飛び、百に一つも失敗はない。其翅は疾きこと風の如く、其爪は錐のやうに鋭い。抑、翅と爪とはもと鷹自身のために設けられたものであるが、今は人間に利用されて人間の爲に鳥を捕へることになつたのである。一體鷹を使ふ術は其の向背の性を審にし飢餓の間を制するに在るのだ。故に十分食に飽かせてもいけず、又極端に飢ゑさせてもいけない。飢ゑてゐては獲物を撃つだけの力が出ず、食に飽いてゐては鳥を捕らうといふ慾がないから、飼主に背いて飛去つてしまふ。故に飢に乗じて獲物に撃ちかかるとも、あまり飽かしめないうちに縛つてしまふがよい。かうすれば鷹の翅爪の功をば坐ながらにして手に收めることが出来る。明君が英雄を驅使するものも此と同じだ。この語は鄙近な語であるが棄て難い値がある。余は之を鷹匠から聞いた。

慈鳥夜啼

慈鳥夜啼く

慈鳥失其母。啞啞吐哀音。

慈鳥其母を失ひ、啞啞として哀音を吐き、

晝夜不飛去。經年守故林。

晝夜飛び去らず、年を経て故林を守り、

夜夜夜半啼。聞者爲沾襟。

夜夜夜半に啼き、聞く者爲に襟を沾す。

聲中如告訴。未盡反哺心。

聲中告げ訴ふるが如し、未だ反哺の心を盡さざるを。

百鳥豈無母。爾獨哀怨深。

百鳥豈に母無からんや、爾獨哀怨深し。『るなるべし。』

應是母慈重。使爾悲不任。

應に是れ母慈重うして、爾をして悲んで任へざらしむ。

昔有吳起者。母歿喪不臨。

昔吳起といふ者有り、母歿して喪に臨まず。

嗟哉斯徒輩。其心不如禽。

嗟哉斯徒輩、其心禽に如かず。

慈鳥復慈鳥。鳥中之曾參。

慈鳥復慈鳥。鳥中の曾參。

【字解】【一】慈鳥 鳥の反哺するもの。禽經に「慈鳥曰孝鳥。長則反哺其母。大野鳥否」とあり。【二】啞啞 鳥の聲。淮南子に「鳥之啞啞、鵲之啞啞」とあり。【三】反哺 哺は口中に含む食。恩に報いて親に食はしめることを反哺といふ。【四】曾參 孔子の弟子、孝を以て名高し。

【題義】慈鳥の母を失つて哀み啼くのを聞いて、鳥すらかく孝心の深いものがあるのに、人として鳥に劣るやうではならないといふことを述べたので、汪立名は元和六年辛卯、樂天が母の喪に居た時の作であらうと言つてゐる。

【詩意】慈鳥が其母の死に遇ひ思慕して哀鳴し、年を経て棲みなれた林を去るに忍びず、毎夜夜半

になると哀み啼くので、聞く者皆涙を流した。その聲は未だ反哺の孝を盡さぬに、早くも母を失つたことを告げ訴へるものの如くである。如何なる鳥でも母のない鳥はないが、なせお前はそんなに哀慕の情が深いのか。察する所お前の母は特別に慈愛の深い母であつたからでもあらう。昔吳起といふ人は母を棄てて他國に往きて仕へ、母が死んでも其喪に臨まなかつたといふが、かかる徒輩は鳥にも劣る者である。それに比すればお前は鳥ではあるが、鳥の中での曾參である。

燕詩示劉叟 叟有愛子。背叟逃去。叟甚悲念之。叟

少年時亦嘗如是。故作燕詩以諭之。叟に愛子あり。叟に背いて逃れ去る。叟甚だ悲んで之を念ふ。少年の時亦嘗て是の如し。故に燕の詩を作りて以て之を諭す。

梁上有雙燕。翩翩雄與雌。梁上に雙燕有り、翩翩たり雄と雌と。
唧泥兩椽間。一巢生四兒。泥を兩椽の間に唧み、一巢に四兒を生む。
四兒日夜長。索食聲孜孜。四兒日夜に長じ、食を索めて聲孜孜たり。
青蟲不易捕。黃口無飽期。青蟲捕へ易からず、黃口飽期無し。
觜爪雖欲弊。心力不知疲。觜爪弊れんと欲すと雖も、心力疲るるを知らず。

須臾千來往。猶恐巢中飢。須臾に千たび來往し、猶巢中の飢を恐る。

辛勤三十日。母瘦雛漸肥。辛勤三十日、母瘦せて雛漸く肥えたり。

喃喃教言語。一一刷毛衣。喃喃として言語を教へ、一一毛衣を刷ふ。

一旦羽翼成。引上庭樹枝。一旦羽翼成り、引ひて庭樹の枝に上る。

舉翅不回顧。隨風四散飛。翅を舉げて回顧せず、風に隨つて四に散飛す。

雌雄空中鳴。聲盡呼不歸。雌雄空中に鳴き、聲盡くるまで呼べども歸らず。

却入空巢裏。啾啾終夜悲。却つて空巢の裏に入りて、啾啾として終夜悲む。

燕燕爾勿悲。爾當返自思。燕燕爾悲むこと勿れ、爾當に返つて自ら思ふべし。

思爾爲雛日。高飛背母時。思ふ爾雛たりし日、高く飛んで母に背きし時、

當時父母念。今日爾應知。當時父母の念、今日爾應に知るべし。

【字解】【一】翩翩 翔り飛ぶ貌。【二】孜孜 雌の鳴く聲。【三】黃口 雛の黄色な吻。【四】喃喃 燕の鳴く聲。昵喃に同じ。【五】啾啾 燕の悲み鳴く聲。【六】燕燕 ただ重ねて言ふのみ。猩猩、鶉鴒など皆然り。

【題義】一老翁あり、其子翁を棄てて去る。翁甚だ之を悲む。昔此翁少年の時、亦親を棄てて去れり。

故に其子之に倣へるのみ。宜しく自ら反省して己の非を悟るべきなりとの意を燕を借りて諭したのである。

【詩意】梁上に雌雄の燕が棲んでゐた。時時飛び去つては泥を啣んで来て兩椽の間に巢を作り、中に四羽の雛を生んだ。雛は段段生長して食物を求めて鳴くので、親燕は血眼になつて青蟲を捜しまはるが仲伸捕れない。従つて雛の腹は満されなかつた。併し子の爲には疲れるのも忘れて餌を漁り、幾度となく往來して子の飢を氣遣つた。かくの如く苦辛すること三十日に及び、親は瘦せたが子は漸く肥えて來た。親燕は更に喃喃と言葉を教へ、羽や毛を整へてやつた。その中に羽翼も自由にきくうになつたので、引き連れて庭の樹の枝に上つた。所が雛は翼を擧げて顧みもせず四方に飛び去つてしまつた。親燕は之を悲んで聲の嘎れるほど呼んだが雛は終に歸つて來ない。因つて空巢の中に終夜悲み鳴いた。されど親燕よ、さう鳴くには及ぶまい。お前は昔の事を考へて見るがよい。お前が雛の頃親を棄てて飛び去つた時の親の悲は、今日始めて思ひ當るであらう。

采地黄者

地黄を采る者

麥死春不雨、禾損秋早霜。

麥死れて春雨らず、禾損じて秋早く霜る。

歲晏無口食、田中采地黄。

歲晏れて口の食無く、田中地黄を采る。

「に易ふ。」

采之將何用、持以易餼糧。

之を采つて將に何にか用ひんとする、持して以て餼糧

凌晨荷鋤去、薄暮不盈筐。

晨を凌ぎて鋤を荷ひて去れども、薄暮まで筐に盈たず。

攜來朱門家、賣與白面郎。

朱門の家に攜へ來つて、白面郎に賣り與ふ。

與君啖肥馬、可使照地光。

君に與へて肥馬に啖はしめ、地光を照さしむ可きよりは、

願易馬殘粟、救此苦飢腸。

願はくは馬の殘粟に易へて、此苦飢の腸を救はん。

【字解】【一】地黄 藥草の名。【二】餼糧 糧食なり。【三】朱門 朱塗の門、富豪の家。【四】白面郎 少年をいふ。

【題義】年飢ゑて食足らず、地黄を採り之を賣つて食に代ふる者のことを敘したのである。

【詩意】今年春雨が降らなかつたので麥が枯れてしまひ、秋には霜が早く降つたので稻が痛められ、今年年の暮に迫つて食ふ物もない始末である。己むを得ず田に生えてゐる地黄を採り、之を賣つて糧とする。朝早くから鋤を荷つて行き、日の暮れるまで採つても仲伸筐に満たない。それを金持の家に持つて行つて若様に賣るのだ。若様の馬に食べさせ光澤を増して地面をも照すほどにならせることはどうでもよいが、責めて馬の食ひ残りでも戴いて我がすき腹を満たしたいのが何よりの願ぢや。

初入太行路

初めて太行の路に入る

天冷日不光。太行峯蒼莽。
嘗聞此中險。今我方獨往。
馬蹄凍且滑。羊腸不可上。
若比世路難。猶自平於掌。

天冷くして日光らず、太行峯蒼莽たり。
嘗て此中の險を聞き、今我方に獨り往く。
馬蹄凍りて且つ滑なり。羊腸として上る可からず。
若し世路の難きに比せば、猶ほ自ら掌よりも平なり。

【字解】「太行」山の名。大明一統志に「懷慶府太行山、在府城北二十里、山勢綿亘數千里」とあり。蒼莽はあをあなとして遠き貌。

【題義】太行の險路を経て、人世行路の難きは、更に此にまさること一層なる由を述べた。

【詩意】天日光なく寒氣身に沁む時、蒼莽たる太行の峯を登り行けば、聞きしにまさる險路である。路が凍つて馬の蹄がすべり、つづらをりになつて上りにくい。併し人世の行路の險に比べると、掌よりも平だと謂つてもよい位だ。

鄧魴張徹落第

鄧魴・張徹が落第

古琴無俗韻。奏罷無人聽。

古琴俗韻無く、奏し罷んで人の聽く無し。

寒松無妖花。枝下無人行。

寒松妖花無く、枝下りて人の行く無し。

春風十二街。軒騎不暫停。

春風十二街、軒騎暫くも停らず。

奔車看牡丹。走馬聽秦箏。

車を奔らして牡丹を看、馬を走らして秦箏を聽く。

衆目悅芳艷。松獨守其貞。

衆目芳艷を悦び、松獨り其貞を守る。

衆耳喜鄭衛。琴亦不改聲。

衆耳鄭衛を喜び、琴亦聲を改めず。

懷哉二夫子。念此無自輕。

懷ふ哉二夫子、此を念うて自ら輕んずる無かれ。

【字解】「十二街」前の登樂遊園一帯に出づ。「軒騎」軒は車なり。「秦箏」風俗通に「箏、秦聲也、或言蒙恬所造」とあり。「鄭衛」淫靡な俗樂をいふ。

【題義】鄧魴・張徹の二子が落第したのを古琴と貞松とに喩へて慰めた詩である。

【詩意】古琴は俗な音がしないので奏しても聴き手がなく、松はあでやかな花がないので枝振おもしろく垂れてゐても觀に行く人もない。長安の市街を車や馬が織るが如く馳せちがつてゐる。何の爲かといへば牡丹を看るとか秦箏を聴くとかいふ爲である。かくの如く世人は芳艷を好むが、松は獨り貞節を守つて操をかへない。俗人は俗惡な音樂を好むが、古琴は決して己の本音を改めない。君等も此を念うて自ら輕んじ世俗に媚びるやうなことをなさるな。

送王處士

王處士を送る

王門豈無酒。侯門豈無肉。
主人貴且驕。待客禮不足。
望塵而拜者。朝夕走碌碌。
王生獨拂衣。遐舉如雲鶴。
寧歸白雲外。飲水臥空谷。
不能隨衆人。斂手低眉目。
扣門與我別。沽酒留君宿。
好去采薇人。終南山正綠。

王門豈に酒無からんや、侯門豈に肉無からんや。
主人貴うして且つ驕れり、客を待するに禮足らず。
塵を望んで拜する者、朝夕走りて碌碌たり。
王生獨衣を拂ひ、遐に舉つて雲鶴の如し。
寧ろ白雲の外に歸り、水を飲んで空谷に臥せん。
衆人に隨ふ能はず、手を斂めて眉目を低る。
門を扣いて我と別る、酒を沽つて君を留めて宿せしむ。
好し去れ薇を采るの人、終南山正に綠なり。

【字解】 一 碌碌 隨從の貌。二 王生 即ち王處士。三 采薇人 伯夷叔齊首陽山に隠れ薇を採つて之を食ふ。ここは王處士を伯夷叔齊に比して言ふ。四 終南 長安の南に在る山の名。

【題義】 王處士が王侯に媚びて榮利を貪るを屑しとせず、去つて山に隠れんとするを送つた詩である。

【詩意】 王侯の家には酒も肉も豊富にあるが、ただ主人が威張つてゐて客を待遇することが無禮だ。

それ故其後塵を拜して恥ぢない者は日夜つきまといつて御機嫌をとめてゐるが、王處士は之を屑しとせず、衣を拂つて去ること雲中の鶴の如く、寧ろ白雲の外に歸り水を飲んで空谷に臥せん。俗人と伍して俯仰する能はずとの意氣ごみで、暇乞の爲に我を訪ねて來た。因つて我は酒を沽つて君に飲ませて一泊させた。まア去つて山に隠れるがよい。終南山は正に綠滴るばかりの好景だから。

村居苦寒

村居寒に苦む

八年十二月五日雪紛紛。
竹柏皆凍死。況彼無衣民。
廻觀村閭間。十室八九貧。
北風利如劍。布絮不蔽身。
唯燒蒿棘火。愁坐夜待晨。
乃知大寒歲。農者猶苦辛。
願我當此日。草堂深掩門。
褐裘覆絀被。坐臥有餘溫。

八年十二月五日雪紛紛。
竹柏皆凍死す。況んや彼の無衣の民をや。
村閭の間を廻觀すれば、十室八九は貧し。
北風利きこと劍の如く、布絮身を蔽はず。
唯蒿棘の火を燒き、愁坐して夜晨を待つ。
乃ち知る大寒の歲、農者猶苦辛するを。
願ふ我此日に當り、草堂深く門を掩ひ、
褐裘絀被を覆ひ、坐臥餘溫有り。

幸免飢凍苦。又無傭畝勤。
幸に飢凍の苦を免れ、又傭畝の勤無し。
念彼深可愧。自問是何人。
彼を念ひて深く愧づ可し、自ら問ふ是れ何人ぞ。

【字解】 〔一〕 八年 元和八年であらう。時に樂天は涇村に居た。〔二〕 高轉 よもぎやいばら。〔三〕 傭被 つむぎの夜具。
〔四〕 傭畝 田圃。

【題義】 農民の寒に苦しむを憐み、己の飽暖自ら安んずるを恥づることを述べた。

【詩意】 元和八年十二月五日、雪が紛紛と降り、竹も柏も皆凍死する程の寒さであった。貧窮無衣の民の苦境が思ひやられる。此村を見渡して見るに十戸のうちで八九戸は貧家だ。身を切るやうな寒さに身に纏ふつづれもなく、蓬や荊を焚いて暖を取り、坐して夜の明けるのを待つてゐる。農民は單に飢に苦むばかりではなく寒にも苦んでゐるのだ。翻つて吾が身を見れば草堂の奥深く安居して、起臥ともに餘温がある。幸に飢凍の苦を免れ、然も稼穡の艱難をも免れてゐる。一體我は何物であるか。彼等農民に對して自ら恥づべきである。

納粟

粟を納る

有吏夜叩門。高聲催納粟。

吏有り夜門を叩き、高聲に粟を納れんことを催す。

家人不待曉。場上張燈燭。
揚簸淨如珠。一車三十斛。
猶憂納不中。鞭責及僮僕。
昔余謬從事。内媿才不足。
連授四命官。坐尸十年祿。
常聞古人語。損益周必復。
今日諒甘心。還他太倉穀。

家人曉を待たず、場上に燈燭を張り。
簸を揚ぐれば淨きこと珠の如し。一車三十斛。
猶ほ納れて中らざるを憂ふ。鞭責僮僕に及ぶ。
昔余謬つて事に従ひ、内才の足らざるを媿づ。
連に四命の官を授けられ、坐して十年の祿を尸す。
常に古人の語を聞く、損益周りて必ず復ると。
今日諒に甘心し、太倉の穀を還他す。

【字解】 〔一〕 四命官 命は官等なり。周の制では、官吏は一命から九命まであった。〔二〕 尸 尸位素餐すること。〔三〕 甘心 甘んじて。納得すること。〔四〕 還他 他は助辭。看他などの他と同じ。太倉は天子の米倉。

【題義】 租税を納めることを述べたのである。

【詩意】 夜役人が来て聲高くとなりちらして納税を催促する。家人は夜の明くるを待たず、庭にかりをつけて初を摺り箕で糠や税を去れば珠のやうな米になった。車につけて三十斛積み出したが、それでもまだ納税額に満たないので、役人は厳しく責め立てて召使にまであたりちらしてゐる。昔余は無能の身を以て謬つて官職に就き、四命の官に敍せられて十年間無駄扶持を戴いてゐた。古人の言

葉に損益は必ず周りに還るものだとあるが、自分は十年間不當利得を得てゐたので、今日は所謂年貢の納め時が来たのだから、甘んじて太倉の米をお返し申さう。

薛中丞

薛中丞

百人無一直。百直無一遇。
借問遇者誰。正人行得路。
中丞薛存誠。守直心甚固。
皇明燭如日。再使秉王度。
奸豪與佞巧。非不憎且懼。
直道漸光明。邪謀難蓋覆。
每因匪躬節。知有匡時具。
張爲墜網綱。倚作頽簷柱。
悠哉上天意。報施紛廻互。

百人一直無く、百直一遇無し。
借問す遇ふ者は誰ぞ。正人行路を得。
中丞薛存誠。直を守りて心甚だ固し。
皇明燭すこと日の如く、再び王度を秉らしむ。
奸豪と佞巧と、憎み且つ懼れざるに非ず。
直道漸く光明あり。邪謀蓋覆し難し。
匪躬の節に因る毎に、匡時の具有るを知る。
張つて墜網の綱と爲り、倚つて頽簷の柱と作る。
悠なるかな上天の意、報施紛として廻互す。

自古已冥茫。從今猶不諭。
豈與小人意。昏然同好惡。
不然君子人。何反如朝露。
裴相昨已天。薛君今又去。
以我惜賢心。五年如旦暮。
況聞善人命。長短繫運數。
今我一涕零。豈爲中丞故。

古より已に冥茫たり、今より猶論られず。
豈小人の意と、昏然として好惡を同じうせんや。
然らずして君子の人、何ぞ反つて朝露の如くなる。
裴相昨已に天し、薛君今又去る。
我が賢を惜む心を以てすれば、五年も旦暮の如し。
況んや善人の命、長短運數に繫ると聞くをや。
今我一たび涕零つるは、豈に中丞の爲の故のみならんや。

【字解】(一) 一直 一人の正直な人。(二) 一遇 一人の幸運に遇つた人。(三) 薛存誠 字は宣明、進士の第に中り給事中に累官し、事の不可なるに遇へば輒ち執つて下らず。憲宗悦んで御史中丞に拜す。(四) 蓋覆 掩ひかくすこと。(五) 匪躬節 己の身を忘れて君に忠を盡すこと。(六) 匡時 時弊を匡救すること。(七) 悠哉 遙なる貌。(八) 冥茫 真意の知り難き貌。(九) 裴相 裴瑒なり。字は弘中、翰林學士、中書舍人に累遷し、李吉甫の相を罷むるや、中書侍郎、同中書門下平章事に拜せらる。(一〇) 運數 運命。

【題義】 御史中丞薛存誠の死を悼んだ作である。

【詩意】 百人の中にも正直な人は一人もなく、正直な人百人の中にも時に遇うて榮達する人は一人も

ない。さて如何なる人が時に遇うて榮達するかといふに、それは正しい人が正しい道を行ふに因るのだ。かの御史中丞薛存誠は直を守つて其心が甚だ固かつた。時の天子が鑒識の高い君であつたので、擧げて政局に當らしめた。奸豪や巧佞は憎み且つ懼れたけれども、彼の直道は益々光輝を放ち、流石の奸佞の徒も己の不正を掩ひ得なかつた。我も彼の忠節を見て時弊の匡救されることを悦んだ。彼は實に堅網を引き緊める綱であり、頽簷を支へる柱であつた。抑、天意は悠遠で、人に對する報施が、ともすれば意量の外に出で、冥茫として測り知られぬ所がある。併し世の小人と好惡を同する筈はない。果して然らば性行の正しい君子が何故に朝露の如く果敢なき最後を遂げるのであらう。裴相は去年天死し、薛君も今又歿した。我が賢者を愛惜する心を以てすれば、君が五年の間要路にゐたのも僅か一朝夕のやうにしか思はれないのに、況んや善人の壽命が運命に左右されるものだと聞いては、益々あぢきなさを感ずる。今涙を落して歎息するのは、唯薛君の爲ばかりではない。

秋池二首

秋池二首

前池秋始半、卉物多摧壞。
欲暮權先萎、未霜荷已敗。

前池秋始めて半、卉物多くは摧壞す。
暮れんと欲して權先づ萎み、未だ霜ふらずして荷已に敗る。

默然有所感、可以從茲誠。
本不種松筠、早凋何足怪。

默然として感ずる所有り、以て茲誠に從ふ可し。
本松筠を種えざれば、早く凋むも何ぞ怪むに足らん。

【字解】【一】卉物、花の咲く草。【二】摧、むくげ。其花朝に開き夕に凋む。【三】荷、蓮の葉。【四】松筠、松と竹。
【題義】秋日池邊の景を見て所感を述べたのである。
【詩意】庭前の池は今や秋の半で、草花は多くは枯れ、木樅も夕に先だつて萎み、荷葉も霜を待たず
に敗れてゐる。此景を見て深く感ずる所があつて之を戒としようと思つた。人でも草木でも節操が大
切だ。松や竹のやうな常に緑の色をかへないものを植ゑておかなければ、忽ち凋落しても敢て怪むに
は足らない。

〔一〕

〔二〕

鑿池貯秋水、中有蘋與芰。
天旱水暗消、塌然委空地。
有似汎汎者、附離權與貴。
一旦恩勢移、相隨共憔悴。

池を鑿ちて秋水を貯ふ、中に蘋と芰と有り。
天旱して水暗に消え、塌然として空地に委す。
汎汎たる者の、權と貴とに附離し、
一旦恩勢移り、相隨つて共に憔悴するに似たる有り。

【字解】「一」頤、うきくさ。夏は葉。「二」堪然、くほむ貌。「三」汎汎、深ひ流るる貌。「四」附離、附著すること。「五」憔悴、やせ衰へること。

【詩意】池を鑿ち秋水を貯へ、池中に蘋と菱とがあつたが、早が續いて水がひあがり、忽ち凹地になつて蘋も菱も枯れてしまつた。丁度世の輕薄者流が權貴に阿り一時は榮華の夢を見るときも、一旦君寵が衰へると相俱に失脚してしまふのに似てゐる。

夏旱

夏旱

太陰不離畢。太歲仍在午。

太陰畢に離らず、太歲仍ほ午に在り。

早日與炎風。枯樵我田畝。

早日と炎風と、我が田畝を枯樵す。

金石欲銷鑠。況茲禾與黍。

金石すら銷鑠せんと欲す、況んや茲の禾と黍とをや。

嗷嗷萬族中。唯農最辛苦。

嗷嗷たる萬族の中、唯農のみ最も辛苦す。

憫然望歲者。出門何所覩。

憫然たり歳を望む者、門を出でて何の觀る所ぞ。

但見棘與茨。蘿生徧場圃。

但棘と茨とを見るのみ、蘿生じて場圃に徧く、

惡苗承沴氣。欣然得其所。

惡苗沴氣を承け、欣然として其所を得。

「やと。」

感此因問天。可能長不雨。

此に感じて因つて天に問ふ、能く長く雨ふらざる可き。

【字解】「一」太陰、月をいふ。畢は星の名。書經洪範の傳に「月經三於箕則多風、離三於畢則多雨」とあり。「二」太歲、木星。十二年で天を一周する。故に年を紀するに用ひる。太歲在午とは午の年のことで、元和九年甲午であらう。「三」嗷嗷、多人數で愁へ訴ふる貌。「四」望歲、年穀の豐稔を望む者。左傳に「國人望君、如望歲焉」とあり。「五」沴氣、惡氣。

【題義】夏の旱魃の害を敘したのである。

【詩意】元和九年甲午の夏、旱天打續いて雨降らず、禾穀も枯れ金石も銷けんばかりだ。人皆嗷嗷として愁訴せぬはないが、特に農民は最も難儀である。あたりを見れば唯荆棘や蘿葛が生ひ茂り、惡苗が時を得顔にはびこつてゐるばかりだ。一體いつまで雨が降らないのかと天に向つて詰問したいくらいのだ。

論友

友に論す

昨夜霜一降。殺君庭中槐。

昨夜霜一たび降り、君が庭中の槐を殺す。

乾葉不待黃。索索飛下來。

乾葉黃ばむを待たず、索索として飛び下ち來る。

憐君感節物。晨起步前階。

憐む君が節物に感じ、晨に起きて前階に歩し、

臨風踢葉立。半日顔色哀。
 西望長安城。歌鐘十二街。
 何人不歡樂。君獨心悠哉。
 白日頭上走。朱顔鏡中頽。
 平生青雲心。銷化成死灰。
 我今贈一言。勝飲酒千杯。
 其言雖甚鄙。可破悒悒懷。
 朱門有勳貴。陋巷有顔回。
 窮通各有命。不繫才不才。
 推此自豁豁。不必待安排。

臨風に臨み葉を踏んで立ち、半日顔色哀むを。西のかた長安城を望めば、歌鐘十二街。何んか歡樂せざらん、君獨り心悠哉。白日頭上に走り、朱顔鏡中に頽る。平生青雲の心、銷化して死灰と成る。我今一言を贈る、酒千杯を飲むに勝る。其言甚だ鄙しと雖も、悒悒の懷を破る可し。朱門に勳貴あり、陋巷に顔回あり。窮通各命有り、才不才に繫らず。此を推せば自ら豁豁たらん、必ずしも安排を待たじ。

【字解】(一) 庭中槐 槐は木の名、和名まんじゆ。三公の位の者は庭に槐を植ふる習慣である。(二) 索索 落葉の聲。江流の賦に「樹索索而搖枝」とあり。(三) 節物 時節の風物。時節の景物。(四) 十二街 前の登樂遊園望の詩を見よ。(五) 悠哉 憂思の貌。詩經に「悠哉悠哉、輾轉反側」とあり。(六) 朱顔 紅顔に同じ、少年の人をいふ。(七) 青雲心 榮達を期する志。(八) 死灰 冷えきつた灰。(九) 朱門 朱塗の門。富豪の家。(一〇) 節節 氣のはれる貌。一に豁豁に作る。(一一) 安排 處置

すること。

【題義】官職を免せられた友人を慰めた詩である。
 【詩意】昨夜一たび霜が降つて君が庭の槐を枯らしてしまつた。(官職を免せられたこと)葉が乾枯らびて黄色になるまもなく忽ちチラ／＼と飛び落ちた。君は氣節の變化に驚き、朝起きて階前を歩み、秋風に臨み落葉を踏んで、覺えず顔色を愁へしめた。翻つて長安の都を望めば街中鐘歌の聲に満ちて人皆歡樂に酔うてゐるが、君のみ獨り尾羽打枯らして憔悴してゐる。歲月忽ち逝き紅顔空しく老い、宿昔青雲の志も忽ち消えて死灰となつてしまつた。余は今君に一言を呈しようと思ふ。此言は千杯の酒を飲むにもまして君を慰め得るであらう。そは他ではない、朱門に勳貴あり、陋巷に顔回あり。人の窮達は運命であつて、才不才には拘らないといふことだ。此理を推せば處置安排を要せずして自ら愁が霽れるであらう。

丘中有一士二一首 命三首句爲題 丘中有一士有 首句を命じて題となす
 丘中有一士。不知其姓名。
 面色不憂苦。血氣常和平。

丘中に一士有り、其姓名を知らず。面色憂へ苦まず、血氣常に和平なり。

每選隙地居。不踟要路行。
 舉動無尤悔。物莫與之爭。
 藜藿不充腸。布褐不蔽形。
 終歲守窮餓。而無嗟歎聲。
 豈是愛貧賤。深知時俗情。
 勿矜羅弋巧。鸞鶴在冥冥。

毎に隙地を選んで居り、要路を踟んで行かず。
 舉動尤悔無く、物之と争ふ莫し。
 藜藿に充たず、布褐形を蔽はず。
 終歲窮餓を守り、而も嗟歎の聲無し。
 豈是れ貧賤を愛せんや。深く時俗の情を知ればなり。
 羅弋の巧みに矜る勿れ。鸞鶴冥冥に在り。

【字解】【一】隙地。あき地。人の居ない場所。【二】尤悔。人のとがめ、自己の悔。【三】物。人なり。【四】藜藿。あかざと豆の葉。【五】羅弋。羅は網。弋はイダグミ。鳥を捕へること。【六】鸞鶴。高尙な鳥。冥冥は天の高い處。

【題義】鸞鶴に比して俗士と伍して利達を貪らない高士の風を敍した。

【詩意】山丘の中に一人の紳士がある。其名は何といふか知らない。少しも憂苦の色なく血氣常に和平で、人を避けて閑地に居り、要路には立寄らない。後暗い行がないから人の非難も蒙らず自ら後悔することもなく、誰あつて之と争ふ者もない。貧窮を守つて嗟歎もしない。貧賤を好むわけではないが、深く世情の頼み難きを悟つてゐるからだ。名利を以て此士を釣らうとしても、鸞鶴と同じく高尙に構へて空高く飛んでゐるから、網でも矢でも捕へることは出来ない。

【一】

【二】

丘中有一士。守道歲月深。
 行披帶索衣。坐拍無絃琴。
 不飲濁泉水。不息曲木陰。
 所逢苟非義。糞土千黃金。
 鄉人化其風。薰如蘭在林。
 智愚與強弱。不忍相欺侵。
 我欲訪其人。將行復沈吟。
 何必見其面。但在學其心。

丘中に一士有り、道を守つて歲月深し。
 行くに帶索の衣を披、坐して無絃の琴を拍つ。
 濁泉の水を飲まず、曲木の陰に息はず。
 逢ふ所苟も義に非ざれば、千の黄金をも糞土にす。
 郷人其風に化し、薰すること蘭の林に在るが如し。
 智愚と強弱と、相欺き侵すに忍びず。
 我其人を訪はんと欲し、將に行かんとして復沈吟す。
 何ぞ必ずしも其面を見ん。但其心を學ぶに在り。

【字解】【一】帶索。繩を帶にすること。愚子に「鹿裘帶索」とあり。【二】無絃琴。絃のない琴。陶淵明は無絃琴一張を蓄へ、醉へば撫弄して自ら樂んだといふ。【三】沈吟。思索すること。

【詩意】丘中に一士あり、常に正道を守る。行くには索の帶をまとひ、坐しては無絃の琴を撫す。濁泉の水を飲まず、曲木の蔭に息はず。事の不義なるに逢へば千金を視て糞土となす。郷人其風に感化

して善良になり、智者強者と雖も敢て欺侮せず。我行いて其人を訪はんと欲せしも躊躇してやみぬ。必ずしも面會するを要せず、其心を學べば足ると思へばなり。

新製布裘

新に布裘を製す

桂布白似雪。吳綿軟於雲。

桂布雪よりも白く、吳綿雲よりも軟なり。

布重綿且厚。爲裘有餘溫。

布は重く綿は且つ厚く、裘を爲りて餘温有り。

朝擁坐至暮。夜覆眠達晨。

朝に擁し坐して暮に至り、夜覆ひ眠りて晨に達す。

誰知嚴冬月。支體暖如春。

誰か知らん嚴冬の月、支體暖なること春の如きを。

中夕忽有念。撫裘起逡巡。

中夕忽ち念ふ有り。裘を撫して起つて逡巡す。

丈夫貴兼濟。豈獨善一身。

丈夫は兼濟を貴ぶ。豈に獨り一身を善くするのみならんや。

安得萬里裘。蓋裏周四垠。

安んぞ萬里の裘を得、蓋裏して四垠に周く、

穩暖皆如我。天下無寒人。

穩暖皆我の如くにし、天下に寒人無からしめん。

【字解】(一) 桂布 次句の吳綿に對してゐるのだから、桂は地名であらう。(二) 支體 四肢五體。(三) 兼濟 天下の人を救れすくふ。(四) 蓋裏 掩ひ包む。四垠は四方のはて。

【題義】 新に布裘を作り身の暖さを覺ゆるにつけて、更に大裘を作つて天下の民をして悉く暖ならしめたいものだといふ意を述べた。

【詩意】 雪よりも白く雲よりも軟かな布と綿とで温な裘を作つたので、夜も晝も御蔭で寒さ知らずに春のやうな氣持であられる。夜半に突然感ずる所があつて起きて裘を撫でて見た。一體男子たる者は天下を兼濟する志がなければならぬ。自分ひとり善ければ人はどうでもよいといふものではない。何とかして萬里を掩ふに足るやうな大きな裘を作つて四方を掩ひ、天下の人をして皆我と同じく暖さを感せしめる方法はないであらうか。

杏園中棗樹

杏園中の棗樹

人言百果中。唯棗凡且鄙。

人は言ふ百果の中、唯棗凡にして且つ鄙しと。

皮皴似龜手。葉小如鼠耳。

皮皴んで龜の手に似たり、葉小にして鼠の耳の如し。

胡爲不自知。生花此園裏。

胡爲ぞ自ら知らず、花を生ずる此園の裏。

豈宜遇攀翫。幸免遭傷毀。

豈宜しく攀翫に遇ふべけんや。幸に傷毀に遭ふを免る。

二月曲江頭。雜英紅旖旎。

二月曲江の頭、雜英紅旖旎たり。

棗亦在其間。如嫫對西子。
東風不擇木。吹煦長未已。
眼看欲合抱。得盡生生理。
寄言遊春客。乞君一廻視。
君愛繞指柔。從君憐柳杞。
君求悅目艷。不敢爭桃李。
君若作大車。輪軸材須此。

棗も亦其間に在り、嫫の西子に對するが如し。
東風木を擇ばず、吹煦して長く未だ已まず。
眼に合抱せんと欲するを看、生身の理を盡すことを得
言を寄す春に遊ぶ客、乞ふ君一たび廻視せよ。たり。
君指を繞らすの柔を愛せば、君が柳杞を憐むに従せん。
君目を悦ばすの艶なるを求めば、敢て桃李と争はず。
君若し大車を作らば、輪軸の材は此を須ひん。

【字解】(一)杏園 長安の西に在る園の名。芙蓉園と相並んで秦の宜春苑の地で、唐の遊宴の地である。(二)曲江 前の春雪の詩に見ゆ。(三)雜英 種種の花。旖旎は連り靡く貌。(四)嫫 嫫母、古の醜婦、黃帝の第四妃。西子は西施なり、古の美女。(五)東風 春風。(六)柳杞 柳の一種、柔つて柔なる木なり。

【題義】棗の樹は至つて武骨で見映がないが堅固であるから車の輪軸とするに適する。人も此と同じで柔媚便佞の徒や才華英發の士よりも剛毅木訥の士が却つて國用をなすものだといふ意を述べた。
【詩意】すべての果樹の中で棗ほど凡且つ鄙なものはない。皮は皴がよつてゐて龜の手のやうで、葉は小さくて鼠の耳のやうだ。然るに柄にもなく杏園の中に花を開いてゐるのは己を知らぬといふもの

だ。誰あつて攀ち翫ぶ者などはない。傷毀されないのが責めてもの幸といふものだ。世間の人は棗を罵倒する。春二月曲江の頭には色様様の粧を凝らして各種の花が咲いてゐる。その中に棗が立ちまじつてゐるのは、なるほど醜婦が美人と肩を並べてゐるやうだ。併し春風は一視同仁だから吹き煦めることに偏頗がない。されば此棗も合抱の大きになつて、持前の生理を盡してゐる。さて春遊の士に一言を呈する。君まづ一たび廻視せられよ。君は指を繞るやうな柔軟さを好むならば、勝手に柳杞を愛し給へ。又目を悦ばす艶麗さを求めるならば、桃や李を賞し給へ。併し車を作るには此棗の木を輪軸としなければなるまい。

蝦蟇 和張十六

蝦蟇 張十六に和す

嘉魚薦宗廟。靈龜貢邦家。
應龍能致雨。潤我百穀芽。
蠹蝨水族中。無用者蝦蟇。
形穢肌肉腥。出沒於泥沙。
六月七月交。時雨正霽霏。

嘉魚は宗廟に薦む、靈龜は邦家に貢す。
應龍は能く雨を致し、我が百穀の芽を潤す。
蠹蝨たる水族の中、用無き者は蝦蟇か。
形穢れて肌肉腥く、泥沙に出沒す。
六月七月の交、時雨正に霽霏たり。

蝦蟇得其志。快樂無以加。
 地既蕃其生。使之族類多。
 天又與其聲。得以相誼譁。
 豈惟玉池上。汚君清冷波。
 何獨瑤瑟前。亂君鹿鳴歌。
 常恐飛上天。跳躍隨姮娥。
 往往蝕明月。遣君無奈何。

蝦蟇其志を得て、快樂以て加ふる無し。
 地既に其生を蕃くし、之をして族類多からしむ。
 天又其聲を與へ、以て相誼譁するを得しむ。
 豈惟玉池の上、君が清冷の波を汚すのみならんや。
 何ぞ獨瑤瑟の前、君が鹿鳴の歌を亂すのみならんや。
 常に恐る飛んで天に上り、跳躍姮娥に隨ひ、
 往往に明月を蝕し、君をして奈何ともする無からしめし。

【字解】(一) 嘉魚。美魚なり。(二) 應龍。龍の異あるもの。(三) 霖。雨のふりそそぐ貌。(四) 誼譁。かまびすしく鳴く。(五) 瑤瑟。玉で飾つた瑟。(六) 鹿鳴。詩經小雅の篇名。羣臣嘉賓を宴する詩。(七) 姮娥。一に嫦娥に作る。古の仙人。淮南子に「羿請三不死之藥於西王母。姮娥竊之奔月宮」とあり。

【題義】蝦蟇を借りて邪臣の忌むべきことを述べた。

【詩意】魚は供物として宗廟に薦むべく、龜は卜筮の具として國家に貢すべく、龍は能く雨を降らし百穀を潤すべきも、水蟲の中で何の役にも立たぬものは蝦蟇であらう。穢らしい形をして泥の間に出没し、六七月頃雨が降ると、得たり賢しとして楽しんでゐる。地は既に惠を與へて其種族を繁殖させ、

天も亦恩を施して、其聲を誼からしめてゐる。されば雷に玉池の波を汚したり、瑤琴の歌を亂したりするのみでなく、更に姮娥に隨つて天上に上り明月を蝕するやうな大害をもする。憎みてもあまりあるやつである。

寄隱者

賣藥向都城。行憩青門樹。
 道逢馳驛者。色有非常懼。
 親族走相送。欲別不敢住。
 私怪問道傍。何人復何故。
 云是右丞相。當國握樞務。
 祿厚食萬錢。恩深日三顧。
 昨日延英對。今日崖州去。
 由來君臣間。寵辱在朝暮。

藥を賣りて都城に向ひ、行いて青門の樹に憩ふ。
 道に馳驛の者に逢ふ、色非常の懼有り。
 親族走つて相送る、別れんと欲して敢て住らず。
 私かに怪んで道の傍に問ふ、何人ぞ復何故ぞと。
 云ふ是れ右丞相、國に當つて樞務を握る。
 祿厚うして萬錢を食み、恩深うして日に三顧す。
 昨日は延英に對し、今日は崖州に去る。
 由來君臣の間、寵辱朝暮に在り。

隱者に寄す

青青東郊草。中有歸山路。青青たる東郊の草、中に歸山の路有り。
歸去臥雲人。謀身計非誤。歸り去れ雲に臥す人、身を謀る計誤るに非ず。

【字解】【一】青門 漢の長安城の東南の門で、秦の東陵侯召平が秦破れて布衣となり、瓜を種みて生活した處。【二】曉 曉
傳なり。【三】三顧 蜀の劉備三たび諸葛亮の廬を訪ひし故事。君の優遇を受くること。【四】延英 唐の宮殿の名。【五】崖州
廣東省崖州府。南方極遠の地。

【題義】 權勢の恃み難く、隱遁の嘉すべきことを述べた詩である。

【詩意】 隱者が藥草を賣りに都へ出かけて青門の樹蔭に休んでゐたが、早飛脚が顔色を變へて走り行くのに逢つた。すると間もなく親族の人が打連れ立つて旅立の人を見送りに來た。一體此人は何者で何事が起つたのか傍の人に聞いて見ると、この人は右丞相に任せられて國家の樞機に參し、萬錢の厚祿を食み君主の恩寵を蒙り、昨日までは延英殿に昇つて君の御下間に奉答する身であつたが、今日俄に崖州に貶せられることになつた。由來君臣の間柄といふものは永續きのせぬもので、朝に夕を慮らず寵辱忽ち地を易へるものであるとの事であつた。ああすまじきものは宮仕である。東郊には青々と春草が茂つて中に山路が通じてゐる。隱者よ早くあの山へ歸つて雲の奥に臥してゐるがよい。それが身の萬全を謀る最上策である。

放魚 自此後詩到江州作

魚を放つ 此より後の詩は江州に到りて作る

曉日提竹籃。家僮買春蔬。

曉日竹籃を提げ、家僮春蔬を買ふ。

青青芹蕨下。疊臥雙白魚。

青青たる芹蕨の下、疊臥す雙白魚。

無聲但呀呀。以氣相煦濡。

聲無くして但呀呀たり、氣を以て相煦濡す。

傾籃寫地上。撥刺長尺餘。

籃を傾けて地上に寫す、撥刺として長さ尺餘。

豈唯刀机憂。坐見螻蟻圖。

豈唯刀机の憂のみならんや、坐に螻蟻に圖らる。

脫泉雖已久。得水猶可蘇。

泉を脱して已に久しと雖も、水を得ば猶ほ蘇す可し。

放之小池中。且用救乾枯。

之を小池の中に放ち、且く用つて乾枯を救はん。

水小池窄狹。動尾觸四隅。

水小にして池窄狹、尾を動かせば四隅に觸る。

一時幸苟活。久遠將何如。

一時幸に苟も活くるも、久遠將に何如とかする。

憐其不得所。移放於南湖。

其の所を得ざるを憐み、移して南湖に放つ。

南湖連西江。好去勿踟躕。

南湖は西江に連る。好し去つて踟躕する勿れ。

施恩即望報。吾非斯人徒。

恩を施して即ち報を望む、吾斯人の徒に非ず。

不須泥沙底。辛苦覓明珠。須知泥沙底、辛苦して明珠を覓むるを。

【字解】【一】春。春の野菜。【二】呀。口を張る貌。【三】西。西。いきをきかけ、うるほす。【四】寫。藍から地面に移すこと。【五】報刺。殺刺に同じ。魚のびんびんはれる貌。【六】刀机。庖丁と机。【七】蟻。蟻。けら、あり。【八】南。南。湖の名。【九】圓。圓。ためらふこと。【一〇】明珠。夜光る珠。

【題義】魚を憐んで之を南湖に放つたことを敍したのである。

【詩意】曉に家僮が竹籃を携へて野菜を買ひに行き、芹や蕨の下に二匹の白魚を買つて入れて来た。見れば聲も立て得ずに口を開き互に氣を以て煦め濡してゐる。藍から地面に移して見ると、長さが一尺餘。あつてピンピンはねてゐる。かうして置けば庖丁や狙の憂目を見、蟻や蝶の侮をさへ受けねばならない。水を離れて既に久しくはあるが、今水の中へ入れてやれば蘇生しないものでもない。因つて之を池に放ち乾枯を救つてやらうと思つたが、まア待てよ池は狭いかう尾を動かせば四隅に衝突し、一時命は助かつても永く壽命を保つことは出来まいと考へて、之を南湖に放してやつた。南湖は西江に續いてゐるから、自由に活動ができるであらう。さあ躊躇せず去るがよい。俺は恩を施して其報を望むやうな男ではないから、骨折つて明珠を探して持つて来るには及ばない。

【餘論】南湖連西江。吾非斯人徒の二句は五字とも皆平聲である。古詩の平仄をやかましく論ずる人もあるが、かかる聲律に拘らぬのもあることを注意すべきである。

文柏牀

文柏牀

陵上有老柏。柯葉寒蒼蒼。

陵上に老柏有り、柯葉寒うして蒼蒼たり。

朝爲風煙樹。暮爲宴寢牀。

朝には風煙の樹と爲り、暮には宴寢の牀と爲る。

以其多奇文。宜升君子堂。

其の奇文多きを以て、宜しく君子の堂に升るべし。

刮削露節目。拂拭生輝光。

刮削して節目を露はし、拂拭して輝光を生ず。

玄斑狀狸首。素質如截肪。

玄斑狸首に狀り、素質截肪の如し。

雖充悅目翫。終乏周身防。

目を悦ばしむる翫に充つと雖も、終に周身の防に乏し。

華彩誠可愛。生理苦已傷。

華彩誠に愛す可し。生理已に傷るるに苦む。

方知自殘者。爲有好文章。

方に知る自ら殘ふ者、好文章有るが爲なるを。

【字解】【一】柯。柯は枝。蒼蒼は青色なり。【二】宴。宴。安臥なり。【三】玄。玄。黒い斑點。狸首の狸は狸に通ず、獸の名。【四】素質。白い地質。截肪は脂肪を切ること。【五】周身。周は圓に通ず、吾が身をすくふこと。【六】生理。生理。生生の理。前の香園中流樹の詩を見よ。

【題義】文柏牀を借りて隠然自ら貶謫を傷んだのである。

【詩意】陵上に一本の老柏があつて、冬でも枝葉が青青としてゐる。朝には風煙を帯ぶる樹である。

が、夜になれば臥牀にすることが出来る。其材質の極めて文彩あるを以て君子の堂にも升るべき値がある。刮削すれば美しい木理が露れ、拂拭すれば光澤が出て、黒い斑は狸の形に似て、白い地質は脂肪のやうである。さて此文柏牀は人の目を悦ばす玩物となることは出来るが、自ら己の身を救ふ術には乏しい。即ち華彩は賞すべきであるが、己の生存能力は害されてゐる。因つて思ふに自ら身を損傷する者は、好文彩の人を悦ばすものがあるからで、何の能もなければ決して害されはしない。

【餘論】 莊子人間世篇に「山は木にて自ら寇するなり。膏は火にて自ら煎るなり。桂は食ふべし、故に之を伐る。漆は用ふべし、故に之を割く云云」とあると同意。

潯陽三題 并序

潯陽三題 并序

廬山多桂樹。湓浦多修竹。東林寺有白蓮花。皆植物之貞勁秀異者。雖宮囿省寺中。未必能盡有。夫物以多爲賤。故南方人不貴重之。至有蒸爨其桂。剪棄其竹。白眼於蓮花者。予惜其不生於北土也。因賦三題以唁之。

【訓讀】 廬山に桂樹多く、湓浦に修竹多く、東林寺に白蓮花有り、皆植物の貞勁秀異なる者。宮囿省

寺の中と雖も、未だ必ずしも能く盡く有らず。夫れ物は多きを以て賤しと爲す。故に南方の人、之を貴重せず。其桂を蒸爨し、其竹を剪棄し、蓮花を白眼する者有るに至る。予其の北土に生ぜざるを惜む。因つて三題を賦して以て之を唁ふ。

【字解】 一、潯陽、郡名。南には九江といひ、唐には潯陽といふ。今の江西省九江縣治。二、廬山、山の名。江西省星子縣の西北、九江縣の南に在る。三、湓浦、湓水の長江に入る處。九江縣の西に在り。修竹は長い竹。四、東林寺、廬山に在る寺の名。方輿勝覽に「晉慧遠法師居廬山東林寺。有白蓮池。與劉道民等十八人同修淨土之法。然遠公招陶潛入社。終不能致。謝靈運求入社。而以心雜不許」とあり。五、宮囿、宮殿の園。省寺は役所。六、白眼、晉の阮籍の故事。睥睨すること。

廬山桂

廬山の桂

偃蹇月中桂。結根依青天。
 天風繞月起。吹子下人間。
 飄零委何處。乃落匡廬山。
 生爲石上桂。葉如剪碧鮮。
 枝幹日長大。根莖日牢堅。
 不歸天上月。空老山中年。

偃蹇たる月中の桂、根を結んで青天に依る。
 天風月を繞つて起り、子を吹いて人間に下す。
 飄零して何處にか委つる、乃ち匡廬の山に落つ。
 生じて石上の桂と爲り、葉は碧鮮を剪るが如し。
 枝幹日に長大、根莖日に牢堅。
 天上の月に歸らず、空しく山中の年に老ゆ。

廬山去咸陽。道里三四千。廬山は咸陽を去ること、道里三四千。
 無人爲移植。得入上林園。人爲に移植し、上林園に入るを得る無し。
 不及紅花樹。長栽溫室前。紅花樹の、長く溫室の前に栽ゑらるるに及ばず。

【字解】(一) 假。驕傲の貌。(二) 匡廬。廬山の別名。周の時仙人匡裕が此山に廬を結んでゐたからいふ。(三) 根。莖。莖も根なり。(四) 咸陽。秦の都、唐の長安の地。(五) 上林園。天子の御苑をいふ。

【詩意】月の中に桂の樹があつて青天の上に根を託してゐた。風が其實を下界に吹きおろし、それが廬山の石の上に落ちて、そこに桂の樹が生えた。剪刀で切つたやうな緑の葉が茂り、枝も幹も日増に伸び根も堅くなつた。竟にもとの天上には歸らずに山中に老いてしまつた。廬山は帝都を距ること三千里もあるので、此桂を帝都に移植する者もないから、天子の御苑にも植ゑらるべき樹でありながら、空しく山中に老いて、美しき花樹のやうに長く溫室の前に栽ゑられて珍重されることもない。賦に惜むべきことだ。

溢浦竹

溢浦の竹

溇陽十月天。天氣仍溫燠。

溇陽十月の天、天氣仍溫燠。

有霜不殺草。有風不落木。
 玄冥氣力薄。草木冬猶綠。
 誰肯溢浦頭。廻眼看修竹。
 其有願盼者。持刀斬且束。
 剖劈青琅玕。家家蓋牆屋。
 吾聞汾晉間。竹少重如玉。
 胡爲取輕賤。生此西江曲。

霜有れども草を殺らさず、風有れども木を落さず。
 玄冥氣力薄く、草木冬猶綠なり。
 誰か肯て溢浦の頭、眼を廻して修竹を看ん。
 其の願盼する者有れば、刀を持ちて斬り且つ束ぬ。
 青琅玕を剖劈して、家家牆屋を蓋ふ。
 吾聞く汾晉の間、竹少うして重んずること玉の如しと。
 胡爲れで輕賤を取つて、此西江の曲に生ずる。

【字解】(一) 玄冥。冬の神。禮記に「孟冬之月……其神玄冥」とあり。(二) 願盼。かへりみる。(三) 青琅玕。琅玕は玉に次ぐ美石。竹を玉に比していふ。(四) 汾晉。山西省の地名。

【詩意】溇陽郡は氣候が暖で十月になつても寒くない。霜は降つても草を枯らすほどではなく、風が吹いても落葉を吹散らすほどではないから、草木がいつも緑である。故に溢浦に竹が生えてゐても誰もふり向いて見る人もない。たまさか願する者があれば、其れは竹を斬つて束ねに来るので、玉にも比すべき青竹を惜氣もなく斬倒して屋根や牆を作るのである。聞けば汾晉地方では竹が少いので玉のやうに珍重するといふが、この竹はなせこんな西江の邊に生えて人から馬鹿にされてゐるのであらう。

氣の毒なことだ。

東林寺白蓮

東林寺の白蓮

東林北塘水。湛湛見底清。
中生白芙蓉。菡萏三百莖。
白日發光彩。清飈散芳馨。
洩香銀囊破。瀉露玉盤傾。
我慙塵埃眼。見此瓊瑤英。
乃知紅蓮花。虛得清淨名。
夏萼敷未歇。秋芳結纒成。
夜深衆僧寢。獨起繞池行。
欲收一顆子。寄向長安城。
但恐出山去。人間種不生。

東林北塘の水、湛湛として底清きを見る。
中に白芙蓉を生じ、菡萏三百莖。
白日光彩を發し、清飈芳馨を散す。
香を洩して銀囊破れ、露を瀉いで玉盤傾く。
我慙づ塵埃の眼、此瓊瑤の英を見ることを。
乃ち知る紅蓮花、虚しく清淨の名を得たるを。
夏萼敷いて未だ歇まず、秋芳結んで纒に成る。
夜深けて衆僧寢ね、獨起きて池を繞つて行く。
一顆の子を收め、長安城に寄向せんと欲す。
但恐る山を出て去つて、人間種うとも生ぜざらんことを。

【字解】【一】白芙蓉。白蓮花なり。【二】菡萏。蓮花をいふ。【三】瓊瑤。玉なり。英はハナヒラ。【四】一顆。一箇。【五】人間。俗世間。

【詩意】東林寺の北邊に清水の湛へた池があつて、中に白い蓮花が三百本ばかり咲いてゐる。その潔白な状は錦囊が破れて香が散じ、玉盤が傾いて露を瀉ぐにも比すべく、俗塵に汚れた目で見るのは愧づかしいやうな氣がする。紅蓮の花が清淨だと呼ばれてゐるのは、虚名に過ぎない。今や萼は伸びて未だ歇まず、芳はますます高くなつた。夜深けて人静つた後に、獨り池を繞つて賞翫した。一箇の實を長安に送つてやつたらと思ふが、此山を去つて俗界に植ゑては或は生えないかも知れない。

大水

大水

潯陽郊郭間。大水歲一至。
閭閻半漂蕩。城堞多傾墜。
蒼茫生海色。渺漫連空翠。
風卷白波翻。日煎紅浪沸。
工商徹屋去。牛馬登山避。

潯陽郊郭の間、大水歲に一たび至る。
閭閻半漂蕩し、城堞多くは傾墜す。
蒼茫として海色を生じ、渺漫として空翠に連る。
風卷いて白波翻り、日煎りて紅浪沸く。
工商屋を徹して去り、牛馬山に登つて避く。

諷諭 東林寺白蓮 大水

況當率稅時。頗害農桑事。
 獨有備舟子。鼓柁生意氣。
 不知萬人災。自覓錐刀利。
 吾無奈爾何。爾非久得志。
 九月霜降後。水澗爲平地。

況んや税を率むる時に當り、頗る農桑の事を害するをや。
 獨り備舟子有り、柁を鼓して意氣を生じ、
 萬人の災を知らず、自ら錐刀の利を覓む。
 吾爾を奈何ともすること無し。爾久しく志を得るに
 九月霜降つて後、水澗れて平地と爲る。

【字解】【一】閭閻 村里。【二】城堞 城壁。【三】蒼茫 ひろびろとしてゐる貌。【四】備舟子 渡船の船頭。【五】錐刀利 微少の利。左傳に「錐刀之末、將盡爭之」とあり。

【題義】大水の時舟子ひとり他人の損害をよそに見て、機に乗じて己の小利を貪るを慨した詩である。
 【詩意】潯陽附近には一年一回必ず大水が出る。すると村里は流され城壁は崩され、一面に茫茫たる大海と化し、商工は家を引揚げ、牛馬は山に登つて避難する。一番みじめなのは納税をひかへて作物を害される農民である。ただ渡船の船頭は機乗すべしとなして得意の色あり、他人の災難をよそに見て己の利を貪つてゐる。俺はお前の火事場泥棒的行爲を如何ともすることは出来ないが、お前の得意も永續はしないぞよ。九月になつて霜の降る時節になれば、水が澗れて平地になつてしまふ。その時こそお前が代つて泣く番だ。

白樂天詩集 卷二

諷諭二 古調詩五言 凡五十八首

續古詩十首

戚戚復戚戚。送君遠行役。
 行役非中原。海外黃沙磧。
 伶俜獨居妾。迢遞長征客。
 君望功名歸。妾憂生死隔。
 誰家無夫婦。何人不離析。
 所恨薄命身。嫁遲別日迫。
 妾身有存沒。妾心無改易。

續古詩十首

戚戚復戚戚、君を送る遠行の役。
 行役中原に非ず、海外の黃沙磧。
 伶俜たる獨居の妾、迢遞たる遠征の客。
 君は功名の歸を望み、妾は生死の隔を憂ふ。
 誰が家か夫婦無からん、何人か離析せざらん。
 恨むる所は薄命の身、嫁すること遅うして別るる日は
 妾が身は存沒有り、妾が心は改易無し。

生爲閨中婦。死作山頭石。生きては閨中の婦と爲り、死しては山頭の石と作る。

【字解】【一】戚戚。憂思の貌。【二】黃沙。沙漠をいふ。海とは青海で蒙古のゴコノールといふ湖水をいふ。【三】伶仃。よるべなき貌。【四】迢遞。遠き貌。【五】誰家。誰に同じ。【六】離析。離別。【七】山頭石。望夫石なり。神異經に「武昌の北山に石あり。狀人の立つが如し。相傳ふ昔貞婦あり、其夫役に從ひ遠く國難に赴く。婦子を携へ此山に饑餓して夫を望み、化して石となる」とあり。

【題義】漢代の古詩十九首に倣つて、遠行の夫を慕ふ妻のことや、旅先で古塚を見て人生の果敢なきを感じたことや、隱遁生活を贊美することや、様様の問題について感慨を述べた作である。

【詩意】戚戚と憂へ悲んで君が遠征するのを送る。君は沙漠を超えて外夷を征伐する爲に行くのである。君は功名を望み勇んで行くが、妾は君の生死をも知らずに獨り残つてゐる。昔から夫婦の離れ住むことがないではないが、ただ嫁すること遅く別れの早い吾が身が恨めしい。たとひ吾が身は死するとも君を慕ふ心は決して渝らない。生きては閨中の婦となり死しては望夫石となつて永く君を望むであらう。

〔一〕

〔二〕

掩淚別鄉里。飄飄將遠行。

涙を掩ひて郷里に別れ、飄飄として將に遠行せんとす。

茫茫綠野中。春盡孤客情。

茫茫たる綠野の中、春は盡く孤客の情。

驅馬上丘隴。高低路不平。馬を驅つて丘隴に上れば、高低路平ならず。

風吹棠梨花。啼鳥時一聲。風棠梨の花を吹いて、啼鳥時に一聲。

古墓何代人。不知姓與名。古墓何の代の人ぞ、姓と名とを知らず。

化作路傍土。年年春草生。化して路傍の土と作り、年年春草生ず。

感彼忽自悟。今我何營營。彼に感じて忽ち自ら悟る、今我何ぞ營營たる。

【字解】【一】飄飄。風に飄る貌。【二】營營。汲汲といふが如し、名利に奔走する貌。

【詩意】涙を拂つて郷里を離れ、飄然として旅路に上り、とぼとぼと廣漠たる春の野原を過ぎ行けば、遺漸ない旅愁を感じる。馬を驅つて山坂を昇り降りして行くと、風が花の香を吹き送り、鳥の聲も慰め顔に聞える。折しも路傍に古塚があつた。いつの世の誰の墓やら知る由もないが、春草は年年生えるが墓の主は永遠に覺めることはない。これが人生の終局だと思ふと、名利に奔走してゐる吾が身がつくづくいやになる。

〔三〕

〔四〕

朝采山上薇。暮采山上薇。朝に山上の薇を采り、暮に山上の薇を采る。

歲晏薇亦盡。飢來何所爲。
坐飲白石水。手把青松枝。
擊節獨長嘯。其聲清且悲。
櫪馬非不肥。所苦常繫維。
豢豕非不飽。所憂竟爲犧。
行行歌此曲。以慰常苦飢。

歲晏れて薇亦盡く。飢來つて何の爲す所ぞ。
坐して白石の水を飲み、手に青松の枝を把る。
節を撃つて獨長く嘯ふ。其聲清うして且つ悲む。
櫪馬肥えざるに非ず、苦む所は常に繫維せらるるを。
豢豕飽かざるに非ず、憂ふる所は常に犠と爲る。
行く行く此曲を歌うて、以て常に飢に苦しむを慰す。

【字解】【一】擊節 一種の板を撃つて歌曲の調子を取る。【二】櫪馬 廐に飼はれてゐる馬。【三】繫維 繋がれてゐる。【四】豢豕 廐に入れて養はれてゐる豕。

【詩意】世を避けて山に入り、薇を探つて食つてゐる。年暮れて薇も盡きると水を飲んで飢を凌いでゐる。青松の枝を把り節を撃つて歌へば、其聲が清らかに亦悲しげである。廐に飼はれてゐる馬は肥えてはゐるが、いつも繩目にかかつてゐる。又廐に入れられてゐる豕はひもじいことはないが、終には犠牲として屠られる。して見れば結局自由な隠者生活が氣樂だ。因つて此曲を歌つて常に飢に苦んでゐる吾が心を慰める。

〔四〕

〔四〕

雨露長纖草。山苗高入雲。
風雪折勁木。澗松摧爲薪。
風摧此何意。雨長彼何因。
百丈澗底死。寸莖山上春。
可憐苦節士。感此涕盈巾。

雨露は纖草を長す。山苗も高く雲に入る。
風雪は勁木を折る。澗松も摧かれて薪と爲る。
風に摧くるは此れ何の意ぞ、雨に長するは彼れ何の因ぞ。
百丈なるも澗底に死れ、寸莖も山上に春なり。
憐む可し苦節の士、此に感じて涕巾に盈つ。

【詩意】雨露は短き草をも生長させるから、山上の苗は高く雲の上に立つてゐるが、風や雪は勁木をも折るので、澗底の松は折られて薪にされてしまふ。一は折られ一は長するは何故であらうか。百丈の松は澗底に倒れ、一寸の苗は山上に時めいてゐる。便佞の徒が榮華に耽つて苦節の士は虐げられるのも此と同じだ。此に感じて覺えず涙が流れた。

〔五〕

〔五〕

窈窕雙鬢女。容德俱如玉。
晝居不踰闕。夜行常秉燭。

窈窕たる雙鬢の女、容徳俱に玉の如し。
晝居れども闕を踰えず、夜行けば常に燭を乗る。

氣如含露蘭。心如貫霜竹。氣は露を含める蘭の如く、心は霜を貫く竹の如し。
 宜當備嬪御。胡爲守幽獨。宜しく當に嬪御に備ふべし。胡爲ぞ幽獨を守れる。
 無媒不得選。年忽過三六。媒無くして選を得ざればなり。年忽ち三六を過ぎ。
 歲暮望漢宮。誰在黃金屋。歳暮れて漢宮を望む、誰か黄金の屋に在る。
 邯鄲進倡女。能唱黃花曲。邯鄲倡女を進む。能く黄花的曲を唱ふ。
 一曲稱君心。恩榮連九族。一曲君の心に稱うて、恩榮九族を連ぬ。

【字解】【一】窈窕 幽間貞靜の貌。每髮は髻の形。【二】嬪御 君主の寢所に侍する女。【三】漢宮 漢の宮殿。【四】黃金屋 后妃の居る宮殿。漢武故事に「武帝爲太子時、長公主欲以女配帝。問曰、得阿嬌好否。帝曰、若得阿嬌當以黃金屋貯之」とあり。【五】邯鄲 趙の都。燕趙には古來美人が多い。倡女は女樂なり。【六】黃花 趙の山の名。史記趙世家の正義に「西河側之山名也」とあり。【七】九族 父族母族妻族。

【詩意】窈窕たる美女がありて容色德行玉の如く美しい。晝は安に闕を踰えて外に出せず、夜は必ず燭を乗つて行く。その行の正しきこと大率此類である。又その氣品精神は蘭の如く竹の如く高尚である。天子の嬪御としても應はしかるべき身でありながら、何故に獨り淋しくひつこんであるのであらうか。誰も媒をしてくれる者がなくて選に漏れ、いつか十八の盛の春も過ぎてしまつたのである。

併し漢宮の嬪御を見ると晩年まで金屋の中にゐるとはした人は一人もなく、趙都邯鄲あたりから倡女を進め、一曲の歌が天子の御意に叫べば、忽ち寵榮を蒙つて恩九族に及ぶやうになつて、忽ち取つて代られてしまふのであるから、其れを思へば始から宮仕をせぬ方が寧ろ賢い仕方かも知れない。

【六】

【六】

栖栖遠方士。讀書三十年。栖栖たる遠方の士、書を讀むこと三十年。
 業成無知己。徒歩來入關。業成つて知己無し、徒歩し來つて關に入る。
 長安多王侯。英俊競攀援。長安王侯多し、英俊競つて攀援す。
 幸隨衆賓末。得廁門館間。幸に衆賓の末に隨ひ、門館の間に廁はるを得たり。
 東閣有旨酒。中堂有管絃。東閣に旨酒有り、中堂に管絃有り。
 何爲向隅客。對此不開顏。何爲ぞ隅に向ふ客、此に對して顔を開かざる。
 富貴無是非。主人終日歡。富貴是非無し、主人終日歡ぶ。
 貧賤多悔尤。客子中夜歎。貧賤悔尤多し、客子中夜歎す。
 歸去復歸去。故鄉貧亦安。歸り去らん復歸り去らん。故郷は貧しけれども亦安し。

【字解】【一】 柄柄 忙しき貌。【二】 悔尤 自ら後悔することや他人のことがめ。

【詩意】余は僻遠の地に生れた一書生であるが孜孜として三十年の間學業を勵み、學業は成つたが誰も認めて用ひてくれる人がないので、徒歩して函谷關に入り長安の都に來た。さすがに長安には王侯が多いので天下の英才が競ひ集つて之に取入る。幸に余も衆賓の末に隨つて門下に列することが出来た。王侯の家には酒もあり管絃もあるが、なせか隅の方に向つて小さくなつてゐる余は酒や音樂によつて憂さをはらす氣になれない。ああ富貴なれば是も非もなく、いつも歡樂を極めてゐられるが、貧賤の者は中夜に歎息せざるを得ない。いつそ故郷へ歸らう。故郷は貧しくはあるが氣樂に暮らせる。

〔七〕

〔七〕

涼風飄嘉樹。日夜滅芳華。

涼風嘉樹を飄し、日夜芳華を滅す。

下有感秋婦。攀條苦悲嗟。

下に秋を感ずる婦有り、條を攀ちて苦に悲嗟す。

我本幽閑女。結髮事豪家。

我本幽閑の女、結髮して豪家に事ふ。

豪家多婢僕。門内頗驕奢。

豪家婢僕多く、門内頗る驕奢なり。

良人近封侯。出入鳴玉珂。

良人封侯に近く、出入に玉珂を鳴らす。

自從富貴來。恩薄讒言多。

富貴より來、恩薄く讒言多し。

冢婦獨守禮。羣妾互奇衰。

冢婦獨り禮を守り、羣妾互に奇衰。

但信言有玷。不察心無瑕。

但言の玷あるを信じて、心の瑕無きを察せず。

容光未銷歇。歡愛忽蹉跎。

容光未だ銷歇せざるに、歡愛忽ち蹉跎す。

何意掌上玉。化爲眼中砂。

何ぞ意はん掌上の玉、化して眼中の砂と爲らんとは。

盈盈一尺水。浩浩千丈河。

盈盈たる一尺の水、浩浩たる千丈の河。

勿言小大異。隨分有風波。

言ふ勿れ小大異りと、分に隨つて風波有り。

閨房猶復爾。邦國當如何。

閨房すら猶復爾り、邦國當に如何なるべき。

【字解】【一】 幽閑 ひとやかな貌。【二】 結髮 結婚すること。【三】 良人 夫。【四】 玉珂 馬具。貝を以て之を作る。色白玉の如し。張華の詩に「乘馬鳴玉珂」とあり。【五】 冢婦 主婦。正妻なり。【六】 奇衰 衰は邪に同じ。【七】 容光 容色

風。劉廷芝の公子行に「古來容光人所羨」とあり。銷歇は衰へること。【八】 盈盈 清淺なり。古詩に「盈盈一水間」とあり。

【詩意】秋風が吹き立つて芳しき花も色あせる時になり、時節の推移を痛感して一人の婦人が枝に倚つて薄命を嗟いてゐる。もと我が身は幽閑貞靜な女であつた。縁あつて豪家に嫁した。豪家には數多の奴婢も居り生活も驕奢である。夫は王侯にも比すべく出入には玉珂を鳴らし駿馬に乗る身になつた。段段富貴になるに隨つて恩情は薄くなり讒言はいやますばかりであつた。主婦たる我は獨り禮儀を守

つてゐるが、羣妾はいづれも奇邪の限を盡した。夫は羣妾の誤つた言葉を信じて、我が正しき心を察してはくれない。遂に容色も衰へないのに先づ愛がなくなつて、嚮には掌中の玉と寵愛したのが、今では目の中の砂のやうに邪魔にする。ああ一尺の流でも千丈の河でも物の道理に二つはない。それぞれの分相應に風波が立つ。一家の夫婦のいざごさは斯の如くである。國家の君臣關係も此と同じだ。

〔八〕

〔八〕

心亦無所迫。身亦無所拘。心亦迫る所無く、身亦拘る所無し。

何爲腸中氣鬱鬱不得舒。何爲れぞ腸中の氣、鬱鬱として舒ぶるを得ざる。

不舒良有以。同心久離居。舒びざるは良に以有り、心を同うして久しく離居す。

五年不見面。三年不得書。五年面を見ず、三年書を得ず。

念此令人老。抱膝坐長吁。此を念へば人をして老いしむ、膝を抱いて坐に長吁す。

豈無盈尊酒。非君誰與娛。豈尊に盈つる酒無からんや、君に非ずんば誰と與に娛まん。

【字解】(一)長吁 長歎なり。

【詩意】心も身も拘束されてはゐないのに、なせ氣がはれられとせぬのであらう。それは他ではない。好いた同志が永く別れ住んで、五六年の間顔も見ず音信も不通であるからである。此事を考へると氣

がくさくさして、めつきり吾が身がふけて行くやうに感ずる。樽に酒がないではないが、好いたお方がゐなくては、酒を飲んでも氣ははれない。

〔九〕

〔九〕

攬衣出門行。遊觀遠林渠。衣を攬つて門を出でて行き、遊觀して林渠を遶る。

澹澹春水暖。東風生綠蒲。澹澹として春水暖に、東風綠蒲に生ず。

上有和鳴雁。下有掉尾魚。上に和鳴の雁有り、下に掉尾の魚有り。

飛沈一何樂。鱗羽各有徒。飛沈して一に何ぞ樂しむ、鱗羽各徒有り。

而我方獨處。不與之子俱。而して我方に獨處り、之子と俱にせず。

願彼自傷己。禽魚之不如。彼を願みて自ら己を傷ましむ、禽魚にだも如かざるこし

出遊欲遺憂。孰知憂有餘。出で遊んで憂を遣らんと欲す、孰か知らん憂の餘有る

【字解】(一)林渠 林の溝。(二)鱗羽 魚鳥。(三)之子 愛する所の男。

【詩意】衣を整へて野山の間に逍遙すれば、春の水がなみなみと湛へて春風が綠の蒲を吹いてゐる。上には鳴きかはす雁があり、下には尾鰭を並ぶる魚がある。かの魚や鳥は各、仲間があつて樂んでゐる。

るのに、自分は獨り離れ住んで思ふお方と俱に居ることも出来ない。つくづく魚鳥にも及ばぬ我が身が恨めしい。遊山にでも出て憂を遣らうとするが、どうしても氣がはれない。

〔十〕

春日日初出。曛曛耀晨輝。

春日日初めて出で、曛曛として晨輝を耀す。

草木照未遠。浮雲已蔽之。

草木照すこと未だ遠からざるに、浮雲已に之を蔽ふ。

天地黯以晦。當午如昏時。

天地黯として以て晦く、當午も昏時の如し。

雖有東南風。力微不能吹。

東南の風有りと雖も、力微にして吹く能はず。

中園何所有。滿地青青葵。

中園何の有る所ぞ、滿地青青たる葵。

陽光委雲上。傾心欲何依。

陽光雲上に委す、心を傾けて何くに依らんと欲する。

【字解】〔一〕曛曛、日の明なる貌。〔二〕當午、正午に同じ。〔三〕青青葵、葵は常に日に向つて傾くものである。

【詩意】春の旭日がヒカヒカと輝いて草木を照すよと思ふまに忽ち浮雲が蔽つてしまつた。天地も爲に暗くなり、當午でも日暮のやうだ。東南風が吹かぬではないが、力弱くて此雲を吹拂ふ由もない。されば園に青青と茂つた葵があつて日に心を寄せてはゐるが、日が雲に蔽はれてゐるから心を寄せる術もない。

秦中吟十首并序

秦中の吟十首 并に序

貞元元和之際。予在長安。聞見之間。有足悲者。因直歌其事。命爲秦中吟。

貞元元和の際、予長安に在り。聞見の間、悲しむに足るもの有り。因つて直に其事を歌ひ、命じて秦中の吟と爲す。

議婚

議婚

天下無正聲。悅耳卽爲娛。

天下正聲無し、耳を悦ばしむれば卽ち娛と爲す。

人間無正色。悅目卽爲姝。

人間正色無し、目を悦ばしむれば卽ち姝と爲す。

顔色非相遠。貧富則有殊。

顔色相遠きに非ず、貧富則ち殊なる有り。

貧爲時所棄。富爲時所趨。

貧しきは時の棄つる所と爲り、富めるは時の趨く所と爲る。

紅樓富家女。金縷繡羅襦。

紅樓富家の女、金縷繡羅襦に繡す。

見人不斂手。嬌癡二八初。

人を見るも手を斂めず、嬌癡、八の初。

母兄未開口。已嫁不須臾。

母兄未だ口を開かざるに、已に嫁して須臾もせず。

綠窗貧家女。寂寞二十餘。綠窗貧家の女。寂寞として二十餘。

荆釵不直錢。衣上無真珠。荆釵錢に直らず、衣上真珠無し。

幾迴人欲聘。臨日又踟躕。幾迴か人聘せんと欲するも、日に臨みて又踟躕す。

主人會良媒。置酒滿玉壺。主人良媒を會し、置酒玉壺に滿つ。

四座且勿飲。聽我歌兩途。四座且く飲む勿れ、我が兩途を歌ふを聽け。

富家女易嫁。嫁早輕其夫。富家の女は嫁し易く、嫁すること早うして其夫を輕んず。

貧家女難嫁。嫁晚孝於姑。貧家の女は嫁し難く、嫁すること晩うして姑に孝なり。

聞君欲娶婦。娶婦意何如。聞く君婦を娶らんと欲すと。婦を娶る意何如。

【字解】(一)貞元、德宗の年號。元和は憲宗の年號。(二)秦中吟、長安は昔樂の都であるから、かく題したのである。(三)職婦、章毅の才調某には貧家女と題してある。(四)人間、世間なり。正色は定色といふが如く、これが美しいと一定した色。卷一の白牡丹の詩を見よ。(五)紅樓、朱塗の樓。(六)金銀、金色の絲。羅襪は薄絹の襪也。(七)不斂手、刺繡する手をやめないこと。一説に傲慢の態と解するは非なり。(八)綠窗、綠色に塗つた窗。(九)荆釵、いばらの花のかんざし。(一〇)踟躕、ためらふこと。(一一)主人、後に聞君欲娶婦とある、婦を娶らうとしてゐる人を指す。良媒は、よいなかうど。(一二)四座、一處、滿座に同じ、そこに列する賓客たちを指す。(一三)兩途、貧富二方面。

【題義】妻を娶るには如何なる家の女を娶るべきかを述べた。

【詩意】天下にはこれぞ正しい音樂と定つたものはない。耳を悦ばせば、それが其人に取つての正しい音樂だ。世間にはこれが美人だと定つた容色はない。目を悦ばせばそれが其人に取つての美人だ。今二人の女があるとする。其容色は格別の相違がなくとも、其家の貧富によつて愛憎の差別が生ずるので、貧家に生れると人から棄てられ、富家に生れるとちやはやされるのだ。富家の女は紅樓の上に住み金絲の刺繡などして暇をつぶしてゐる。人が來ても手を離さず嬌羞を含む。十六になつたばかりの花ならば蕾といふ時に、母や兄が心配せずとも忽ち話がまとまつて縁づいてしまふ。貧乏人の女は綠窗の下にそだつて二十を過ぎても定まつた夫もなく淋しく暮してゐる。荆の花を釵とし著物には眞珠の飾などはない。幾度か人が結納を贈つて嫁に貰はうとはするが、その當日になると二の足をふんで破談にする。今此家の主人は良媒たちを集めて盛宴を張り、婚を議せんとしてゐる。一座の方方よマア姑く飲むのを待ち給へ。今貧富兩道の歌を歌ふからお聴きなされ。富家の女は容易によめに行けるが、行くとすぐに其夫を輕んずる。貧家の女は縁遠いが其姑には孝行だ。さて御主人は妻を娶るさうなが、どちらの家から貰はうと思ひなさるか。

【餘論】源氏物語帚木の卷の有名な雨夜の品定の所にも、或る博士の許に學問などし侍るとて罷り通ひし程に、主人の女ども多かりと聞きたまへて、はかなき序に言ひ寄りて侍りしを、親聞きつけて、杯もちいでて、我が二つの道謠ふを聞けとなん聞えごち侍りしかど、をさをさうちとけてもまから

白樂天詩集 卷二
す云云」と此詩を引いてある。

重賦

厚地植桑麻。所要濟生民。
生民理布帛。所求活一身。
身外充征賦。上以奉君親。
國家定兩稅。本意在愛人。
厥初防其淫。明敕內外臣。
稅外加一物。皆以枉法論。
奈何歲月久。貪吏得因循。
浚我以求寵。斂索無冬春。
織絹未成疋。纒絲未盈斤。
里胥迫我納。不許暫逡巡。

重賦

厚地に桑麻を植う。要する所は生民を濟はんとなり。
生民布帛を理む。求むる所は一身を活さんとなり。
身外征賦に充て、上以て君親に奉ず。
國家兩税を定む。本意人を愛するに在り。
厥初は其淫を防ぎ、明に内外の臣に敕す。
稅外一物を加ふるをば、皆枉法を以て論す。
奈何ぞ歲月久しく、貪吏因循するを得たる。
我を浚うて以て寵を求め、斂め索むること冬春無し。
絹を織りて未だ疋を成さず、絲を纒つて未だ斤に盈たず。
里胥我に迫つて納めしめ、暫くも逡巡するを許さず。

歲暮天地閉。陰風生破村。
夜深煙火盡。霰雪白紛紛。
幼者形不蔽。老者體無溫。
悲喘與寒氣。併入鼻中辛。
昨日輸殘稅。因窺官庫門。
緡帛如山積。絲絮似雲屯。
號爲羨餘物。隨月獻至尊。
奪我身上暖。買爾眼前恩。
進入瓊林庫。歲久化爲塵。

歲暮れて天地閉ち、陰風破村に生ず。
夜深けて煙火盡き、霰雪白うして紛紛たり。
幼者は形蔽はず、老者は體温なる無し。
悲喘と寒氣と、併せて鼻中に入りて辛し。
昨日殘税を輸し、因つて官庫の門を窺ふ。
緡帛山の如く積み、絲絮雲に似て屯る。
號して羨餘の物と爲し、月に隨つて至尊に獻す。
我が身上の暖を奪ひ、爾が眼前の恩を買ふ。
瓊林の庫に進め入れ、歲久しうして化して塵と爲る。

【餘論】(一) 重賦 才調集には無名税と題してある。(二) 征賦 税なり。君親の親は附けたりである。(三) 兩稅 夏と秋とに納むる税法。徳宗の建中元年に楊炎が宰相の時に定めた。(四) 淫 すべて度に過ぎること。ここは一定の税法以上に税を取ることを。(五) 内外 中央政府の官吏を内といひ、地方官を外といふ。(六) 因循 前からの悪例に倣ふこと。(七) 無冬春 冬でも春でもかまはずに税を取立てる。(八) 里胥 村長。(九) 天地閉 禮記月令篇に、「天地不通、閉塞而成冬」とあり。(一〇) 破村 荒廢した村。(一一) 殘稅 納め残りの税。(一二) 羨餘物 つかひのこりの品。當時役人が天子に媚びる爲に、人民から不當な税を取

り、羨餘と稱して獻上することが流行した。【三】至尊 天子。【四】爾 汝なり。官吏を指す。【五】瓊林庫 德宗皇帝が奉天の行在所にゐた時に建てた庫の名。

【題義】重税の弊害を述べた。

【詩意】我我人民が大地に桑や麻を植ゑるのは人人を濟はんがためだ。人人が布や帛を織るのは吾が身を養ふ爲だ。一身を養ふ必要以外の分は税として君に奉るのである。我が國家が兩税の法を定めたのは、人民を愛するからである。故に其初に不當の税を取らないやうに、内外の役人に敕を下して規定以外に一物でも取つたならば、法規を破つた者として處罰すると戒めてある。然るに貪吏どもは長い間の惡例に倣ひ、いやが上にも我我から搾り取つては君に獻じて君寵を求め、冬でも春でもお構なしに取立てる。絹を織つて未だ一疋とまとまらず、絲を繰つて未だ一斤にならないのに、村長がうるさく納税を催促し一刻も猶豫しない。冬になつて北風が吹荒び、夜が深けて火の氣もなく、雪や霰がバラバラ降るのに、老幼ともに著物もなく、悲歎と寒氣とが一時に鼻の中に飛込んで来る。昨日納め残りの税を納める爲に役所へ行つて御庫の門をのぞいて見た所が、繒や絮が山のやうに積んであつた。これは貪吏どもが羨餘だと稱して月月至尊に獻上し、我我の身から剝取つて自分達の君寵を買うたもので、つまりは御庫の中で朽ち果ててしまふのである。

傷宅

傷宅

誰家起甲第。朱門大道邊。
豐屋中櫛比。高墻外廻環。
纍纍六七堂。棟宇相連延。
一堂費百萬。鬱鬱起青煙。
洞房溫且清。寒暑不能干。
高堂虛且迴。坐臥見南山。
繞廊紫藤架。夾砌紅藥欄。
攀枝摘櫻桃。帶花移牡丹。
主人此中坐。十載爲大官。
厨有臭敗肉。庫有貫朽錢。
誰能將我語。問爾骨肉間。
豈無窮賤者。忍不救飢寒。

誰が家か甲第を起す、朱門大道の邊。
豊屋中に櫛比し、高墻外に廻環す。
纍纍たり六七堂、棟宇相連延す。
一堂費百萬、鬱鬱として青煙起る。
洞房温かにして且つ清し、寒暑干す能はず。
高堂虚しうして且つ迴なり、坐臥南山を見る。
廊を繞る紫藤の架、砌を夾む紅藥の欄。
枝を攀ちて櫻桃を摘み、花を帯びて牡丹を移す。
主人此中に坐し、十載大官と爲る。
厨に臭敗の肉有り、庫に貫朽の錢有り。
誰か能く我語を將つて、問はん爾が骨肉の間。
豈窮賤の者の、忍んで飢寒を救はざる無からんや。

如何奉一身。直欲保千年。如何ぞ一身に奉じ、直に千年を保たんと欲する。
不見馬家宅。今作奉誠園。見ずや馬家の宅、今奉誠園と作るを。

【餘論】(一) 傷宅。才調集に傷大宅と題してある。(二) 甲第。大邸宅。(三) 朱門。朱塗の門。(四) 豐屋。大きな家。(五) 豪華。かさなる貌。(六) 洞房。奥深き部屋。(七) 南山。終南山。長安の南にあり。(八) 紅藥欄。紅の芍薬の花壇の欄。欄は石臺。(九) 櫻桃。さくらんぼの實。(一〇) 帶花。花のついたまま。(一一) 十載。十年。(一二) 貫朽錢。絹のまま錆びついた錢。(一三) 爾。主人を指す。(一四) 馬家。馬橋及び其子暢の家。(一五) 奉誠園。德宗の時、馬暢の獻じた邸宅を園とし奉誠園と名づけた。長安の安邑里に在った。

【題義】大邸宅を營んでも永く保たれないことを傷み悲んだのである。

【詩意】誰の家だか知らないが立派な大邸宅がある。大道に面して朱塗の門が建てられ、中には大きな棟が立ちならび、その周圍を高い牆がめぐらしてゐる。堂宇一つでも恐らく百萬の金が掛つてゐるであらう。それが幾つとなく雲のやうに聳えてゐる。さて奥深い部屋は冬温く夏涼しく出来てゐて、暑さも寒さも侵す能はず。高く見晴らしがよく出来てゐて、坐つたままで終南山が見える。長廊のまはりには藤棚があり、階段の兩側には芍薬の花壇がある。枝を引つれば櫻桃を摘むことも出来るし、花のついたまま牡丹を移植などしてある。此家の主人は十年間大官をつとめてゐるので、厨には喰ひ残りの肉が腐るほどあり、庫には絹のまま錆びついた錢が積み重ねてある。さて誰か私の言葉（以

下述ぶる所)を以て此家の主人に問ひ質してくれる人はあるまいか。「君の親族の中に貧窮に泣いてゐる者があるのに、君は平氣で救ひもせずに見物をしてゐはしないか。君は自分一人豪奢を極めて、永久に續けて行けると思つてゐるのか。かの一時榮華を極めた馬氏の邸宅も、今では朝廷の所有に歸して、奉誠園となつてゐるではないか」と。

傷友

傷友

陋巷孤寒士。出門苦恓恓。陋巷孤寒の士、門を出でて苦た恓恓。
雖云志氣高。豈免顔色低。雖云志氣高しと云ふと雖も、豈顔色の低きを免れんや。
平生同門友。通籍在金閨。平生同門の友、籍を通じて金閨に在り。
曩者膠漆契。邇來雲雨睽。曩者には膠漆の契あり、邇來雲雨睽く。
正逢下朝歸。軒騎五門西。正に朝を下りて歸るに逢ふ。軒騎五門の西。
是時天久陰。三日雨淒淒。是時天久しく陰り、三日雨淒淒。
蹇驢避路立。肥馬當風嘶。蹇驢路を避けて立ち、肥馬風に當つて嘶く。

廻頭忘相識。占道上沙堤。頭を廻らして相識を忘れ、道を占めて沙堤に上る。

昔年洛陽社。貧賤相提攜。昔年洛陽の社、貧賤相提攜す。

今日長安道。面を對して雲泥を隔つ。今日長安の道、面を對して雲泥を隔つ。

近日多如此。非君獨慘悽。近日多くは此の如し、君が獨り慘悽なるのみに非ず。

死生不變者。唯聞任與黎。死生變せざる者は、唯聞く任と黎とのみ。

【餘論一】(一) 傷友 一に傷三苦節士と題し、才調集には膠漆契と題してある。(二) 憤憤 頗ひ憤む貌。(三) 金門 金馬門。漢の宮門の名。籍は名札。籍に姓名や人相などが書いてある。それを宮門に懸けておいて、自由に入出入を許すことを通籍といふ、即ち仕官すること。(四) 膠漆契 親密なる交。(五) 通來 通は近なり。ちかごろ。(六) 軒騎 車馬。五門は宮殿の門。路門・應門・車門・庫門をいふ。(七) 蹇蹇 びつこな驢馬。(八) 沙堤 國史補に「凡拜相、府縣載沙堤路、自私第至於城東街、名曰沙堤」とあり。大臣の通路をいふ。(九) 洛陽社 社とは交友の團體。(十) 君 孤寒の士を指す。(十一) 任與黎 白樂天の自註に「任公叔、黎逢」とある。黎逢は大曆十二年の進士である。

【題義】貧賤の時には親しく交つた友が、一旦立身してえらくなると、振り向いても見なくなる、交情の輕薄なことを傷んだのである。

【詩意】陋巷の中に一人の貧士が住んでゐる。門を出ても浮かぬ顔をしてゐる。氣位だけは高いが一向男前は揚らない。其友が官に就いて金馬門に出入するやうになつた所が、嚮には膠や漆のやうに親

密であつたのが、近來は雲や雨のやうに分れ分れになつてしまつた。或る日其友が朝廷から退出するので御門の西を馬車で通るのに出逢つた。其時は天が久しく曇つて三日も雨が降りつづいた時であつた。こちらでは蹇の驢馬を脇に寄せて道を譲つたが、其友は肥馬を春風に嘶かせ、わざと顔を背けて昔の讒合を忘れたかの如く、沙を敷きつめた道を我物顔に上つて往つた。昔は洛陽にゐて友垣を結び貧賤の間に助け合つた仲だが、今日長安の道では、たとひ顔は合せても月と鼈ほど身分が違ふやうになつたので振向いても見なくなつてしまつた。併し近頃の交際といふものは大抵此類で、君だけがはじめを見るのではない。死生の變に際會しても昔の友情を變へないのは、任公叔と黎逢ぐらゐりなのだ。

不致仕

不致仕

七十而致仕。禮法有明文。七十にして致仕するは、禮法に明文有り。

何乃貪榮者。斯言如不聞。何ぞ乃ち榮を貪る者、斯言聞かざるが如くする。

可憐八九十。齒墮雙眸昏。憐む可し八九十、齒墮ちて雙眸昏し。

朝露貪名利。夕陽憂子孫。朝露名利を貪り、夕陽子孫を憂ふ。

掛冠願翠綬。懸車惜朱輪。冠を掛けんとして翠綬を願み、車を懸けんとして朱輪を惜む。
 金章腰不勝。僂僕入君門。金章腰勝へず、僂僕して君門に入る。
 誰不愛富貴。誰不戀君恩。誰か富貴を愛せざらん、誰か君恩を戀はざらん。
 年高須告老。名遂合退身。年高うして須く老を告ぐべし、名遂げて合に身を退く。
 少時共嗤誚。晚歲多因循。少き時は共に嗤誚すれども、晩歲多くは因循すべし。
 賢哉漢二疏。彼獨是何人。賢なるかな漢の二疏、彼獨り是れ何人ぞ。
 寂寞東門路。無人繼去塵。寂寞たる東門の路、人の去塵を繼ぐ無し。

【詩意】(一) 不致仕。才調集に合致仕と題してある。致仕とは官を辭し退くこと。(二) 禮法。禮記曲禮上篇に「大夫七十而致仕」とあり。註に「致其所掌之事於君、而告老」とあり。(三) 斯言。禮記の明文。(四) 朝露。人生の果敢なきこと。(五) 夕陽。老年をいふ。(六) 掛冠。辭職すること。翠綬は冠の組。(七) 懸車。車を懸けて復用ひざることを。辭職するをいふ。朱輪は朱塗の車。(八) 金章。金印。(九) 僂僕。背をかがめること。老態なり。(一〇) 告老。引退すること。(一一) 因循。ぐづぐづしてすわるること。(一二) 二疏。疏廣・疏受の二人、漢の宣帝の時太子の傅となつたが、年七十になつたので官を辭して故郷に歸つた。其時洛陽の東門外に見送る人の車が數百乘あつたといふ。
 【題義】老年になつても官職に戀戀として勇退しない者を刺つたのである。
 【詩意】七十になれば官を辭するといふことは禮記に明文があるのに、榮華を貪る者は禮記の明文などとは聞いたこともないやうな風をしてゐる。八九十になつて齒は墮ち目は見えなくとも朝露の如き身を忘れて名利を貪り、明日をも知らぬ年で子孫のことを心配してゐる。たまには引退しようと思つても又未練が出て、金印の重さに勝へずに腰をかがめて御門をはひつて行く。誰とて富貴を愛し君恩を希はない者はないが、年老い名遂ぐれば勇退するのが當然である。若い時には勇退せぬ人を誚つた身が、自分が年老いと矢張いつまでも居据らうとする。かの漢の疏廣・疏受の二人は見上げたものだ。あれから後には東門外の路もひつそりとして、其跡を繼ぐ者は一人もない。

【餘論】汪立名は「八朝偶雋を按するに、元和の初、杜佑司徒となり、年七十を過ぐるも猶ほ未だ老を請はず。裴晉公時に知制誥たり。高郢の致仕するに因りて詞を令して曰く、年を以て致仕するは、抑前聞あり。近代廉寡く斯道に由ること罕なりと。蓋し佑を譏るなり。公(白樂天)の此詩の指す所當に裴と同じかるべし。盛に當時に傳誦せらる。厥後杜牧之毎に公に於て不足の語多し。之を詩篇に形し、李戴の言に託し口を極めて誣誚す。文章家の報復畏るべきこと此の如し。宋祁察せず、據りて以て公を論するは過れり。牧之は佑の孫なり」と謂つてゐる。又唐宋詩醇には「朝露貪名利の二句、之を淵明集中に入るも、幾んど以て辨するなし。或は樂天を淺易なりと謂ふも、豈に其れ然らんや」と評してゐる。

立碑

立碑

勛德既下衰。文章亦陵夷。

勛德既に下り衰へ、文章亦陵夷す。

但見山中石。立作路旁碑。

但見る山中の石、立てられて路傍の碑と作る。

銘勳悉太公。敍德皆仲尼。

勳を銘すれば悉く太公、德を敍すれば皆仲尼。

復以多爲貴。千言直萬賞。

復た多きを以て貴しと爲す、千言直萬賞。

爲文彼何人。想見下筆時。

文を爲る彼何人ぞ、想ひ見る筆を下す時、

但欲愚者悅。不思賢者嗤。

但愚者の悦ばんことを欲し、賢者の嗤ふことを思はず。

豈獨賢者嗤。仍傳後代疑。

豈獨り賢者の嗤ふのみならんや、仍後代の疑を傳ふ。

古石蒼苔字。安知是愧詞。

古石蒼苔の字、安んぞ是れ愧詞を知らん。

我聞望江縣。麴令撫惇嫠。

我聞く望江縣、麴令惇嫠を撫すと。

在官有仁政。名不聞京師。

官に在りて仁政有れども、名は京師に聞えず。

身歿欲歸葬。百姓遮路岐。

身歿して歸葬せんと欲す、百姓路岐に遮り、

攀轅不得歸。留葬此江湄。

轅を攀ちて歸るを得ず、留めて此江湄に葬る。

至今道其名。男女涕皆垂。

今に至るまで其名を道へば、男女涕皆垂る。

無人立碑碣。唯有邑人知。

人の碑碣を立つる無し、唯邑人の知る有るのみ。

【字解】 一 立碑 才調集には古碑と題してある。 二 勳德 勳は勳の古字。 三 陵夷 次第に衰へること。 四 太公 周の武王を輔けた太公望。 五 仲尼 孔子の字。 六 萬賞 賞は財なり。萬金といふが如し。 七 愧詞 愧づべき詞。 八 望江縣 安徽省安慶府望江縣治。 九 麴令 令は縣令。麴は其姓、名は信陵。惇後とは孤獨者并に寡婦。 一〇 路岐 分れ路。

【題義】 世に寸功なき者が安に碑を建てて後世に傳へようとする愚を嗤つた作である。

【詩意】 近頃は人の勳功や德行が大分下落して來て、勳德を記述する文章も値打が下つて來た。所で山の中の石が石碑としてどんどん路傍に立てられる。石碑にどんな事が刻んであるかと思れば、勳功を記すれば誰も彼も太公望でもあるやうに、德行を記すれば猫も杓子も孔子のやうにほめちぎつてある。又文句の長いのを貴んで千字の文章に萬金も禮を拂つて書いてもらふ。碑文の作者はどんな人かといふと、察するに筆を下す時は唯愚人の悦ぶやうに書かうとばかり考へて、賢者に嗤はれることは少しも考へないらしい。だから賢者の笑草になり、又針小棒大に書いて後世に疑を遺すことにな

る。されば古びた石に苔の蒸してゐる碑文は、實は碑の主人に取つては愧づべき文字であるといつてよいのだ。聞けば望江縣には麴信陵といふ縣令があつて、寄邊なき人を憐み仁政が多かつたが、其名